

Inventory of Zenichi Kawazoe Scrapbooks

Scrapbook No.: BOX 39 #3

Scrapbook Title:

Primary Date range: 1950~1969

Dates outside of range:

Eastern sequence:

Western sequence: YES

Contents description: HISTORY OF OKINAWA IMMIGRATION, LIST OF NAMES OF JAPANESE CONSULANT, JAPANESE LANGUAGE EDUCATION IN HAWAII, ORBITUARIES, POETRY, LIST OF THE REVERANDS THAT SERVED IN HILO HONGWANGI, HAWAII - OKINAWAN IMMIGRATION 65th YEAR ANNIVERSARY, FIRST OKINAWAN IMMIGRANT TO HI (ORBITUARY), JAPANESE DOLLS FROM HIROSHIMA

PHOTOS: YOSHIO KOIKE

NEWSPAPERS: HAWAII TIMES, HILO TIMES, HAWAII HOCHI, OSAKA ASAHI SHINBUN,

Inventory of Zenichi Kawazoe Scrapbooks

Scrapbook No.: BOX 39 #4

Scrapbook Title:

Primary Date range: 1947~1951

Dates outside of range:

Eastern sequence: YES

Western sequence:

Contents description: SONGS WRITTEN BY KAWAZOE, LIFE ON PLANTATION, LIFE AT INTERNMENT CAMP, LIFE DURING WWII, HONOLULU (LIFE AT)

SOME ARTICLES WRITTEN BY KAWAZOE

~~PHOTOS~~

(mixed)

1947-1951

gift of K. Kawazoe
3/89

Scrapbooks

Add to: Hawn
Rare

(per M. Chou)

Sumigated - Jan. 1989

Bookplates attached

he makana ā

University of Hawaii at Manoa Library

Kenpu KAWAZOE



G/E
L

The image shows the front cover of a book. The cover is a rich brown color with a complex, embossed pattern that resembles marbled paper or a stone texture. The spine of the book is visible on the left side, made of a dark, textured material, possibly cloth or leather, and features two white circular fasteners. A small, rectangular white label is affixed to the bottom left corner of the cover, containing the handwritten text "BOX 39 #4".

BOX 39 #4





夜間 千人小屋

海 里 味 朗

日本機襲來に備えての訓練が毎日のやうに行はれた。エイヤ・レイド・サイレンが氣味悪く鳴り響くミ、インタニー達は手早くガス・マスクを被つてクモの子を散らすやうにバラツクを飛び出して、一番近い塹壕に飛び込むのだった。

砂島生活、初期の一コマである。塹壕は既に米大陸に護送されて島にはない先輩達の手になつたもので、側面の砂が崩れ落ちぬよう諸所に防壁用の古トタンが見受けられた。

明治二十八年(一八九五)十一月十八日チャイナ號で來布、山林武一等と墨黒々と書かれたらしい落書が、今は雨に洗はれて読みとり難いほどになつてゐる古トタンであつた。

千人小屋の壁に用ひられてゐる古トタンです、それが私達の來た時、山のやうに積み重ねられてゐた。思ふに戦争になつて解体されたらしい。

千人小屋と言ふのは、検疫所の異名である。長さ三百呎もあつた大きな建物二棟から出來てゐると一夕、この千人小屋の悲しい思ひ出を語つてくれた老翁があつた。布哇に渡つて一儲けし錦を故郷に飾ろうと、所謂青雲の志しに燃えて布哇に來た

移民達は、全部この島の検疫所に收容されたものだ。蠶棚式に五段になつてゐる寢臺に、長い航海に疲れた體を横えたものだつた。布哇に着くには着いたが何時出所出來るのか、聞けば加哇島のキラウエア耕地は非

常によい所と言ふが、布哇島のペアウハウ耕地は此世の地獄と言ふそだ。明日の解らない測り知れぬ不安、中には病氣になつて此の検疫所で死んだ者もある。そうした移民一人々々の感懐、そして自分の出身地、來布年月日、氏名なきが此のトタン一杯に落書されてゐたのだつた

人間の感情を少しも飾らず書きつけた此の布哇移民史の一頁々々が、このトタン一枚々々だつたと云ふのである。インタニー達の中には、或は自分の筆跡もあるだらうと塹壕掘りの一鍬々々に、言ひ難い感傷を覺えたささいな事だつた。又インタニーの中には此の移民の子供も含まれて居り、父子二代に亘る因縁の島、砂島も言えるのだつた。

昔、千人小屋
今、監禁キャンプ
同じ月見る
島の上

親はホレホレ
わしやインタニー
親子二代で
苦勞する。

砂島監禁所の初期は何も彼も不備の中にわけても醫藥や醫療器が殆ど皆無と言つてよかつた。島の一角の小さいウエア・ハウスに藥品らしいもの、醫療器がある、或は役に立つかも知れないと所長により此處に案内されたインタニーの日系ドクトルがあつた。古い藥品の使用に堪えぬのは勿論、その醫療器は全部死体解剖用のものだつた。

大尉殿、これは生きた人間には用の無い死んだ人間にのみ用のあるものです。説明した、それが皮肉に響いたのか大尉の顔が非常に不機嫌だつた、と云ふ事を後になつて其の日系ドクトルから聞いた事がある。

遙々青雲の志しに燃えて來布した我等の草分けにして、この検疫所で落命した者が何人ゐた事だらう。そして此の先輩達がこの器具の御世話になつたのではあるまいか。想到した時、思はず慄然たらざるを得なかつた。

島に聳ゆる
火葬場の煙突
仰ぐ心の曇り勝ち
火葬場だつたと云ふ廢墟、残つてゐるのは高い煙突のみ、これが我々のゐるバラツ

クからも遠望出來たものだつた。世界の日本人中で布哇の日本人ほど幸福な日本人はゐない、と云ふ事を戦後になつてよく聞かされる。その恵まれた我等の生活も昔にさかのぼる、何れもイバラの道ならざるはなかつたのである。一九五一年の四月、この稿を草しながら砂島の一部が新監獄の敷地として物色されてゐると云ふ新聞記事を見た。千人小屋、戦時監禁所、そして新監獄、……明るい方面よりも暗い方面の多くが運想される砂島ではある。

常々思ふ
一九五一年五月



夜間軍人團制帽

海里味朗

砂島の老木、キヤベの枝の末に発見した巢立をしたばかりの山鳩の雛。メス・ホルの一角で母猫に抱かれてスヤ／＼と眠る数匹の仔猫。さてはホノウリウリの溪間に巢立つた数羽の目白の雛が親目白に連れられてバラツクの屋根傳ひに飛んだあの覺つかない姿。それが夕方でもあると、ツイ家に残してゐる可憐な子供達を思ひ出させるのだつた。

ジープ、バス、飛行機、ボート、トミーガン、指輪、ヨーヨー、貝のネックレスや籠等が盛んにキャンブ内で造られたのも、面會日に來る子供の喜び顔を一目見たいばかりの親心に過ぎなかつた。

子供が學校の先生から父の職業を問はれた母親に訴えた、聞いた時は我ながらハツミした。他人のどんな強意見でも耳に入らぬ自分だつたが、この幼い者の一言には完全に參つて了つた。

娑婆にゐる時、遊び人で通つたエー氏は斯う告白しながらキャンブで盛んに玩具を造つた。自分の子供にやる物ばかりでなく友人の子供の分まで造つたものだ。外界から遮断された生活、一部の人からは罪人視さえされた抑留生活の中に、こんな美しい

愛情の花が咲くのだつた。

子供達との面會日は何んにも言えぬ楽しいものたつたが、さて定め時間が來て別れる時に、ダデー・バイ／＼と言はれたり一緒に歸らうよ、等と言はれる涙又新しいものがあつた。

隣のお父さんは何時も家にゐるが、うちのお父さんは家にゐない子供が氣がついた時、子供がヒガミはしないかと思ふのだよ。面會時間中、抱いてやつた子供の顔、軽い腕の痛みをなつかしみながらインテリのピー氏がシミン／＼語るのであつた。

あの一緒に歸らうよと言ふ何も知らない無邪氣な言葉には、どんな荒くれ男でも惱まされたものだつた。

妻の話による、宅の庭のバイヤの苗木の芽が、ボキリ何者かに折られてゐたと言ふのである。この間の面會日、庭のバイヤが早く大きくなるように水などやつて可愛がるのですよと話したのを子供が早合點し、早く大きくなるように芽を引つ張つたと言ふのだ。可愛いではないか。

斯う語つて、ホノルルの或る方角に目をやつたのは本願寺の大巴開教使だつた。

面會日の夕方のメス・ホルでは、こんな風の土産話がインタニーの間に交換されたものだつた。

商業時報の土屋主幹は、キャンブではスシヤさんで通つてゐた。係のサーゼントがツチャミ發音出來ず何時もエス・スシヤと呼んだのだつた。

このスシヤさんが又子供煩惱で、慣れない手つきでトミー・ガンなを造つたものだつた。

ペン以外の物を握つた事のない手に、鋸を握り、ハンマーを振つたのも親なればこそである。

スシヤさんは他のニツク・ネームをアメリカン・リジョンと言つたものだ。家を出る時、後に残す子供に對し、お父さんは監禁されるのだよは親の口から言えたものではない、兵隊に行くのだと言つて別れたのだ、と或る夕方しみる、語つた土屋さんだつた。

面會日の度毎、アメリカン・リジョンの色彩鮮やかな制帽を被つて愛兒に面會した土屋さんに對し、此處まで來て在郷軍人團の制帽でもあるまい、早く出たい爲かも知れぬなど、皮相な批評を投げたものもあつたが、土屋さんは敢て辯解しようとはつこめなかつた。

キャンブに生れた猫の仔に三度の食事を運んだ人達、谷の側面のコア林で拾つた親無しカーデナルの雛に、面倒な生餌まで與えて是れを育てた人達……

何時自由な體になれるか知れない焦燥、不安な生活の中で、自由な世界で見られない美しい事の數々が行はれたのである。

七月廿四日
一九五一年四月

1951三月

◇

残れる床のほの白く
淡く咲き出た晝顔よ
夕餉の煙、今はなく
呼べど應えぬメス・ホール

我が物顔に生ひ茂る

コアに隠れしイチジクよ

植えたる主を偲んでか

結びたる實の三つ、四つ

軍靴の響き、下駄の音

今は昔の想ひ出よ

たゞ亭々三梅檀の

並木は高し、青い空。

(一九五一年三月)

1951三月



夜話 溪間

再會の約束

やくそく

海里味朗

いよく終戦、インタニー全員が嬉々として、一人々々のホームの戸口まで送りこま

再會の時は互にホノウリウリを語らう、と送別會の席上、何度練り返された言葉であつた事か。

あの溪の側面に生ひ茂つたコアの灌木を切る日課が續いた當時の出来事だ、大きなケンナイフを手に、キャンプを出て行くインタニー達の姿も一つの奇觀だつた。

その頃キャンプに坊主ミあだ名された青年がゐる。日本で禪寺の小僧をつとめたことがある云ふ變つた経歴の持主だつた。

谷には木の根元や岩陰など方々に蜜蜂の巢があつた。永い間續いたであらう静かな

出されたアメ色の巢から、ボタリ／＼流れ落ちるミツを吸つたのも、野趣満々たる懐かしい想ひ出である。

自由云ふものが如何に尊いものか、自由を失つたものでなければ解らない。監禁生活から得た尊い体験は多いが、これもその一つである。

一九四九年の一月二日、私はホノウリウリの廢墟を訪れたが、真につわ者共の夢の跡といふ感が強かつた。あれから又二年を過ぎて、更にこの感じの切々たるものがある。

再會の時はホノウリウリを語らうと誓つた先輩や同僚達のため、夢の跡の有りの儘を報告して約束の一端を果したい。

キャンプのあつた中央に、下駄で踏み固められた大通りを白く帯のように残して、あたり一面コアミ唐胡麻ミペン草の叢林と化し去つてゐる。

その中に、仲間の人達が當時キャンプ美化のため植えたミロ(砂島から移植)。パンヤン、モツクオレンチが雑木群を抜いてスク／＼延びて居り、例の便所近くのイチヂクには白い實が二つ、三つ附いて小鳥のついでにばんだ跡も見られない。

ここに嘗て疾走するジープあり、元氣よく鳴る軍靴ありて、一時何百人と云ふ多数が生活せり、ミ誰が信じ得ようぞ。

折柄の降雨期に多少水をためてゐるらしいあのキャンプ裏の谷川も、人間の背丈ほさもある草に蔽はれて何處が川やら岸やら見さかひがつかない。

又、床の四方から晝顔の蔓が延びて白い部分が段々せばめられてゐる。

ここに生活した人々も、それ／＼古巢に歸つて既に幾星霜、この谷も戦争前の自然を取戻しつゝ、あるのだ。

手紙 1957年3月

○ 晝を欺く満月に
歩くガードの靴の音
パイプ・ワヤーに囲まれて
幾世見上げた青い月

○ 小鳥の聲に夜が明けて
今朝も柏手聞えてる
裏の芋菜に露光り
コアの新芽の青い事

○ 谷に架けたる長い橋
カラカラカラと下駄の音
朝晩眺めた遠い山
山の彼方の甲戀し

○ 庭先ちかく梅檀の
並木の花は紫に
岩に腰かけ物思ふ
人影淡し谷の晝

二九五一号
三月
二月

三月



夜間 溪間 せんだんの花

樋里 味朗

何處の谷間でもそうだが、谷間云ふものは朝、太陽を迎えるに遅く、夕方太陽を見送るに速い。夜が長く晝の短い世界、書きあつたので、どんなに深い谷かと思つてゐた所、實際に行つて見て、布哇到る所に見る普通の谷に過ぎない事を發見した、ミホノウリウリを評した人があつた。

普通の浅い谷でも、いかめしいバープ・ワイヤーに圍まれて谷底から一步も出られない立場に置かれた者から見れば、晝の短い世界だつたらしい。

一九四三年三月二日、第八回船を送り出して砂島收容所は閉鎖され、残つた人達は翌三日、ホノウリウリに移送されたのであつた。

一口に言へば赤い地肌にはサポテンニコアの灌木が繁茂する谷だつた。キャンプの建つてゐる谷底には皆で甘蔗が作られてゐた。ミホノウリに枯れた甘蔗の莖や葉が散らばり、バラツクの荒板の床には方々に泥靴の跡が見受けられた。

移轉した日は終日バラツクの掃除や、その周囲の清掃に過ぎた。誰かホノウリウリでなくホネオリオリだと言つて苦笑した。一日の仕事が済むとキャンプ内の路上

に敷かれた海底砂の中から貝を掘出す者がそこにも、にも見え、その上に谷の第一夜のトバリが静かに降りて來た。

砂島に於ける我々の資格はブリゾナー・オブ・ウォーになつてゐるが、谷に來てからの資格はインタニー・オブ・ウォーになつてゐる事だつた。

大陸行きを免れて、しばらく此の谷に落ちてこゝになつた事を、どんな風に家族に通知するか、その夜は英語の手紙の文案を練る癖が、あちこちに聞えてゐた。

この谷の生活で忘れられないのは谷に架かつた長い橋であつた。橋を云つても元來は甘蔗畑に送る水のため造られたコンクリート製の大手で、その上に材木を並べて人間が通れるようになってゐた。

メス・ホールに行くのには此の橋を渡らねばならず、カラコロコといふ下駄の音は谷底の單調を破る唯一の懐かしい音楽だつたのである。

メス・ホール映畫の上映される夜、橋の手前のゲートが開かれると、インタニー達が脱兎の如く此の橋を渡る光景を見る度毎他日、インタニー生活を映畫にでもする時は脱落することの出来ぬ一駒だ、と思つた事だつた。

メス・ホールの仕事を済まして、これから一シャワーを浴びよう。此の橋を渡り乍らフト右手に目をやるに、ワイアナエ連峯が紫の影を見せて居り、あの山のあたりには自由人の社會があるのだと思はず感傷的になることゝあつた。

又、橋の下から奥へかけて可成り廣い所があり、其處には不遇勇士が到着する度毎夥しいテントが立ち、彼等をまかなふメス・ホールの仕事も忙しくなるのだつた。

一日にして生れたテント村、橋の上から見れば其のテントの前に早くもサポテンを移植したり、鳳梨のタツプを植えたりして急造の庭さえ出来てゐるのだつた。

テントをたゝんで、あたりを掃き清めてそしてゴミを焼いてゐる煙が靜かに谷底を流れるのだつた。遙かに見れば、我々のキャンプの方に向つて擧手の禮が捧げられてゐるのだつた。

そして彼等がどつた布哇での最後の食卓のテーブルには、貝ミカ石で造つた鬼さか云つたものが御禮の意味で残してあつた。

又、或る時は、こんな環境でよく出来たと思はれる山あり、谷あり、木あり、草のある美事な盆景が残され、マッチの軸で造られた鳥居には大別社と記されてゐたりした。

映畫のセットのように一日にして生れたテント村、そして一日にして消えて行つたテント村だつた。

谷の中央には日頃は水の全く枯れた小川が一線を劃してゐた。インタニー達の勞働で兩岸に石垣が造られたが、一夜の洪水でみじめにも夫れが潰れることも一再ではなかつた。

昨夜の損害八十仙なりか、こんな會話も交された。そのころ我々は一時間十仙の勞銀を受けてゐたのだ。

この谷川に添つて誰が植えたか梅橙の並木があつて、藤の花を思はせる紫の花をつけることもあつた。

何時しかキャンプの周圍には器用に野菜畑も造られ、玉葱が丸々と育つて行つた。コアの木の天びん棒に両方に石油の空罐をぶら下けて畑に水を運ぶ者を評して、そんな事を知つてゐるから抑留されるのだと皮肉を云ふ者もゐた。

最初、無味乾燥と思はれた谷間も、耳を澄ませばカーデナルも鳴き目白が轉るのだつた。

斯うして中に、戦いふ不幸な出來事がなければ生じない所の特殊の生活が展開されて、それが終戦まで續いたのだつた。

（一九五一年三月）

味朗

二月



夜間 柵内藝術品

ウリウリ 海里 味朗

戦時中の抑留者に對して、あの人は戦前社会的に出しゃばり、人前で一場の挨拶なきした酬ひだ、さういふ風に見た者もあつたし、その反對に、あの人は布哇日本人の身代りになつて苦勞を見たのだ、と見る者もあつた云ふ事を聞かされた。

抑留者たちが造つたオックスミカ指輪ミカ云つた柵内藝術品を、涙ながらに佛壇に備へて合掌した一老婦人があつた云ふ話を、面會人からホノウリの谷底で聞かされて目頭の熱くなつたのを覚えてゐる。

砂島と云へば、埋立ての砂の中から掘り出された貝を思ひ出すにはあつた。貝も最初は磨いた上、箱に納めて唯觀賞する程度だつたが、後にはこれを材料にネックレスとかハット、バンドミカ色々な物が造られるようになった。

ヒロの末岡夕島氏が俗に分銅さういふ白い貝に釘で太公望を刻み、それに木の葉の緑汁をすり込んだのを造つたが原始的の香ひ高いものだつた。釘では思ふやうに彫れなかつたが、柵外の仕事に行つた者がバンドソリの破片を拾つて来てからは却々美事な細工が出来るやうになつた。バンド・ソリの破片はハガネなのである。

兵隊に習つたのだ云つてツイス。ブラウシの柄で指輪を造り始めたのも此の頃である。熱湯の力でセルロイドを軟かくして置いて指輪を造り上げるのである。

指輪藝術はホノウリウリに移つてから完成の域に達し、尾道屋ホテル主人小出さんの造る指輪なきは、とても材料がブラウシの柄は思へぬ美事なものだつた。

家に娘の子を残してゐるインタニー達は明けても暮れても指輪を造つたが、面會の度毎、修繕のためキャンプに逆戻りする指輪のあつたのも微笑ましい。

又砂島の初期には先輩たちがコラルでシガレット・パイプを造つてゐた。私は島に渡る直ぐヒロ出身の進藤卓爾氏から、このコラルのパイプ一本を恵まれたが、あの上くさい香ひがなつかしい。

今思ひ出しても壯觀だつたのは砂島の下駄だつた。バラックの前にズラリ並んだ千差萬別の下駄のオンパレードである。殊に夕方、講演會などのあるバラックの前は何處まで擴がる下駄の群像ぞと云ひたかつた。移民局から砂島に移ると先着の人たちが、これをと云つて差出してくれた友情の下駄の思ひ出も忘れられない。

砂島は下駄の生活だつた。食事に通ふにも、事務所へゆくにも、更に便所にゆくにも下駄の世話になつて、しみじみ感じられたその重寶だつた。たまの面會日に靴をはくミ窮屈で堪まらぬほど下駄に慣れたのである。

砂島では一丁の鋸と一本のハンマが順番に各バラックに貸し出された。けふは二中队の下駄日ださういふ風でインタニーたちが順番にこの鋸や槌を借つて下駄造りに専念した。

あの、ミハンマーの音が如何ばかり島の單調を破つてくれた事だらう。このハンマーの音は砂に沁み込む夜の雨の音と共に今でも耳のどこかに残つてゐる。

面會に来る家族に土産として此の下駄を贈るやうになつたのはホノウリウリに轉じてからである。あの頃は外でも下駄さか、シヤモジとか、箸さか云つた日本の物が不足勝ちで、ホノウリウリ細工も感謝的になつたやうだ。

谷のビー・エックスではパイプ・クリナーが賣出されたが、パイプを掃除する者は稀で、それが貝で作る龜の足に變つて行つた。又ホノウリウリに變つてからは子供用のハイ・チエーアを作る者、小型のテールを作るもの、置物の飛行機を作る者が續出、フアンチヤーストアが出来たねとよく中尉が笑つたものだ。

この頃は外から大工道具を入れることが許され、一日中の一定の時間これが使用が出来た。商業時報主幹の土屋さんまでが愛児のたもトミーガンを作つたさういふ嘘のやうな話もあるのだ。

ツールは一定の時刻にオフィスの保管所に納入するのだが、ヤスリなミバラックに残して置いて夜間こつそり使ふ者もゐた。或る日、抜打ち的にバラック捜しが行はれた。ヤスリを持つてゐたエーさんは、大丈夫だよの隠し場所を兵隊さんに判つて堪るものかを嘯いたが其の通りだつた。

インスペクションが済んでからエーさんは悠々裏の畑の土の中からヤスリを掘り出すのだつた。

商業時報
一九五一年一月
味朗



溪間 夜話

分列行進

海里 味朗

サント・アイランドでもホノウリウリでも陸軍の支配下にあつたのでインタニー達も兵隊と同様、選挙制で中隊長、大隊長等を持つた。

拜啓、御無沙汰しましたが僕も益々元氣です

島の暮しは慣れて今日も食事にや二回船幅軸までが可笑ひ

ダイヤモンドに夜が明けてラツパ合圖に全員が東天仰いで整列す一条亂れぬ大部隊自慢ぢやないが見せたいな

今日は庭の草植えです。第二中隊からは何人ボルンテアがありますか、と言つて來る。これに對して應募者が多ければ其の中隊は當局によく協力するまで成績がよい事になり中隊長は鼻が高いのである。

中には色々理由をつけて斯うした仕事に少しも協力しない者がいた。一人の怠け者は二人、三人ミ仲間の怠け者を作るものがある。

キャンプ生活をして本當にその人の偉さが解つた云つた人があるが、團体生活には、特に滅私奉公的態度が必要なのである。ボルンテアが要する時、萬難を排してそれに應ずる人の姿からは何んもなく光明を發するかに見えただのである。便所部隊も樂な仕事ではなかつた。便所

も多人數で一日中使用すれば、その翌朝は臭氣が高い、それを磨き上げるまでに掃除するのである。

野菜部隊は畑で立ち立てのトマトを食べたり、二十日大根を抜いて食べたり出来る役得の多い部隊だつた。

中でも血圧部隊と言ふのは、主として野菜食をするため畑から臺所に運び込む野菜の掃除に従事してゐたが、老人の多かつたのが特徴であつた。

面白いのは蠅取り部隊だつた。いくら清潔にしても臺所の附近には無数の蠅がわいて困つた。病身や老体他他の仕事の出來ぬ者が臺所の附近に腰をすえて、手製の「蠅

ミリ」でバチリ、バチリ蠅を打ち殺して其の獲物の數を数えて悦に入るものであつた。何んもなく養老院と言つた感じもし春日遅々と言つた風景だつた

もう故人になつたがヒロの實業家畑與市氏も蠅取り部隊の一人だつた。この畑氏が夜になるに生れ變つたように、二百人に近い聽衆を前に續世界漫遊談をやつたものだつた。

パリいどこかで見知らぬ者ミ友人になり一杯氣嫌で劇場に入り、い、氣持で一眠りして起きて見ると、その男も自分の懐中もなくなつてゐた云ふような漫遊談の一節もあつた。

キャンプでは時々各自の受持を中隊長によつてオフィスに報告したが、蠅取りは蚊軍を爆撃するといふ意味で其の職名をフライ・パンバーをしゃやれて係りの中尉を苦笑させた茶目氣の多い中隊長もゐた。

それは砂島時代だつたが、インタニーがバラツク内にゴロリ、してゐたのでは健康に悪いから一日に一回、廣庭に整列して体操をするようにとの觸れがオフィスからあつた。

こゝまで來て体操はナサケナイミ其處でも此處でも不平の聲が起り、出來れば庭に出まいとさぼる者が出る、それを中隊長がオフィスからの命令だから協調して下さい懇願して歩くといふ始末だつた。

斯うした中にも屋外体操は日増しに盛んになつて行つた。インタニーの中に日本陸軍の士官だつた云ふ男がいて、號令も勇ましく分列行進などを始めた所、僅か二、三日で柵一つ越えた向ふで訓練を受けてる本物の米兵士よりも上手にやれるよう

一九五〇年十一月

味朗

海里

て

になつた。所がその翌日、さうした事かこの屋外体操は突如、中止が命ぜられ再びバラツク内でゴロリする生活が始まつたのである。



夜間 彼氏の轉身

海里 味朗

今でも一人でゐて、ジツと臉を閉ぢてる。ホノウリウリの谷間が昨日の事のやうに浮び上つて来る。

冗談に地獄谷と呼ぶ同僚もあつたが或はそうだったかも知れぬ、そうでなかつたやうにも思へる。總て思ひ出は詩情を伴つて美化されるやうである。

地獄谷食堂の傍に、けふの食事に於て鳳梨のタツプが二三本植えられ、墨黒々ホノウリウリ鳳梨會社第一農場と言ふ立札が立つてゐる。日本人に斯うしたシヤレの見えるのは嬉しい事だ。

谷には甘蔗畑に送る用水を渡すため大きな橋が架けられてゐる。コンクリート製の大きなトヒの中を、底の見えるほど澄んだ水がコンコンと流れてゐる。その上に板を並べて人間が通るのである。

この用水の溝がキャンブの周圍を半圓形に流れて居り、流れに添つて白い小さい白粉花が咲き亂れてゐる。

昔この邊りに誰か土人でも住んでゐて、その名残りだらうか、それとも種が小鳥達によつて運ばれたものであらうか、花は語らないが思ひは千々に亂れて行つた。

キャンブの中には朝顔やコスモスが美しく咲いた。何處の花壇も手入れが届いて、八月中旬、特に夕方のソソロ歩きは今でも忘れられない。

やがて太陽が没してしまふに、バラックの中に小さい電燈が一つもあり、それを圍んで色々世間話に賑ふのである。

この頃、キャンブで手遊びをする者があつたが、あれはやめた方がよからう、と言ひ出したのはエーさんだつた。

わしは小さい時から勝負事が好きだつた。物心つくや耕地の子供達と盛んにマープルを遊んだものだ。

子供達との喧嘩にしても當つて碎ける。相手が自分より強からうがそれは問題でない、賭博の氣持で相手目がけて打つてかゝる、何時の間にか、こんな氣持が第二の天性になつた、この捨身の戰術は大抵の場合成功して自分より強い相手をたぼす事が出来る。

長ずるに及んで賭博の生活に入つた。それ一つ一つの習練の賜物と言はうか、自分の思ふ賽の目の出せるやうになつたのは食事の時間も忘れて一心不乱、ひたすらに賽を振る練習に没頭する事二ケ年の後だつた。

やせおとろえて肺病患者ではないかと言はれたが、しかし一度勝負の場所に臨む自分の思ふ賽の目が出たのである。

カードだつて一、二度遊ぶうちに、その全部に爪で目印がつけられるのだ。

私の親類に賭博好きの青年が居たので自分はこの話をして聞かせ、決して友人と遊ぶのではないと、いましめた事がある。よく素人が、けふは目がついたミか付かないミか云ふが、これは友人によつて翻弄されてゐるのだ。

キャンブで煙草などをかけて手遊びする者があるが、自分が本氣で相手になれば一本残らず捲き上げてしまふ事が出来る。

つまらない賭け事なんかするものでない。エーさんの話がこの晩位、熱を帯びたことは珍らしかつた。

或る日の事、エーさんは又話を進めるのであつた。

家に歸る妻がさめく泣いてゐるのだ。聞けば今日學校で子供が先生からお父さんの職業を聞かれ、何んと答えてよいか子供から尋ねられて急に悲しくなつた。妻は云ふのである。

お父さんはね、タキシード・ツライバーだ。そのタキシード・ツライバーと云ふことに

して自分は毎日、新しい車を出たが其の度毎胸のつまる思ひがした、とエーさんはしんみりした。

それからエーさんも私も戦争中にリリスになり、何ヶ月振りかで再會したエーさんは今は小さい建築請負員になつてゐる。その黒い顔を輝かしたのであつた。

たつた
一九五〇年十一月



夜溪間 二つの枕 海里 味朗

監禁所は精神修練の道場なり、と言った人がある。しかし單調な生活が続くうちに神經がミがつて、一寸した事にも立腹する者が出て来た。

第一次大戦の時、英國がその捕虜を絶えず收容所から收容所へ移動させたのは、彼等の生活環境に變化を與へ彼らの精神異状態を防ぐためたつたと言はれてゐる。

牛馬でも狭い柵内につなぎ、廣い所に置くよりも早く弱る言はれるが、實際毎日同じ物ばかり見てゐると知らず、氣分が滅入つてしまふのである。

一本のマツチから、あれほど親密だつた友情の破れた實例を見せられて啞然としたことがある。

私が移民局に連行された時、エスさんミケイさんは、あの三段吊床の最上位を占め掛合ひ萬才式に面白、こゝを言つて皆を喜ばせてくれた。

その頃、古い人達の所には差入れがあつて煙草なども豊であつたが、新しい者は全然差入れがなかつた。また獨身者でホームを持たぬ者もあつた。

其處で煙草の如き差入れがあるミ、それを一所に集め差入れのない者にも平等に分

配された。私など最初から此の分け前になつた。同舟のよしみと言つた風のものをつぐ、感じさせられた。

その煙草係りが仲善しのエスさんミケイさんだつたのだ。

砂島に移つてからも煙草は豊富だつたがマツチは兎角不足勝ちだつた。一箱のマツチが一

中隊に渡るミ中隊長は一人に對し三本づ、分配して廻ることが當分續いた。

このマツチ分配のことでエスさんミケイさんの間に誤解が生じて、同じバラック内で口も利かない状態が、當分續いたのであ

る。こんな時、片一方が釋然と折れて出ると直ぐ仲直りが出来るのだが、それが出来ぬのが凡人である。

或る時、中隊内で枕一個行方不明事件が起つた。中隊長が調べるミワイ君の枕袋から二個の枕が出て来たのである。

ワイ君、困るではないかミ中隊長。枕二つ占領してゐるのは僕ばかりではない、先輩のエツチ君もこつそり二つ占領してゐます、後輩の僕ばかり責めるのは片手落ちではないか

ミワイ君も譲らず、これが喧々ごうごうの問題になつたのもキャンプ内だからこそである。その翌朝、點呼のため並んだ中隊の前に立つて昨日は不肖の頭迷で、皆様に迷惑をかけた、心からお詫びします

ミ云つたのワイ君だつた。そのワイ君の男らしさに對し、割れるが如き拍手が起つた。こんな風に行けば監禁所又、精神修練の道場と云へるのである。

ホノウリウリでの私の受持ちはスプーン係りで、K.P.の洗つてくれたスプーンをパン粉袋を利用した布切れで綺麗にふき、それを数えて規定の数だけ揃へば、それで役目は終了するのだつた。

或る夕方、何時もある所に此の布切れがない、ケチンの係りに聞くと知らないと言ふ、布がなくては仕事にならぬではないかミ反問するミ、無い物はないミの語に自分も思はず憤然としたのを覚えてゐる。

後で聞くミ、當時キャンプでは目白を飼ふことが流行し、夜間その目白籠を包むため布類の紛失することが多し、自分の憤然としたことがあれば入りたいほど恥かしかつたのである。

こんな時、何故男らしく自分の立腹したことを謝り得ないのだらうか、ミ淋しい自分の性質を憐んだのである。

十月 味朗 海里

一九五〇年十月



夜間 便所の掃除

海 里 味 朗

インタニー奇行集を書かうかと思ひ立つた所、考えようによつては柵内の生活全部が奇行のやうに思へるのである。

便所の掃除にして、その便所はコンクリートとタイル張りであつたが、先づコンクリートに熱湯を床の上にぶちまけ、その上に石鹼水を流してゴシクゴシク摺り上げる。云ふ譯、それでも垢のこれぬ時はサンドペーパーを使用する云つた風で、こんな掃除が普通社會の何處にあらう。しかも、それが一日置きか二日置きとか言ふのではなく、毎日なのである。

又その働く者の恰好がアンダー・パンツ一枚に、ねち鉢巻云ふのであつて是れ又普通社會の何處にも見られないのである。又その掃除人の前身を洗ふと、朝夕佛前に讀經して佛に仕えて來た開教使さか、ベシ一本で生活して來た新聞記者とか、等々なのである。世が世であれば言ひたい所だが、此處こそは佛の世界、神の世界でも言はうか米國政府の目からは誰もが一視同仁であつたのも面白い。

掃除のあさは床言はず壁言はず、勿論便器言はず、ピカ／＼光つて砂島御殿にはよく名づけたものである。

さて掃除を終つて待たれるのはインスペクシヨンである。そのインスペクシヨンが済むまでは何人が來ても其の使用を禁じ、これがため番人がつく云ふのも砂島ならでは見られなかつた異風景云へよう。

試いて磨いて
便所の掃除

検査済むまで
番がつく

三砂島草津節は歌つてゐるのである。
娑婆にゐる時ウエーターとしてホテルからホテルへ渡り歩いたさいふピーさんもキャンプでは基石なき楽しんでゐたが、變り者、奇行の主人公云へぬこもない。

一九四二年五月二十三日、第三回船で螢の光、窓の雪の歌に送られ乍ら米大陸に去つたが、その前夜、中隊長だつた大井哲夫氏に、色々世話になつて有難う御禮の寸志だ、とつて置いてくれし手の切れるやうな十弗紙幣を差出したのは流石の中隊長も顔色が變るほどに驚いて、その金を斷つた事は勿論である。

當時キャンプでは一仙の現金すら持つことを許されなかつた。現金の代りにキュー

ポンを持たされ、それで用を足したものである。
齒磨ペーストの入つてゐるチューブの中に隠してゐた紙幣さえ見だされるほき検査は嚴重であつた。それなのに、どうして十数枚の紙幣をキャンプに持ち込んだものか、これはピー氏のみが知る秘密だつた。

地獄の沙汰も金次第と云つてね、斯うして監禁されて見る一番頼りになるのは此のキャツシでね。ウ、フ、フ、フとピーさんは笑つて大陸に曳かれて行つたが、その後ピーさんは、さうなつたことか。あの金はあれから、どんな關所を通つた事か、途中で發見されたのではあるまいか、今でも時々思ひ出してゾツとして見たり、人間

もあの位の度胸がなければ駄目なかも知れぬ、と思つたりするのである。
ケーさんはホノウリウリで私のバラックの直ぐ上のバラックに住んでゐた。娑婆にゐる時から敬神家として知られてゐる。

毎朝、皆がまだ寝てゐる暗いうちに起きて、東方に向ひ柏手を打つのである。
私達のバラックにゐたエヌ君が、或る朝その柏手が起ると同時に大喝一聲「ぢいさん、やかましい矣」云つたものである。
その翌朝から此の柏手はバラックから遙か遠い所から夢現のやうに、かすかに私達の耳に聞えて來たのである。

このケーさんは娑婆にゐる時は大きなジ

ヤンク商を營んでゐた。キャンプ外に仕事に行く度毎、ケーさんは路傍その他から色々な鐵片を拾ひ上げ、それをセツセミ持ち歸つたものである。そしてケーさんのバラックの床下には何時の間にか夥しいジャンクが積み重ねられてゐたのである。

一九五〇年九月
帝世所版



夜間ニツクネーム 海里味朗

野田稻造君とは一九四二年三月、移民局で知り合ひになつた。米國生れの第二世で青年時代の教育は日本で受けた。日本國籍を離脱した男で、日本でも特高に後をつけられたヨと苦笑した事があつた。

米大陸に過ぎた少年時代、悪戯に日本刀で豚のシツポを切つたと云ふ珍らしい經歷の男で、豚のシツポ、後には略してシツポの綽名を頂戴してゐた。

同僚達の特徴をこらえては綽名の濫造をしたものだ。ドクトル上原與吉氏を勤王の志士上原大之進と呼んだり、間宮君の事を間宮忠念流先生と呼び出したのもシツポ君だつた。

女學生と呼ばれる一青年があつた。何んに起因したか知らぬが收容所では専ら女學生で通つたものだ。或る時バラック別に收容者の氏名をオフィスに通知する必要の生じ

時、誰も彼氏の本名を知らなかつたほどこゝでは綽名が通用し又、本名よりもこの方が親しみを感ぜさせた。

て晝寝を餘儀なくされたものだ。ライオンと云ふアダ名は此のイビキから

生れたもので、ライオン君のベッドの附近のベッドは何時でもガラ空だつた、所が上には上があるもので、後にはフオーア・モーター空の要塞と言つた豪の者が出て來た。丸で空中戦を聞いてゐるやうな盛況だつたのである。

このイビキ云ふのは厄介なもので、他人のイビキは氣になるが自分自身がイビキをかいてゐるかどうか自覺がないのだから厄介だ。他人から注意されても信じられないのだから困つたものだ。

じつとあんは私と同年代、しかも日本育ちの二世である所まで似てゐるので非常に親しくして貰つた。じつとあん……何云ふ親しみの深いアダ名である事か、殊に戦争直前、日本から歸布した若い人達が、じつとあん……と言つて親しむ所は、はたで見

る目も羨ましいほどだつた。小林さんの事をコーさん、香川さんの事をカーさんと呼んだが、今もなつかしい呼び方であると思ふ。朝鮮人の日本語物真似や浪花節の得意だつた杉田氏は、時にケイチヨウの人と呼ば

れ、時に杉田砂丸先生と呼ばれたものだ。コーさんは曹洞宗開教師田中哲翁師の門徒で、開教師のこゝをお寺さんと呼んだが忽ちの間に田中さんと呼ぶ者は無くなつてお寺さんで通つたものだ。

少し瘦せ柄の人は皆ガンヂーさんで通つたもので、ガンヂーさんと呼ばれた人は十數名もあつたらう。その一人は今ケー・ピ

ー・オー・エーのアナウンサーをしてゐる藤田氏であり、又他の一人は戦前縮工場經營で知られた加藤周氏だつた。

又、瘦せた人を反語的にマツスルなどと呼んだのもなつかしい。先生の中にも大先生と云ふのがあり、砂島の夕方、マラソンの練習で大先生くんと應援を送られるや、ハア〜と息を切らして動けなくなるまで走る氣のよい青年もゐ

た。先生があれば博士もゐる筈だ。博士、今晩は頼むよと言はれて、得意の女人には聞かされない長講が毎晩のやうに行はれたものだ。

目白博士は一名太閤さんとも呼ばれたがこの人が米國に旅立つ前日、長い間可愛がつて來た目白を籠から逃がしたのは當時有名な話だつた。浦田勝君は一名スパイマン浦田と言はれ昔の坂ノ上ノ田村磨を思はせるような大男だつた。スパイマンのバラックには柔道の岡崎プロフェッサーなことも居り、彼等のバラックは専ら山賊部屋で通つてゐた。ホノウリウリでは男子收容所と向ひ合ひ

鐵柵の中に女子收容所があり、時々なまめかしい洗濯物が下されてをり、人絹パンスマ言つた風のアダ名も生れたのだ。山賊部屋を紹介すれば体操部屋も落ミすわけには行かぬ。このバラックの賑やかなことが此の一語で想像がつくと思ふ。

松本さんが二人ゐて、一人が侍松ちゃん、一人が奥州松ちゃんだが、後者のズンドウシヤを飛ばしてなアゆズンドウシヤは今も頭になつかしく通つてゐる。

砂島本因坊言はれたのは岡田次郎初段で、夕方になるミ端然たる姿勢で散歩を缺かさなかつた。

金語樓、だまりさん、聖徳太子、些細先生、西郷さん、ルナ、テン、ウさん、など書いても普通讀者には何んか興味もなからうが、砂島やホノウリウリにゐた人達には、なつかしい名なのである。斯うして溪間夜話を續け乍ら、嘗ての同舟の人々の上に幸あれかし祈らずにはゐられない。溪間とはホノウリウリ收容所のあつた溪間を意味するのである。

Handwritten signature and date: 1950年8月 味朗



夜間 ニュース異聞

海 里 味 朗

初期の監禁者達は煙草とニュースに飢えた。ガードの捨てた吸殻を拾ひ集め、それをほぐして便所の紙に巻きかえて喫つたのは有名な話だ。何んの事はない。バタ屋を地で行つたのだ。見兼ねたガードが、あれも人の子と思つたのだらう、一寸すつたばかりで、わざと投げ捨てたのを見たものもある。又、新聞をパンツの後部ポケットに差し込み、時々その角度をかえて、それなしに新聞を讀ましてくれた事もあつた。

砂島初期はラヂオも無ければ新聞も無く戦争がどんな風に進んでるか、ホノルルには變つた事はないか、あんなにまでニュースに飢えた事はない。

柵外の大工シヤツプに仕事をするインタニーの一人が新聞の一片を靴の中にひそめて歸つて来たミヒソク話してゐたのを聞いたのは米空軍が初めて東京を爆撃した當時のやうに記憶してゐる。

ガードと親しくなつて、ガードから聞いたミ言ふニュースは割合に正確だつた。この外、誰が何處で聞いたのか出所のハツキリしないニュースが如何にも誠しやかに伝えられた。

ニュースは人が固まる所から出てキャンブ中に擴がった。先づ前記のガード・ニ

イスを筆頭にケイ・ビー・ニュース、便所の井戸端會議から出るニュースを、誰が名づけたかキャベ・ニュースと呼んだ。

もう一つのニュース・ソリスは婆から新しく入所して來る人達のもたらすそれだつた。移民局からアヒナのバラック・ベエリグをかついで新入生が來る、皆んな走り寄つてニュースを聞いた。

これは自分が直接聞いた東京放送だ、冒頭して語り出す、インタニー達は固唾を呑んだものだつた。

家族との面會が許されるようになったからは、家族を通じて色々なニュースが入つて來たが、會話を英語に限られた時は、このニュース戦線にも大異常を來した譯だ。

又、收容者たちの心を暗くしたのは米大

陸向け護送船の出ることで、このニュースは誰もが聞くのを嫌がった。まだ確定せぬ護送船が出るに像想を言ひ觸らして同僚の感情を害した者もあつた。

收容者たちはニュースにおびえ乍らもニュースを聞きたがつた。若し僕にニュースを製造させたら、收容者を一夜の中に喜びの絶頂に置く事も出来るし、又悲歎の極に置く事も出来るよ、新聞記者だつたエー氏が笑つて話したことがある。

砂島初期に英和辭典の差入れを許された、又タブレットや鉛筆の自由所有を許されたのも當時柵内最大のニュースだつた。

事務所からよくインタニーを呼び出したが、どんな用事だつたか、事務所から出るのを待ちかねて問ひかけたのも、ニュースを求める心だつたミ云へよう。

二世は再調査の結果、出所を許されるかも知れぬミ云ふニュースが出たのは一九四三年の七月末頃だつたらう。

曾川政男氏が大陸のキャンブで永眠した

からは毎日の夕方、多数を集めてこれが日本語譯が行はれた。砂島では宮本ドクトル、ホノウリウリでは近藤博士の譯が光つてゐたやうだ。

斯うした外部のニュースと共に柵内のニュースも重要な役目をしめてゐた。

前夜の雨でホノウリウリ・キャンブ裏の石垣が崩れてゐるのを翌朝発見しては「昨夜の豪雨出水に裏の石垣崩れ、これが損害八十仙也」見積らる」と云つた風の事もニュースになつたのである。

誰々さんが大きな貝を拾つた事もニュースになつたし、ガードの筋が一本ふえた事反對に酒に酔つて失はれた事などもキャンブのニュースだつた。

新聞記者だつたエーさんは、何時かこんな歌を作つたものである、

鳥のニュースは
三毛嚙のお産
パイプ・ワイヤーにも
戀の花
鐵柵の向ふ側のバラックには日本の不遇
勇士が收容されてゐた。あの人達もニュースに飢えてゐることだらう。
野桑畑に行く人が、ニュースを歌に歌ひ込み、それを歌ひながらバラックの側を通つた。
ニュースのお裾分けたつた。

一九五〇年七月



溪間 茶の香り 夜話 海里味朗

日本の赤十字社から米大陸經由で送つて来た三河八丁味噌、龜甲萬醬油、お茶などを頂いたのは、ホノウリウリに於いて初めて。

人間と言ふものは贅澤なもので、毎日の食後オレンヂやアップルなど米國産のもののみを頂いてゐると布哇産のバナナやパイアが戀しくなるやうに、インタニー達は豆腐や、うきんなど日本食料を欲しがり、五十仙宛のキューポンを出し合つて、ホノルルに出かけるガードに此の食料品を買つて来て貰つたのである。

今晚の夕食には冷豆腐があると楽しんでゐた豆腐が遂に夕食の間に合はなかつた。使に立つたガードさん、町の豆腐屋で御馳走になり、歸營が遅れてキャンプに着いたのは夜の十時頃だつた。

一杯機嫌のいい氣持でケチンの係りを起すのも面倒と、折角の豆腐をその儘放置したのである。これがため豆腐は少しばかり腐敗したが、翌日、捨てるのも惜しいと焼豆腐にして御馳走になつたものである。

キャンプ當局では病人を出してはならぬと特に食べ物に注意を拂つた。初めて日本の赤十字社から届いた黒味噌

を見た中尉殿は、こんな變色して腐敗したものを大事なインタニー達に喰へさせてはならぬと、捨てるその一步手前に呼び出されたのが大井哲夫氏で、氏の説明で此の味噌は命拾ひをしたのである。

この黒味噌は實においしかつた。熱い御飯の上にのせ、一口々々味ひ作ら思はず目頭を熱くするものも少くなかつたやうだ。

又、味噌汁の出る夕方には、わざと兵營の方からホノルル出身の若い兵士が、それは布哇土人ミ支那人の混血兒であつたが我々のメス・ホールに來て、この味噌汁を賞味してくれたのも懐かしい思ひ出だ。

又この兵士は勤務時間が済むと下駄ばきで我々のキャンプに目白を聞きに來たものだつた。

龜甲萬醬油のおいしかつた事は言ふまでもない。當時、太平洋諸島から多數の韓國人が來てゐるが、この人達は特に醬油が大好物だつた。最初は各自がお漬物に要る丈けかけるやうにカップに一杯出されたが、それが何時も空になるのだ。何條以て堪まる可き、この醬油が白い御飯の上に、汁かけのやうにぶツ掛けられるので、後にはケ

チンで豫め漬物にかけて出すやうになつた。當時、日本茶はホノルルでも得難いものだつただけに、その香りはインタニー達を極度に喜ばせたものだつた。

最近、布哇から日本を訪ふた武居熱缺氏が、この茶の事を思ひ出したと言つて日本赤十字社へ特別記念寄附をしてゐる。

この外、今に忘れられないのはベーカー堀川伊助氏の焼き物ミ、出本正男氏のスベア・リップス、それから影佐憲保氏の日本壽司であつた。影佐さんは、わざと東雲別荘から大きな壽司用のタライを取寄せたものだ。

あのタライは戦後、影佐さんの許に返されたが、ホノウリウリにゐる者には懐かしい思ひ出のタライである。

ホノウリウリでは二ヶ所に野菜畑を作りケチンヘドンク、野菜を供給したものだ。小松屋旅館の佐藤一郎氏なども野菜作りでは先輩の一人だつた。

血壓の高い人々には特に野菜料理を與へたが、その代り野菜の掃除はこの血壓部隊の仕事で、メス・ホールの横に坐り込んでけふもあれば明日もあると悠々野菜の掃除をしてゐたのは、誠にのどかなものだつた。

少し氣の變になつたエツチ君が水ミ湯ミ合する所、その温度の液体はパイア・ジュースの味がすると騒ぎ出したが、本物のパイアを大規模に作り始めたのは阿部三次氏だつた。

小さい苗を數十本、バラツクの後に植えて、毎日夕方に水と與えてゐた。あすはどうなるか知れぬ浮草のやうな境

涯にあつてパイア作りでもあるまい、恐らく我々の口に入る時は來ないだらう、と言つた者もあつたが、數ヶ月の後には一面のパイア林になり人間の頭ほどもあるパイアが各自の食卓に上るやうになつた。

阿部さんは縣會上院議員もした事のある流石は二世の大先輩だ、とひそかに敬意を表したものである。

當時、キャンプには日本人の捕虜が次から次へに收容されて來、そのまかなひをインタニー達で受持つたが、この兵隊さん達が食卓に就く前には、必ず敬禮したものである。

物を頂く云ふことについて、お互にこれだけの感謝を持ちたいものだ、ミ今でも想ひ出す事である。

一九五〇年二月



夜話 拳大の西瓜

海里味朗

キャベの花咲いて、實のつて、散つて、
監禁生活まだ続くよ。

人間が名も金も、それからホームも社会的地位も奪はれて、一般社会から隔離されて見ると、さて、後に残るのは食慾ばかりで、長い監禁生活で話題の大部分を占めたのは食べ物の話だった。

砂島の初期はパンが多く御飯は少なかった。夜、ケチンの仕事で済んで誰もなくなった。夜、ケチンの仕事で済んで誰もなくなった。夜、ケチンの仕事で済んで誰もなくなった。夜、ケチンの仕事で済んで誰もなくなった。

一九四二年三月に監禁されて、四三年の一月十八日と言へば満十ヶ月になるが、十ヶ月目にインタニー慰安の運動會があり、その御馳走にアイスクリームが出た。

十ヶ月目に食べたそのアイスクリームがみんなにおいしかつたか、これは同じ境遇に置かれて見なければ味ふ事は出来ない。

その頃は砂島でもよくエヤ・レイド・サイレンが鳴り、ガス・マスクを被つて浅い塹壕の中に轉ぶようにして駆け込んだものである。

砂島メニユーの中で嫌はれた物はチリ・カンカンミ、別名サンド・アイランド・ステイキと呼ばれたランチョン・ミートであった。後者など當時、娯楽では容易に手に入らない珍品だったが、これが来る日も来る日も食卓に出るので「けふもサンドアイランド・ステイキか」と嫌はれたものである。

最も歓迎されたのはチキンだったが、このチキンの御馳走が出るのが闇夜に入つたばかりの時で、また大陸行きにインタニー護送船が出ると、御馳走にありついて嬉しい反面、言ひ知れぬ不安と悲しみが伴ふのであつた。

砂島の初期は野菜物が不足したつた。野菜畑に働く同僚がよくガードに隠して生ニンジンやキャベツを持ち帰つたが、この生ニンジンをコリコリかじる度毎に、生菓をかじる思ひがするのだつた。

野菜の不足を補ふためか、その頃はよくデザートに鳳梨の罐詰物が出た。鳳梨にはビタミン・シーがあるから、つめて食べるようにと教えてくれたのは上原ドクトルだつた。

ミス・ホールではインタニーが交替で給仕の役をつとめた。後には戯れに茶坊主などと言つたものだが、この人達が色々給仕の役をつとめてくれた。

慣れてくると、この茶坊主に對し色々面倒な事を言ひつける横着者も出るようになり、當時大隊長をつとめてゐたヒロ市の川崎寛語氏が一同に向つて

「こゝはレストラントではないのです」
と大喝一聲的注意を發したのを覚えてゐる。

當時、茶坊主の中には生熊神官など相當高齡な人も居り、それが忙しく奉仕してゐる姿に川崎大隊長が義憤を感じたのも無理からぬことだつた。

ホノウリウリに移つてから、近藤博士が「インタニーにはインタニーの道徳があります。たゞえばテーブルの上に出てゐる一片のバター、あれもテーブルに八人居れば八人が平等に分けて食べねばなりません」と説教した其の口調を、報知の津島記者がよく真似て笑はしてくれたものだ。

近藤博士を煩はした所を見ると、先に着席したものが疾風迅雷的にバターの大部分を失敬したものらしい。

大陸のキャンプでは、先に着席する者が自分の前の小さい林檎を隣の人の大きいのと取替えたといふ話を聞いた。鐵柵生活のやうな立場に置かれると、人間の本心が遺

憾なく發揮されて、教養のある眞の人格者さうでない者が一目瞭然としてくるのである。

布哇島火山の收容所で田中彌六氏が食後に出たアップルの種を空罎に植え、自ら毎日水を與え、その芽が出たのを家族と最後の別れの時「これをヤードで育てる様に」言つて手渡した事を聞いたが、誠に美しい話だと思ふ。

ホノウリウリのキャンプでも、明日は米大陸に向けて出發すると言ふ人が野菜に水をやつてゐた。自分が苦心して作つた西瓜が拳大になつてゐるが、その西瓜をなでながら「後に残る人に喜んで食べて貰ふのだよ」と話つてゐたのを聞いて、今更のやうに日本人種の「よさ」を感じたのである。

津島記者
（元五）五月廿一日



夜間 溪間

笑ひの會

海里 味朗

人々が集まつて話し合ふといふ事は、
 多々あるのだ。嘗て移民局の獨房で三日間、
 青白い壁に向つて無言の行をやつた時、話
 をする事が如何に楽しいものであるかを今
 更のやうに發見したのでつた。

移民局や砂島では便所の中で夜の更ける
 まで蟻會が催されたが、ホノウリウリに移
 つてからは坂本ビツグ・ボーイのバラツク
 で笑ひの會が持たれた。しまひには笑ひの
 種が盡きて少しも可笑しくない笑ひの會に
 なつたが、それでも集まつて話すことは樂
 しかつた。

今でこそ日本人系の間から白人同様に英
 語の話せる政治家や、教育家や、實業家が
 輝く星の如くに出てゐるが、草分け同胞は
 英語が解らず随分苦しい目に遭つてゐる。
 然し彼等は英語、日本語、土人語をりませ
 て立派に用を足して居り、その勇氣には今
 でも感心すべきものが多い。

ポーシ、ポーシ、ツモロー、テン・ワン
 モンス・ツリー・デー、ノー・ハナハナ・
 オーライか？

これは明日は丁度十一月三日、明治天皇
 の天長節に就き休業させて貰ひたい、と云
 ふ意味で耕主も即座によろしい快諾を與
 へてゐるから愉快だ。

テン・ワン・モンス、ツリー・デーはよ
 かつたね、ミバラツクも崩れるような哄笑
 が湧くのだった。

某耕地、某キャンプの洗濯場には五、六
 人のワヒネさん達が集まつて、故國の井戸
 端會議が太平洋上のパイイヤみの此の孤
 島にまで延長されてゐるのだ。

何時頃でせう？
 さア！

ミ言つてゐる所へ、いかめしい顔をした
 ルナが通りかゝつた。

ルナ、ルナ、ユー・ワツチ・ハマチ？
 ミ先輩らしいのが問ひを發した

テン・ガラ
 ト時だそうですよ
 まあ、あんたは英語がよく解つて結構で
 すね

餘り詳しい英語は解らないが、自分の要
 り前だけは解りますので……

要り前はよかつたね、ミ車座の連中は、
 笑ひ藥を飲んだ時のやうな顔をするのだつ
 た。

エーさんは移民局からホノウリウリに送
 られる時、娑婆から後生大事を持つてゐた
 ガス・マスクを取上げられ、返して貰ふよ
 う係官に要求した所「山豚にガス・マスク

は要らない」と斷られたのである。

丁度、谷のキャンプでは其の頃、毎日メ
 ス・ホールから出る夥しい残飯を粗末に
 しないため豚を飼はう、云ふ議が出て、養
 豚場の地ならしを進めてゐる時とて、エー
 さんが山豚扱ひされたのが可笑しいミチー
 フ・クツクのビーさんが轉けまわつて笑ふ
 のだった。

粗忽者のシーさんは、新聞に出た歸朝告
 別廣告の原稿をそのままラヂオ放送に使用
 した。
 大体において不都合はなかつたが、最後

に一段ミ語調を強めて「末筆ながら皆様の
 御多幸を祈つてやみません、さようなら」
 と結んだのである。

エフさんは、その新聞記者かけ出し時代
 種々に船に行く、有名なエツチ夫人が
 今にも出産しさうな身重で歸布したのを發
 見した。

紙上に多少でも異彩を添へるべくエツチ
 夫人満月の體を抱えて歸布す、ミやつたも
 のである。

編輯長はニヤ／＼笑つて何とも言はな
 かつたが、プレスから出た新聞には随月の體
 となつて居り、エフさんは人知れず頭をか
 いたのである。

これはエフさん自身の告白談で出席者を
 極度に喜ばしたのである。

アイさんは米國の大學を出た法學士だつ
 たが、日本語の方は餘り達者でなかつた。
 先輩の家を訪問するに、其處の奥さんか
 らケイキ（景氣）は如何です、と問はれて

ケイキ（菓子）は今頂いたばかりで、もう
 澤山ですと云つてのけたものだ。
 その眞面目な顔を見ては笑ひ出すわけに
 は行かず、奥さんは死ぬる思ひで笑ひを噛
 み殺したのである。

シャワー歸りのエムさんの頭に、見れば
 石鹼の泡が白く残つてゐるではないか。よ
 せばよいのに、石鹼がついてゐますミ注意
 した所、それが白髪の一塊でエムさんは
 しばらく妙な顔をしてゐたものだ。

ケイさんから此の話聞いた者は一様に
 笑ひ出したが、ケイさん自身こんなにつ
 たことはなかつた、ミ告白するのだった。

歌を言へ、足でた、く、浪花節をしやべ
 れ、おそくなるミ飯が寒くなるよ、こんな
 言葉が話の中に巧に織り込んで人を笑はす
 話上手もゐた。

蚊蚊を追ひく、ビー・エツクスで買つ
 て来た蘭南京をかみ乍ら、他愛もない事
 を話し合つてタイムをした笑ひの會は、
 所謂戦時中の私の長期外泊生活を彩る一斷
 片として今でも忘れられないのである。

帝大時報
 一九五〇年四月
 (一九五〇年四月)



寒に堪ゆる者

海里味朗

バラツクの外では百足に近いインタニー手製の各種各様の下駄が島の夜風に吹かれてゐたし、猫の目玉の欲しい真暗なバラツクの中では、その夜も演藝會が開催されてゐた。

新入生があつた云つては歓迎の演藝會を催し、大陸に去る同僚がある云つては送別の演藝會が催されるのだつた。

移民局に収監された夜、森部龍一氏から今晩はあなたの歓迎演藝會を催します、と云はれて面喰つたものである。斯うした場所歓迎される事は本當に有難くないことだが、出来た事は仕方はない、少しでも慰めてやらうといふ先輩の、新來者への好意

は有難いものに相違なかつた。米國行きが何回も延期され「私のやうに幸福な者はありません、幾度も送別會をして貰ひ有難う御座います」などと謝辭を述べる者も出るやうになつた。

昨日こちらに参つた新兵であります、どうぞ、よろしく……

元來私は皆様御承知のやうにビツグ・ライス（二人前の御飯を平ける事）は好きですが歌は不得手であります。そして私の妻は美人ですが、それは南洋の美人であり、

子供は花も蓄の十五才云ひたい所ですが實はそれには十年早いのでありまして……そして私は晩婚で御座います、婆に殘して来た若い妻の事を思へば……

唯今紹介されました山本であります、え、ミ、家族は妻との間に三男一女、娘は芳紀十九才であります（この時、若いインタニー達から割れるやうな拍手が起る）

私は恐れ多くも南蕃渡來、肥後の國の浪人、野田稻造で御座んす。爵は痲瘋、位は飯クライ、段は梯子段。さて歌は……

インタニー達は一藝をや、前に、きまつて前のやうな自己紹介を忘れなかつたのである。

浪花節では杉田砂丸先生が特に光つて居り、これに次ぐ達人も少くなかつた。

鹽山與左衛門、赤垣源藏、大久保彦左、籾井立伊、こんな風に讀み物を並べるミ、

これも毎晩も素人藝とは思へないのだ。これも毎晩續く退屈するものが現れ、先生の力演中イビキをかき出たりして先生をして憤然、高座を飛び降りさせた出來事もあつ

た、映畫説明なども「長谷川と李香蘭」を題してシヤレた藝を見せる者もあつた。

一方インタニー作るころの「布哇島監禁歌」「移民局監禁歌」「砂島月夜」も歌はれ、曹洞宗開教使の田中哲翁師の如き、

「布哇島監禁歌」に泣かされました、ミ語つたほどである

それかと思ふに元日の年玉代りにズツダン（實彈）を百

ミイツパチ（一發）スクホー（祝砲）を百旅順露兵にネ、ドンとやる、返禮に要塞

差出すステツセル、さのさ……ミ言ふやうな、私としては生れて初めて

叩く珍らしいサノサ節が、しかも新瀉なまり百パーセントに演じられ場所を忘れて哄

笑したのも楽しい思ひ出である。先生といふ敬語だけでは足らず大先生、

アダ名された青年があつた。大先生にミつては許婚はイイナチケであ

り、なまじはナマス、今日はチヨウ、恥しいはハチカシイ、昨日はチノウ、娘はムチ

メなのである。そして小さい時からイイナチケ、ウタリで真似たママゴトの、庭に櫻の咲くにサイ、樂

しい昔は忘れられよか、チヤカ、チヤン、チヤン、チヤカ、チヤン

ミ言ふ事になる。

ミ言つても英語の先生、田中ヘンレイ氏によると、英語でサイ、米大陸の人はガールミ發音し、布哇の人はギョールミ言ふ。これが米國南部に行くミキヤウと發音するのであつて、大先生の日本語を笑ふ者は言葉の持つ眞の妙味を解さない、と言ふことなるのである。

パラマの有志河村大藏氏がホノウリウリを去る時にも演藝會を催したが、その席上河村さんは

「澤山、若い者を殘して自分だけ出て行くが、自分は自分の子供を殘して行くやうな氣持がする、この中には悪い者は一人もゐないのだ、當局者に對し、みんな出してやつてくれと頼む決心です」

ミ挨拶して後は涙に聲が曇つたものだ。第何回船が覺えないが、或る夜の送別會で、後に残る者を代表して上原ドクトルが雄壯な聲で

寒に堪ゆる梅はやがてゆかしき香を放つと秀嶺節を歌つたが、インタニーの一人々々が寒に堪ゆる氣持でその一日々々を送つたのであつた。

終戦後、自由の體になつて見るミ監禁生活の印象も一日々々と薄らいで行く。今にいたるも寒に堪ゆる氣持である者が何人あるたらうか、と時々思つて見るのである。

此中をかうと書ふか

一九五〇年三月
海里味朗



夜話 溪間

捕虜と貝殻

海里 味朗

貴君にはとても信じられないと思ふが、遠く海を離れた谷の底のキャンプに来て砂島同様、貝を拾つてゐますよハ、ハ、ハ、これは、米大陸の轉住所の友から、インデアンインディアンの矢の根石を拾つてゐると云つて来た手紙に對して、私の書いた返事の一節である。

私達が砂島からホノウリウリの收容所に移つたのは一九四三年の春淺い三月三日だった。これより先、我々が近く新キャンプに移るであらうと云ふ噂が、頻々に行はれた。

新キャンプは一体どんな所であらうか、新キャンプを見たミ云ふガードも口を緘して絶対に語つてくれない。何でも新キャンプは谷中にあるらしいが、それにしてもガードが一寸口を消らした所によると、砂島同様に貝があるらしいのである。谷の中に貝があるとはこれ如何、こんな疑問を持つて移住した新キャンプだった。

成る程、新キャンプに来て見ると、キャンプに通じる數本の道にも、又キャンプの中の通路にも、海底から掘り上げられた白い砂やコラルが一面に敷きつめられて居りその中に幾多の貝が隠されてゐるのだ。

キャンプ内の通路はローラーで固められてゐたが、インタニー達は移轉したその日から鶏トリが餌を捜すやうに、この通路を掘り始めたが、砂島から一緒に来たガード達は見て見ぬ振りをしてくれた。この際、若し我々から貝を取り去つたら如何ばかりか寂寥しやくりやうを覺えたであらう。この意味で聲なき無心の貝は殊勳甲の功勞者だつたかも知れない。

海底土砂はその後も大きなトラックで何處からともなく、この谷のキャンプに運ばれ、その都度土砂の小山が築かれた。インタニー達はこの小山を木片で掘り崩して行つた。貝が出る度毎、子供のようにはげを上げるのだつた。この貝を捜してゐる間は無我夢中の境地だつた。

こゝではキビを焼いた跡の煙の掃除や、臺所の残物を入れるため大きな籠を掘る工事、さては蚊の発生を防ぐための谷の斜面の清掃作業の爲め、乃至野菜作りのため、よく柵外労働に出た。

仕事に行く道すがら、貝は落ちてゐないか大の男が中腰になつて路面を覗きながら歩く姿は、この世のものとは思はれなかつた。

キビ煙の清掃作業では、自分は年長者だミ云ふのでケンナイフを握る事を免除されワター・ボーイの役を仰せつかつた。臺所から水を滿たしたギヤロン瓶を二つさけて出掛けるが、たちまち無くなり、煙から半哩も離れた無人の便所べんじやう（其處に給水設備がある）まで水汲みに行く。私の仕事だつた。そこは貝の處女地で、私はパイプの栓をひねつて、水が瓶に滿ちる僅かな間に色々珍しい貝を拾つたものだ。

作曲家の西川、ほる氏はキャンプでは我が中隊の中隊長であつたが、氣轉の利く男でインタニー達に新鮮な喰べ物を供するた柵外にあるスクワツシュを取り遠征を申し出て中尉から快諾を得た。私もその一行に加はつたが、スクワツシュ取りは感のいゝ理由で、道々貝を捜したり、休憩時間に拾ふのが目的だつた。今でも楽しい思ひ出である。

貝細工も更に進歩し、それで花を造るもの、目出度い鶴龜を造るものが出来た。鶴を造るためには白い羽毛が必要で、これがため羽毛のつまつた官給の枕が一つ行衛不男になつたりした。

今は故人の大家さんは繪の心得であり、龜の甲に當る貝の上で得意の繪筆を振つたが、そのため大家さんのバラツクからは盛んに泥龜が這ひ出すと云ふ噂さえ立つたものだ。又この頃は、南太平洋諸島から歸つた兵隊によりキヤット・アイなど、云ふ珍らし

い貝が盛んにキャンプに持ちこまれた。器用なインタニーが無器用な兵隊さんのためこれにネットワークを造つてやる。報酬としてネットワーク一つ分の貝を呉れたものである。

一方、日本の不遇勇士達も陸續ミキャンプにやつて来た。食事はインタニーで世話をしたが、その勇士達が米大陸に出發したあさ、テーブルの上に數個の貝が置かれてゐた。影ながら御禮の意味だつたらしい。これを見てインタニー達は胸が一杯になるのでつた。

何時の日か、釋放されたら、自由の中で相變らずカイ細工を續けようと思つた事だつたが、さて、出所して見るに毎日の生活に追はれて一度だつてカイを手にする事が出来なかつた。

あれほど貴重なものと思はれた數々のカイを今は出して見る氣もしない。物の價値なんて總てこんなものかも知れぬミ、つくづく思はれるのである。

(おはり)

一九五〇年二月
味朗



夜間 貝掘り狂騒曲

海里味 朗 執筆

請負師の栗田安良氏は豪傑肌の人で特に宴会などその本領を發揮したものだ、その栗田氏が洗濯場で、形が法螺貝に似た一寸大の貝を齒揚子で丹念に掃除してゐた島の夕方である。

砂島に渡つたばかりの私の眼には先着の先輩達が、どうも娑婆にゐる時より別人間のやうに變つてゐるやうに映つたが、特に栗田さんの變り方はひどいと思はれた。子供でもあるまいに小さい貝なごを弄んでと思はれたのだ。

便があつたら外に残して来た子供に送つてやりたいと思つてね、と説明を聞いても何んだ馬鹿らしいと思はれたのである、その自分が間もなく栗田さん以上の貝氣違ひになつたのだから、環境ほき恐ろしいものはない。

砂島は港を浚渫した海底の土砂を盛つたのらしく、その中から色々な貝が出て来た。中には惚れ惚れするほど光彩陸離たるものもあつた。

貝の學名などは元より解らない、尤も貝蒐集家の一人あつた毛利ドクトル等は色々學名を知つてゐたのだらうが、われわれ仲間では形から連想して勝手に法螺貝、唐傘分銅、田にし、たけのこなどの名を附し「エー君は今日素敵な分銅を掘り當てた」

など子供やうに評判し合つたものだ。雨の夜の翌朝など陽の出るのを待ちかねて、目を皿のやうにして地面をにらんで歩いた。雨に洗はれた地肌を斯うした貝が、その形の一部分を現して居り、それを秋の山で栗でも見つけたやうに拾つて歩いたのだ。

一人が庭の一部を掘り始めると三人五人集まつて見る間に庭を荒らし、ガードから注意を受けた事も一再ではなかつた。島には越えてはならぬ小溝が掘られて来たが、夢中の餘りその一線を越えさうに見える者さえゐた。越したが最後、聲一發、命はないのである。

猫が鼠をさがすやうに、バラックの床下にもぐり込んで、そしてモグラのやうに其の土を掘り続ける者もあつた。斯くて構内は掘りつくされた炭坑のやうに收穫がなくなつたので棚外の勞働、たとえば野菜作りや洗濯場の仕事などを志願する者も出た。洗濯場の周囲や畑の中は貝掘りの處女地だつたのだ。

生田ドクトルがわざわざ野菜作りを志願して色々珍らしい貝をバラックに持ち歸つたのもその頃だ。貝は綺麗に掃除され、シガーの空箱なご

に綿を敷き、その上に町嚙に並べられた。丸下寶物扱ひである。「これが僕の全財産だ」云つて持ち歩く者、仲間同志で交換をする者も出て来た。その中に誰が発見したか、貝の表裏を擦つて中心を残す面白形になるこまが解つた。これでネクレースや、ハット・バンドを造るものも出た。

出所する時は、この貝のハット・バンドを着用するのだと勇む者も出た。分銅に稱するのに釘で彫刻を始めたのがヒロの末岡夕鳥子で、貝を材料のインタニ一藝術は漸次本格的になつて行つた。

便所のセメントの床で擦る者、床下のセメントの柱で擦る者、さては屋根の上つてルーフィン・ペーパーの上で擦るもの、暫らく百鬼夜行の状態が續いてから、外から砥石の差入れが許された。

最初は小さい貝を親指三人差指に握つてすつてゐたが、それでは指先がすり減らされるので後には木型を造り、それにはめ込んでするやうになつて貝細工はここに多量生産を認るに至つたのである。

「貝はね、神代の昔にはお金として通用したものです、その貝を傷けるなど勿体ない話ですよ、僕は貝細工には断然反対です」夕方になると日本着で構内を散歩する神官の「エーさんは決して此の貝細工の仲間に入らなかつた。」

すつた貝は石鹼水が入つた小瓶に入れられ、インタニー達は暇さえあれば其の小瓶を鈴のやうに振つて貝の掃除に餘念がなかつた。そして綺麗になつた貝はダツクレンザ

をつけた布切れで磨かれ、更にその上ブラッシンかけられてピカピカした光を發するのであつた。斯うして出来たネクレースは面會日に愛妻や愛娘達に贈られた。「水晶のネクレースは金さえあれば町の店で買へるけれど、こん貝のネクレースは金では買えない」愛兒から賞められて、ホロリとする父親もあつた。

それが思ふに「子供云へば仕方のないもので、この間も家のまわりのカタツムリを拾ひ集め「ダデーにやるのだ」にて一握りも持つて歸り、ピツクリさせられまし」と妻君から報告を聞いて微苦笑する良人もあつた。

さうした生活の中に米大陸向け幾組かのインタニーが護送されて行つた。中には大事さうに蒐集した貝を米大陸まで持参した者もあり、置土産にするまで使ひ古して毛の抜けたブラッシンや布切れを同僚に残して、行く手定めぬ大陸の旅に出發した者もあつた。

砂島のゴールド・ラッシュならぬ貝掘り狂騒曲は、まことにホロニガイ思ひ出ではある。

一九五〇年一月

海里味 朗 執筆



夜間

柵内降誕祭

海里味朗

一九四二年十二月二十五日、私にまつては柵内第一年度のクリスマスもつた。おしいロースト・ターキーを初め、フルーツ、キャンデー等を頂き乍ら、思ひは外に寝て来た家族の上へ走つた。

聞けば外では物音が少い云ふが、家族たちは鶏の半切れでもい、口にするこも出来たうらうか、と思つた。

外部の家族からは、子供たち連名のクリスマス・カードと、プレセントとしてチョコレート一箱が届いた。無造作に印刷されたカードの鐘と赤い實かも知れぬが、前者からは静かに鳴る音が聞えて来る。後者は兩眼にしみ入る赤さであった。又チョコレートに使はれたクリスマス包装紙が、こんなにまで美しいものだ、とは知らなかつた。

毎年のクリスマス、正月には数え切れないほど多数の賀状を受取つたものだが、この年はたゞ一通、子供たちから受取つたのみで同僚にかくすやうにして封筒から出しては読み、封筒に収めては又出して見る。これを幾度繰返したこもか。

この日、夜となつて、ラヂオは壯重なクリスマス・メロデーを送つて来て一入、感傷を深めた。

例により猫の目玉の欲しい暗闇の中で降誕祭祝賀演藝會が始められた。鐘詰の櫻ン坊の果汁を醗酵させた云ふ飲み物が廻されて、同僚たちは大變な御機嫌になつたがこれが爲め夜中の便所は千客萬來の盛況を呈し、中には腹痛のためウン／＼唸る者を出したが、今から考へると、これも懐かしい思ひ出だ。

前年、即ち一九四一年、先輩達は同じくこの島のメスホールに集まつて、淋しいクリスマスを迎えてゐるのだ。

この日、晝にはターキーの馳走があつたが、このターキーの入つてゐる箱にはマニラ行きと記されてゐたをうだ。

便所用紙などを使つて形ばかりのクリスマス・ツリーも造られ、夜にはさ／＼やかな集會が催され、クリスマス歌を歌ひ乍らそこから、こゝからもオエツが起つたと言ふが、無理のない事だ。

席上、同じくインクニードつた布大講師タワリー氏が、この戦亂が一日も早く收まつて、來年のクリスマスは一同元氣で家族と共に迎えたいと祈つた、と聞いてゐるが、そのタワリー氏の指す來年のクリスマスは早くもこゝに巡り來つたが、戦亂は何時治ま

るか見當もつかず、私達の心は暗然たるものだつた。戦争勃發以來三回目、私にまつて柵内第二回目のクリスマスは、一九四三年ホノウリウリで迎えた。

十二月二十四日、一方の運動場ではベイスボールが行はれ、一方ではテントの端切れで作つたマワシ姿も凛々しく大相撲が展開された。

クリスマス・デナーの馳走があつたのは二十六日、これは二十五日が家族の面會日だつた爲である。

この日メス・ホールにはパイアの木で造つた珍無類のクリスマス・ツリーが建てられた。

黄金色のレモン、銀色燦然たる鐘詰の空鐘、使ひ古されたカード、手袋、林檎、玉葱、にんじん、ドーナツ、とうがんの輪切り、コンフレックスの箱などがパイアの木にブラ下けられ「メリー・クリスマス、メスホールのギヤングより」大書してあつた。

一方、この日食卓に並べられた御馳走は砂島時代豫想も許されなかつたほど豪華なもので、柵内生活も長期に入つた落着きも充實さを見せた。

等々で、ローヤル・ハワイアン・ホテルへ行つても頂けないだらうと思はれるほどのものだつた。

斯うした御馳走の頂けるのもコックさん達の誠私奉公的な働きによるものたゞて一同拍手を以て感謝の意を表したのである。私は隣の同僚に、世界のどこかでは一切のパンも得られず餓死に瀕してゐる者もあると言ふが、それに比べると私達は何かいふ幸福に恵まれてゐるのだらう、と言ふに、冗談ではない、監禁されて何が幸福だか、一蹴された。

私はこの日一日中この一言が胸中の塊となつてどうしても解けず、自ら修養の足らなさを責めるのだつた。

この夕方、食堂では教會サーピスがあつたが、説教題は「ライト・エンド・シヤドウ」だつた。

集會からの歸途、谷に架けられた木橋を渡り乍ら空を仰ぐと、眞上の層雲に夕陽が映えて、この世のものと思はれぬほどの美しさだつた。

一九四九年十二月
この時の時勢

1944年7月

夏草やつはもの共の夢の跡
 面會濟んでバスが出て
 ヒツソリ閑のメス・ホール
 残れる又、紙屑、風に散る
 撒き散らされたる紙屑の
 一つ一つの思ひ出よ……
 面會の後には、誰でもきまつたやうに軽
 い疲れを覚え、しばらくはボンヤリして
 るのが常だつた。

高峯時報

(一九四四年十月) 張



夜間

面會日の涙

海里味朗

一九四二年六月七日サンデー。それは砂島抑留所で家族との面會が許された第一回目。面會日で、其處でも此處でも大の男が不覺にも人知れず涙を流してゐた。

監禁されて以來、思ひは何時でも娑婆に殘した家族の上に注がれてゐた。暇さえあれば手紙を書いて、ペンブ・セルターの用意はどうか、ピクトリー・ガーデンの野菜はうまく育つてゐるか、子供達に澤山マンガを喰べさせないよう、又學校の復習をさせるように、次ぎ／＼に問ひやら註文を慣れない英文に托したものだつた。

朝間早うからキ少舞ひ上る俺も飛びたい垣の外
キ少の飛ぶ音を聞くにつけても娑婆に殘した家族が氣になつたものだつた。

第三回船男子百九人が米大陸に向け砂島を出發したのは、四二年の五月二十三日だつた。

切ない思ひをキヤベに書いてけふは立ちます大陸へ……送られる者の心であり惜しき別れを拍手にこめて送りますぞえ同胞を……

送る者の心だつた。實際、あの島のキヤベには色々悲壯な文

字が落書されてゐた。その中に、監禁のなほも續くか大陸へ……と言ふのがあつたが今に忘れられない文字だ。

その第三回船を送つた翌日、今後二週間に一回、インタニーに家族との面會を許す云ふ發表があつたのである。

肥後の浪人自稱する野田稻造君は上原ドクトルの事を、勤王の志士上原大之進なご、愛稱して仲間を喜ばせたのだが、そのドクトルは當時、好きな煙草を斷つてゐた。

この家族との面會許可を聞くや、斷然、禁を破ると、おいしさうに煙草を吹かしたのだが、それほど此の發表は皆を喜ばせたものだ。

所が九月四日の面會日からは用語は一切英語と言ふことに規定された。これほど不粹な規定はない。中にはおぼさんとの面會を許して貰ふため英語力の試験を受けた若い獨身のインタニーもゐた。

通つた／＼試験に通つたと大聲で叫び乍ら、事務所からバラツクに歸つて来る若者達の見受けられたのもその頃だ。

面會場には、その頃不用だつたメスホルが使用されたが、方々にガードが立つて

英語で話してゐるかきうか見張つてゐるのだ。違反すれば次の面會特權が取消されるので誰も彼も眞剣な顔をしてゐるのだ

日本語ばかり使つて来た自分の家内に向つてハウ・アー・ユーではカミシモを着て靴をはいた感じなのだ。細い事項には全然ふれられない。當惑した顔、又顔だつた。

歸米組のエー君は、おぼさんに面會したのが最初から終りまで二人共、地蔵様のやうに無言の行を續けたといふ氣の毒な話もあつた。しかし、この不粹な規則が間もなく撤廢された事は勿論である。

何と言つても、久しく別れてゐた子供に會ふほど嬉しい事はない

久し振りぢやも子供を抱けば何も知らずにすやく／＼眠る月に一度の月一度の面會日

これは四、五才のいたいけな子供に會つたビー君の告白だ。

現金は一仙も持たされない抑留者の父に向つて、五仙頂戴させがむ子供も居れば、パパ一緒に歸らうよさせがむ子供達も見受けられた。

待ちに待ちたる面會日積もる話に時過ぎて父さん歸ろさせがむ子の頭なでなで目がうるむ

明日は面會日だと言ふ前日は散髪屋が賑はひ、又面會日の朝は皆ヒゲをそり、靴を

磨いたものだ。

娑婆にゐる時、自分の家内に對して斯うまで氣を使つた者は恐らくあるまい。そして二、三日前から食卓で喰べずにあててゐたアツプル、オレンヂを唯一の土産に、いそ／＼と面會場に向つたものだ。

後には家族への土産に手製の下駄や、子供達の喜ぶ手製玩具を持ち込むやうになつたが、無精のエス君は斯うした努力を拂はず、愛兒から「お父さんは何も呉れない、ウエスト・タイム」だと言ふ難詰されて苦笑してゐた。

砂島からホノウリウリに變つてからは、砂島で拾つた貝で造つた龜の子が澤山、お土産として登場するようになった。これらの龜の子は面會場のテーブルの上を盛んに這ひ廻つたものである。

この間の面會日にお父さんから貰つた龜が段々大きくなつて行くやうな氣がします有難うね、と言ふ手紙を受取つて、荒くれ男のエム君がオイ／＼泣いてゐたのも忘れられない。

よそのおぢさんに向ひ、グデー、バイ。バイと叫んでゐる誕生過ぎの子供がある。見分けがつかないのだ。それに對し、娑婆から持つて来てくれた花束が、インタニーの手で振られてゐる。斯くて會ふては又、別れるのであつた。

家族に別れたインタニー達は着物を着かえて、今度は面會場の大掃除である

1949 十月

が多いので、内田ドクトルは軍醫を助けて朝早くから夜おそくまで働いたとのことだつた。

終戦後、歸宅、開業して間もなく病魔にたはれたが、或る意味で一人の尊い同胞愛の犠牲者と言へよう。

永眠される二日前、病床を見舞ひ「ドク

トル、元氣になつて下さい、そしてホノウリウリの延長戦をやりませう」言ふと、かすかにうなづいたのだつた。

監禁の思ひ出を綴るに當り、ドクトルの冥福を祈るや切である。

東洋時報

一九四九年十月一日



溪間夜話

かんきん碁

海里味朗

砂島草津節の一節に

「當りしちやうも覺えたばかり
口が達者な監禁碁」

「一言ふのがあつた。」

「一面お願ひします」

「娑婆からでせう」

「いや監禁碁です」

「一言つた風である。」

一九四二年、朝夕スエターの欲しい春尚ほ浅い三月、移民局に連行された最初の夜商品包装用紙に線を書いて碁盤に當て、ラツキー・ストライキ、一カートンの空箱を一仙銅貨大に切抜き、青い部分を黒石に圍碁に耽つてゐる先輩達を發見し、暗然たる氣持の中に一種の微笑ましさを覺えさせられた。

それから砂島に渡つて見るに、大工シヤツプに通ふ同僚の肝入りにより、ブライウードで實物大の碁板(盤ではない)が造られ、又屋根脊に用ひるルーフィン・ペーパーを丸く打抜き、その半數に白いペイントが塗られて立派な碁石が造られてゐた。

田中一翁だつたと思ふが、白いペイントを塗つた碁石を、丁度豆でも干すように乾かしてゐた。如何にも春日遅々たりと言つた監禁所風景だつた。

その中に、大井哲夫氏が娑婆にゐる時、

監禁所に贈るよう斡旋したといふ眞物の碁盤がドシン／＼入つて來たが、その中には、黒黒々々本願寺別院と認められたのもあつた。

程なく大井氏自身がこの碁盤を使用する運命に置かれて定めし感、無量だつたに相違ない。

田中敏行君は言ふまでもなく布哇生れで日本育ち、日本の父母の出身地は廣島市仁保町字本浦であるが、こゝでは専らターさんで通つてゐた。

前歯が抜けて物を言ふ呼吸がスウ／＼と洩れて來るの、碁が好きなの、で忽ち有名になつたが、その進歩も早かつた。

キャンプでの受持仕事は便所掃除で朝の一時、汗を流して働く後は自分の體、一日に十數面も打つこいふ熱の上げ方で、食事のベルも耳に入らず食事を抜かず事がよくあつた。その癖食事の時は何時もビツグ・ライス(皿に二人分の御飯を貰ふ事)を貰つてゐた。砂島で別れたきり消息を聞かぬが、碁云ふと何時も思ひ出す人物の一人である。今は何處でどうしてゐるか。

大溝京一君は、世の辛酸を嘗めつくしたと云つて、程、色々な経験の持主で、何時も、警句とも諺ももつかない事を機關銃のやうに連發し乍ら碁を樂しんでゐた。

海里味朗を捕へては

「フグの腸、ドクと云ふ白黒遊ぶをゴと言つてネ、時に一面稽古してやらう」ミ誘ひかけたものだ。

「カアさん、いよく徳利味噌を越えてタコの鐘詰になつたな、もう勝味は山椒の實ほどもないぞ、碁は勝と見て和尚の晝寝かな」ミ言つた調子であつた。

この大溝君も、時々苦境に陥るこゝあり「いや、茄子俵でキユウ／＼じや」と悲鳴を上げてゐるこゝもあつた。

渡米前の杉田砂丸君も碁を始めてゐたが自分の景氣のいい、時は鼻下の美髯をなでながらニヤリ／＼してゐたが、自分の形勢不利となるや、これ又食事のベルが耳に入らない組だつた。

同姓松本君が二人居り、一人を侍松ちやん、他の一人を奥州松ちやんと言つたが何れも碁が好きで、何しろ片方が勝ち始めるに「喰ふちやア茶をのみ、喰ふちやア茶をのみ」で両手ですくふほど敵の石をせしめたものであつた。二人共屈強な若者だつたが、その後の消息を聞かない。

兎に角、各バラツクに二面平均の碁盤があり、何時も引ツ張りダゴだつた。

それでも係のルテネットから、砂島から大陸に送られる日本の不遇勇士に、慰安のため盤石を寄贈してやつてくれなにかミ交渉を受けた時は「皆でも差し上げて下さい、後に残る我々は又入手の方法があるから」ミ情し氣もなく寄贈したものだつた、あの盤石は不遇勇士達ミ何處まで行く共にした事やら……。

砂島の日、圍碁大會が催された。その

時の試合規則には確か

一、よく考へて打つこゝ

一、一度置いた石は動かさざるこゝ

一、待つたなし

一、助言を禁ず

一、試合は四面勝負とし、同點の場合は決勝を行ふ

一、スポー・マン・シツプを旨とし一層奮勵努力せよ

一、麗々しく大書してあつた様に記憶する。

一、身は遠島流罪の境に置かれても、スポー・マン・シツプを旨とせよ、この氣概が嬉しいではありませんか。

この大會では吉山、川崎、花本、宮政、鞍掛、山根、金城、パンベの諸氏が優勝して、ホービに澤山シガレットを頂戴したものである。

ホノウリウリに移つてからは、自分自身餘り石は握らなかつた。

たゞ今は故人となつた内田ドクトルミ丁度似合のザル碁で盛んに白黒を戦はせた。

一晩でも碁を見せないと「海里さん、茶を入れますヨ」と、わざ／＼バラツクまで誘ひに來られたのには恐縮した。

内田ドクトルは又、曹洞宗の駒形さんともよく盤を圍んでゐた。

ドクトルは時々、妙な手を打つて、こちらを煙に巻いたが、後で「これは、けさ辻さんに習つた手でネ」と笑つてゐたのが目に見えるやうだ。

私がホノウリウリを放棄された後、沖繩方面から多數の收容者が來所、しかも病人

1949 九月

昔こひしく思ふじやないが
妻子諸共裏庭で

賞めて笑ふて眺めた月を
今じや今じや獨りで見ろものを

元をたゞせば移民の伴
樂土布哇のいじつえミ

親子二代を捧げしものを
何が何が因果の監禁ぞ

一九四九年九月

何れも
九月

何れ



夜間 溪話

配所の月

海里 味朗

移民局の鐵窓の外側、ガサ／＼と鳴るヤシの葉すれに千々と碎ける青白い月光、砂島の黒い大きなキヤベの葉末に仰ぐ水のやうに牙へた月、さてはホノウリウリ收容所の柵の並木の上にかんだ、くもり勝ちの月、配所の月ほど涙をそよるものはないからう。

マン丸い十五夜の月が一晩々々こませて行くに従つて、インタニーたちの心は曇つて行つた。

その頃（開戦の翌年）米、布間には日本の海航艇が出没する噂されて居り、布哇から米大陸に護送されるインタニー達を乗せた船は、きまつて闇夜を選んで航海したからである。

チリカンカンや砂島ステキヤ、ポークエンド、ピンスの續いた後で頂くチキンは殊の外おいしかったが、そのチキン、デーナを頂いた翌日あたり、ピリピリビロと笛がなり響いて大陸行きが下令されたものだ。

闇夜に云ひ、チキン、デーナに云ひ、インタニーたちの鋭敏な第六感に、滅多に狂ひのなかつたのは不思議な位である。愈出發の日には日頃より早目におきて仕

度した。ケチン働きの人々も、普通よりは一時間くらの早起きしてコーヒーを沸かすのが常であつた。

圍碁初段の岡田さんが「愈ハワイともお別れだ。水ゴウリ取つて出發しよう」さ冷々する暗いシャワー、ルームでザア／＼水をあびてゐたのも悲壯だつた。

支度がすんで、列を作つて出發する時は送られる者、送る者、みな目をまつかに泣きはらしてゐるのが常だつた。

○

大陸行きの命令に語り明した最後の夜、燈管が下暗闇にあの聲、この聲、忘らりよか

後はしつかり頼んだよさらば元氣で行つてくれ送られる者、送る者男、涙の惜別だ

螢の光、窓の雪歌へばみんな泣いてゐる又會ふ日まで、その日ま、あの顔、この顔、忘らりよか

部屋に歸ればヒツソリと友の寝た床をそのまゝに枕の汚れも懐かしい男、涙の感傷だ

その頃は、布哇が戰場になるかも知れぬと思はれた時だ。

大陸に行けば、自分自身の生命は大丈夫だが、残る家族が氣にかゝる。死ねば諸共に死にたいと云ふのが僞らぬ念願だつた。

その頃の生別は、或は永久の死別になるかも知れぬと思はれたのだ。今、布哇に別れて、いつの日、このなつかしい布哇で家族と一緒にいられるか、誰にもわからない暗澹たる運命だつたのである。

○
オーミいふ若い濃厚な牧師さんがゐた。愈家族との面會日が近づき、可愛い子供たちの顔も見られるまでピーエツクスからガムやキャンデーなどを買つて準備してゐるが、その面會日の前日、涙と共に大陸に向けて出發した。アヒナで作られた青いバラツク袋に納められたこのガムやキャンデーが、あれから後、行く先々でこの牧師さんの心を如何ばかり搔しむしつたことであらうか。

一方、家族の方でも、面會を楽しみに砂島行きのボートの出る棧橋まで行き、係りの軍人から、もう夫は島にゐないを告げられ、泣いて歸つた夫人がいくたりもあつたその頃キャンブにワイアナエから来た山崎さんと、加哇島から来た山崎さんと、山崎さんが二人ゐた。

○
兩山崎さんの家族が棧橋に來たことは勿論である。そしてワイアナエの山崎さんの家族は、山崎氏の大陸行きを告げられ泣く／＼歸宅した。ところが喜んで島を訪ふた加哇の山崎さんの家族は、はからずもワイアナエの山崎さんを發見して、今度は自分の不運におえつした、笑へない山崎さん人違ひ事件だつた。いくたび迎えた月であり、いくたび送つた闇夜であらうか。

○
晝をあざむく満月に歩くガードの靴の音、バンプワヤーに圍まれて幾度見上げた青い月

○
子供の時、友達のおはあさんの隠居所でながめた月、きまつて裏山の松の上に出てきたその満月を、不思議なものに思つた記憶がある。その後、月を見たのは何百回か知れぬが今も悲しいのは砂島の月夜である。

○
浮世離れたこの砂島に今宵ながある月の月、娑婆に未練は忘れてゐるに見れば見れば心は曇りがち

柳子

1949 七月

「あのネ、おばさん、^{たいやう}一杯の愛、その波の一つくに僕のキスを乗せて、この手紙をお送りします。ミ書いてあるのヨ」

「まア」
老夫人はたゞ一口、感嘆詞を發したのみであつた。

（一九四九年七月）
平



夜話

代筆の悪戯

海里味朗

離家三四月
落涙百千行
萬事皆夢の如し
時々仰ぐ彼の蒼

流罪の菅原道實が九州から都の空を仰いで詠んだ詩です、我々の今の心境は、我々のみに課せられたものではなく、既に多数の故人の味つてゐる所です。

燈火管制の眞暗なバラツクの中で柏龍天師は、しみ／＼抑留者を慰め、師自身もこの詩の中に慰めを求めてゐるようだった。自分自身が不自由を見る事は忍ばれたが家族が困つてゐるはしないか、三千々に心を砕く。そこそ文字通り断腸の思ひだつたそんな時ホームから、皆んな無事で暮してゐます、ミの手紙が来るミ、子供のやうにハンヤグのが常である。

乙山君は人一倍の妻思ひだつた、二三日も手紙が来ないミイライラ始め、一週間も来ないと事務所に飛び込み、いくら忙しくても手紙一本書けぬ事はない、こんなに迄夫に心配をかける妻は離縁しよう、と思ひますと、係の中尉を手コすらしたりした今度の面會日にはうんミ油をしぼつてやる、ミ豪語するのが常だつたが、その面會日の乙山君は妻君に向ひ合つて、借りて来た猫のやうにおみなしかつた。

別の鐵柵を隔てた隣のドイツ人のバラツクに、毎日浮かぬ顔をしてゐる一人のインクニーがゐた、噂では婆に殘して来た若い妻君から離縁話を持ち込まれてゐるミの事だつた。

其處へ行くミ、日本人女性はエライ。インクタンとされた婚約者ミ、自分から進んで移民局で結婚し、手を携えて大陸の轉住所に自ら柵内生活を求めた女性さえる。日本女性は偉いですヨ、殊に母親は偉いですヨ、皆勇敢に多数の子供を抱えて夫の留守を守つてゐます、ミはその頃新しく入つて来た一同僚の婆婆土産話であつた。そう云へば不遇勇士のゐたバラツクの掃除に行つた時、次のやうに母を稱える幾つかの落書が見出された。

数字な運命に泣くこの僕、母上よ、遙か西の空を眺めば我が胸を騒ぐ、何時の日か我が生みの母の胸へ、母あればこそ、生きんとして三度の飯を無理に押込む辛さ、心の太陽、母よ、健全なるか、外からキャンブに来る手紙の數に制限はなかつたが、キャンブから外に出す手紙には週間に一通ミか二週間に一通とか制限があり、しかも英語で認めねばならなかつた砂島の初期には書簡用紙も封筒も不足が

ち、先輩が漸く手に入れてゐた書簡用紙を一枚づつ融通された、しかもその用紙は一冊何枚ミ紙數が數えてあり、一枚ミて行方不明になる事が許されなかつた。便所用の紙に下書をしてから眞物の用紙に清書するミ言ふ順序だつた。又手紙はメスホール以外で書く事を許さず、一本の鉛筆のあくのを待つて次の者が書始めるミ言ふ風だつた。然しこれは段々緩和され、斯うした不自由も昔話の部類に入つたものだ。

兎に角、家族を安心させるため皆んな盛に書いたものだ。隣の友は妻思ひ今日も、こま／＼手紙書きスベル問ふ間も楽しさう週に一度の手紙日じやお前も書けば俺も書くと言つた風だつた。所が後に砂島からホノウリウリに移つてからは皆んな無事かよ、僕も無事、毎日手紙書いたのに、今じや月に一本書きかねる、パイア・ジュースになつたネと流行歌が歌はれるほど、怠ける者も出て来た。

人間ほど身勝手なものはない。甲田氏は既に五十近かつたが外に若い戀人があり、その戀人から英文で猛烈な手紙が来た。隣のベッドの友人に讀んで貰つてゐたがその友人が赤い顔をする程だつた。甲田氏は最初友人に返事の代筆を頼んで

わたが、暫くするや毎日ベッドにかじりついで英語の猛勉強を始め、半年後には自分で立派に用が足せるやうになつた。兎に角、急に英語の勉強を始めた者が多く、その人達が苦心慘澹して書いた英文の手紙には検閲官も破顔一笑するやうな、シエークスピアも三舎を避けるやうな新英文學が生れたに相違ない。今、日本人商工會議所の大井主事や商業金融會社の松井さん等は、朝から晩まで他人の手紙を書き、自宅への手紙を書く暇がなかつた。

代筆を頼まれた人の中には茶目氣の多い人がゐる、本人には内々で乙な文句を書き加え、留守宅の老夫人の頭に思はず紅葉を散らさせた、と云ふやうな罪のない話も終戦になつてから聞いた。主人から来た手紙を若い二世嬢に讀んで貰つてゐる老夫人があつた。最後のくだりになつて二世嬢がブツと吹き出したのです。「笑子さん、さうしたの、何んて書いてあるの……」

「言えないワ、おばさん」「そんな事ないでせう」「でも讀んだ後で、おばさんから吐られるかも知れせんワ」「今日に限つておかしな事を言ふのネ、かくされるミ餘計に讀んで貰ひたいのヨ」「ほんこ」「ほんこですとも」



夜間 溪話

柵内の猫

海里味朗

娑婆にゐる時はローヤル・ハワイアン・ホテルのクックだった、三専ら喧傳されてゐた屈強な獨逸人が一匹の猫を我が子のやうに可愛がつてゐた。

それが牝猫である事が殊更のやうに話題に上つたのも、高野山のやうな男世帯のキャンプ生活なればこそである。

この牝猫が何處で相手を見つけたものか何時の間にか妊娠してしまつた。

島のニュースは

三毛嬢のお産

パイプ・ワヤーにも

戀の花ヨ

チヨイナ、チヨイナ

これは入所以來駄作ばかり連發してゐるエスさん作る所の砂島草津節の一つである斯うしたエスさんではあるが、はち切れんばかりの大きな腹を抱えて、ものうけに歩く三毛を見ては、何か暗然とせずにはゐられなかつた。

エスさんは娑婆に、妊娠中の妻君を残してゐたのだ。

やがて三毛は數匹の可愛らしい仔猫を生んだ、インタニー達は代る／＼物置の一隅

にある三毛の家を訪ふては出産の祝意を表して目を細くしてゐた。

何しろ贅澤な米國陸軍のまかなひ、鐘ミルクではあつたが浴びる程に與へられ、チユー／＼と可愛い音を立て乍ら仔猫たちは見る／＼成長して行つた。

キヤベ花咲いて
實のつて散つて

監獄生活 まだ續くヨ

何時の間にか柵内の猫は十數匹に殖えてゐた。

一九四三年二月末の事、砂島收容所が閉鎖されるに先立ち、エスさん達エンクロジヤール・ワンの者がエンクロジヤール・ツーに假移轉したことがある。

何時でもそうだが寢床を變つた當分は寝つかれないものである、エスさんは悶々の擧げ句漸く眠りに落ちたかと思ふ鼻のあたりにはヒヤリとした物を感じて飛び起きたりして毛布の上でニヤオーンと細い聲を出してゐる仔猫を發見したのである。

「エスさん、それは前夜までそのベッドにゐたエフさんの仔猫ですよ、エフさんは平氣で鼻をなめさせてゐました」とそのバラ

ツタでのオールトイマーが知らせてくれたエスさん達が愈砂島からホノウリウリに移轉する時、金盃に入れた目高と共に新キャンプに運んだのが此の猫たちである、いかめしい憲兵たちも笑つて黙認してくれてのである。

ホノウリウリでも猫はドシム／＼殖えて行つた、或る頃は毎晩のやうに戀に狂ふ異様な鳴き聲を聞かされたり、又或る時は二匹のネコを圍んで聲援を送つたりしたのも收容所風景である。

こゝにも愛猫家のクックさんがゐて、キチンの仕事も済むとネコの喜びさうな食物をバラツクに持ち歸つて我が子のやうに可愛がり、此のクックさんが柵内を歩くに數匹のネコが後に續々／＼續くのだった。

山さんはヒヨウキンな男であつた、或時の面會日に、わざ／＼中尉殿の許可を得て仔ネコ一匹を面會に來たミセスに贈つた。この頃キャンプでは子供の喜ぶ玩具や、妻君の調法がマナイタや下駄等を造つて面會日の家族へ土産にしたが、斯うした細工物に不得手な山さんは、何か土産はないか三考へた末、仔ネコを選んだのである。

泣き笑ひ顔のミセスが仔ネコの入つた紙箱を大事そうに抱えてバスに乗り込んだものだつた。

一方キャンプの周圍のコアの叢林には野生のネコが居り、それが時々キャンプに來て食べ物を探み去つたが、彼等は人間に會ふミキラ／＼した眼でニラミつけるやうな態度を見せた。

その後戦争が済んで谷間のキャンプも跡方なく閉鎖された由だが、あのネコたちはどうなつた事であらう。

中には置き去りされて山ネコの仲間入りしたのもゐるのではあるまいか。

ネコと共にキャンプの愛猫者は式な朝晩ラツパが鳴ると、キャンプ内のそこからも、こゝからも犬の遠吠えが起つた。時々キャンプのインスペクションに來た大尉殿も愛犬を持つてゐた、この愛犬は何時も大尉殿より先走りしてキャンプに入つて來た。

やア、大尉が來たゾ、インタニーたちは犬の姿を發見するや、大急ぎでバラツクを片づけ、キチンとした所を大尉殿にお目にかへ、ベリー・ナイス、ベリー・ナイスの讃辭を頂いた事ら一再ではなかつた。

ラプレス軍曹にも愛犬がゐるた、丸々とした犬でインタニーたちからも可愛がられたが僅かな患ひで、ヒヨツコリ死んだ。事務所の附近に丁寧に埋葬し、日本流の墓標が建てられたが、今ではもう墓標も朽去つたことであらう。

斯くて戦争の思ひ出でキャンプの思ひ出も、日一日と遠いものになつて行く……。

一九四九年六月

高野山報

1949 五月

後に残る人たちの主催で、催した送別會
で、オー開教使の述べた告別の辭は、この
やうに立派なものだつた。
山川の末を流れる椽殻も
身を捨て、こそ浮ぶ瀬もあれ
水の枯れた谷川の向ふに、軍用大型ツラ
ツクが數臺並んで待つてゐる。
御世話になりました、御機嫌よう、谷に
かけられた長い板橋を踏む靴の音が段々遠
去かつて行くのだつた。

1949 五月

(一九四九年五月)



夜溪間 話

トンボ飛ぶ

海里味朗

(一) 同じ運命の はらからが 共に苦勞を分け合つた 泣く兒も黙る砂島に けふぞお別れ さようなら

(二) 大陸行きの はらからを 涙で送つた あの廣場 淋しき儘の歌聲が 毎夜流れた あのバラック

(三) 走る車の後に去る あれやこれやの思ひ出よ 閉め忘れたる戸の一つ 風にばかりと動いてる

(四) 目高も猫も諸共に 同じ車で揺られてる 行く手定めぬ遠い旅 陽やけた顔の黙り勝ち

一九四三年三月三日、丁度雛節句の當日 砂島の收容所は閉鎖されて、ケーさんたち 收容者は谷の收容所に移送されたのだった トミー・ガンの警戒も物々しく、異様な

身なりをした收容者たちを乗せた軍用貨物 自動車の長蛇の隊は、疾風のやうに走り 續けるのだった。 砂島の思ひ出は決して楽しいものではな かつたが、それでもお別れとなる譯の解 らぬ感傷を覺えさせられた。

これから行く新しいキャンプの生活、更 にその後に来るもの、それこそ、行手定め ぬ遠い旅ではあつた。 五月になつた、新しい溪間のキャンプも ほど整備されて、ホッと一息するのだった それは中旬の或日だった。無数の盆崎蛤 がキャンプ内を山手から海手に走る白い大 通りの上を、スイ〜飛び交ふのであつた 布哇で此の種のトンボを見るのは最初だ った。

砂島で、お父さんは来ないか、トンボは 来ないか、毎日空を見上げては謎のやう な事をブツブツ言つてゐた老人たちの姿が 思ひ出されたり、日本の田舎町で見た盆ト ンボの美しさが思ひ出されたりした。 バラックの横の日蔭でワイさんがナイフ 一丁を上手に動かしてサーカスのあやつり 人形を造つてゐる。 屈折する谷又谷の谷奥に連れて來られる

時は、この人里遠い谷奥で銃殺されるので はないかと思つた。 谷の傾斜でコアの木を切つてゐる人たち を見て、自分にもあんな荒仕事が出来るか ミ未恐ろしく思ふのだった。 更にバラック内に入つて見るに、顔見知 りの面々が齒ブラツシの柄を材料に器用に 指環などを造つてゐた。斯うした仕事を強 制されるのだらうか、不器用な自分には思 ひも寄らぬことだと又もや新しい不安に襲 はれた。 キャンプに來た當時、こんな嘘のやうな 告白をしたワイさんも、今はすつかり落着

いて、ナイフ動かす手の如何に器用な事か 山さんが便所の横にシヤガンで一心不亂 に小貝を拾つてゐる、山のキャンプで貝を 拾ふなど、ちよつと信じられない話だが、 このキャンプ一帯の土地は赤いネバ土な ので、海底浸漉から得たコラルや、海底土 砂が敷きつめられ、その中から艶々しい貝 がコロ〜と出て來るのだった。

山さんは戦時中、寫真機を持つてゐた廉 で、ヘッド・レーパー何年かを判決され、 オアフ監獄で刑期を終えてから、このキャ ンプに移されて來た人である。 ハード・レーパーの判決を受けた時、病 身の自分は獄死を覺悟して下獄したが、ハ ード・レーパーも言つても實際は樂な仕事 の中、友人たちの世話で洋裁部に廻され 色々な技術をさへ手につけた。 決して人間は取越苦勞をしない事、道に 窮まれりかに見えて、又必ず新しく開ける ものですヨ、非難は無用であり、贅澤なり

乾かしたレモンの皮をくすべて蚊を追ひ やりながら一夜、山さんがしみる語つた 彼氏の人生哲學である。 こんな大きな貝が出ました、山さんの 顔は輝くのであつた。 オー開教使の一行がいよいよ大陸に護送 される事になつた、監禁も言つても布哇に いる間は、一月に二度位家族とも面會出來 せる無事な顔を見ては安心するのだが、大 陸に送られたら何時、家族と會へるこゝや ら……

インクニたちの最も恐れ、嫌がつたの は此の大陸送りだつたが、それも定つてし まふに、元氣でキャンプにバイ〜するの が常だつた。 今、諸君とお別れするに當り、私はしみ じみお互に繋がる血の温かみ言ふものを 感じる、この温かみこそは世界の人々をし て、皆友人にする大きな力である。 我々は世界の人々が全部友人になると言

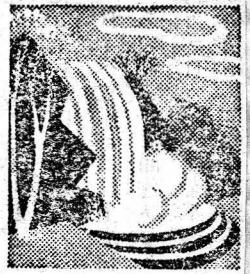
ふ理想に生きたい、そしてこの理想につな がる者は、お互に別れても、一緒にゐるの と同様である。 米大陸には私たちの先輩や友人が既に多 数に行つてゐる、最近の布哇の話を聞き度 いと、彼等は私たちの渡米を千秋の思ひで 待つてゐるだらう。 僕たちは元氣で出かけます、色々御世話 になつた事に對し心から感謝します、有難

1949 四月

いくらでも手に入るではないか、三友人たちは注意してくれた。
私は保釋になる前日の夕方、この寫經や色々書いた物を集めてマツチをすつた。
ペラ／＼と燃えて灰になつて行く寫經を見詰め乍ら、何んの感傷だ！ 目頭の熱くなるのを、どうすることも出来なかつた。

赤葉の集 四月号

(一九四九年四月)



夜間

寫經を焼く

海里味朗

世界を擧げての大動亂である、如何なる僻地にも、この動亂の國外に出ることは出来ない。

奔馬のやうな大洪水の中にあつて、自分一人抜手を切つて安全の彼岸に達するこゝは出来ない、若しこれをやらうすれば、憔悴と疲勞の中に、自分の一命を失ふこと必定である。

流れて身を委さうではないか、人事として天命を待つ外はない、呉れども自覚せねばならぬことは、これは自分一人だけの苦難でなく世界一人残らず全部に課せられた苦難だ云ふことである。

他の人々が寝静まつてから寝られぬまゝの同病者達が、暗い便所に車座になつて煙草を吹かし乍ら語り明すのを、誰が命名したか螢會云ふのであつた。

すウーと一口吸ふ毎に、タバコの光が増して丁度明滅する螢の光のやうだつた。

それは一九四二年の四月初め頃だつたらう、まだスターの欲しい時だつた、仕事先から着のみのまゝで捕へられ、移民局の一室に――外界から隔離されて思ひわすらふのは外の家族達の身の上だつた。

事と思ふに胸がハリさけるばかりだつた。斯うした心の動搖のはげしい時、或る夜の螢會で、しみじみ語つてくれた田中哲翁師の言葉は、私の心の曇りを、すうと拭き去つてくれた。こゝでは田中さんなど本名を呼ぶ者はない。お寺さんで通つてゐた。砂島に渡つてからは、お寺さんと一緒に掃除に當つた、こゝに來てゐる者の中にも大分道樂者がゐますネ、掃除前の便所を見て、お寺さんは時々苦笑ひしてゐた。到頭アメリカ送りか、云ひ乍らお寺さんは準備に忙しかつた。残る者は、去る者を螢の光を合唱して送つた。ABC順でお寺さんは列の最後の方にゐた、皆さんお世話になりました、あこを頼みますヨ、ミ叫び乍ら進むお寺さんの目には白く光るものが見受けられた。會者定離云ふが監禁生の位、これを切實に感じさせたものはない。

うであり、又その香ひが鼻孔を打つやうにも感じられたのである。般若心經を誦する群の一人になつたのはそれから間もなくだつた、これは後から聞いたことだが、その頃の私は少し變り方がひどいミ、ひそかに心配してゐた先輩もあつたミのことだつた。ホノウリウリに移つてから間もなく大賢充師を迎えた、同志十人近くが毎夜佛教講座を聞くやうになつた。或夜、話してゐる大巴さんの聲が曇つた風邪工合だなと思つたがさうではなかつた。最初皆さんから佛教の話をも乞はれた時私の返事は鈍つた、私は色々なことを考慮して決心がつかなかつた、その時フト然上人が土佐へ配流の途中、乞はれて説教されたことを思ひ出した。上人様、お説教されぬ方がいゝでせう、と云つた人達もあつたが、こう云ふ時にこそ佛の道を説くのが私の使命です、と云はれて、これから来るであらう更なる壓迫を恐れなかつた上人の心持に想ひ至つた時、私は私の卑怯を責めたのでした。丁度その夜の話が法然上人に關するもので、上人の話をしてゐる間に、大巴さんの聲は曇り、前のやうな告白をしたのである。高血壓で永いこと不快の日を送つてゐた田原丈一さんが、病院に入つたと思ふや、永眠の悲しい知らせに接した。インタニー達はキャンブの食堂に佛堂を設けて、故人のため追悼會を催した。

田原さんは米國のため二兒を陸軍に捧げてゐたが、氏自身はインタニーであつた、斯うした事實に對し一度も不平を言つた事もなく、世を恨む言葉を弄したこともない自分の運命を甘受してキャンブの明け暮れを迎え、そして卒然ミ他界したのである。田原さんは我々と幽明境を異にしたが、然しそのは生きて私達を導きつゝあるのである。今、こゝに、故人の生前愛したトメト、而もインタニーたちの汗と脂により作られた赤いトメトを靈前に供へて瞑福を祈る次第である。言葉は大巴さんが述べた通りではないが前のやうな意味の表白文が大巴さんにより讀まれた時、並るインタニーたちは思はずスリ泣くのであつた。その大巴さんが大陸に出發さきまるころ、師の講座を聞いた人たちに、告別の短い文字を贈つた。私の受取つた紙片には「信する心も、念する心も、皆彌陀のみはからひ」ミ書いてあつた。大巴さんの佛教講座を聞き乍らやつた寫經が相當の冊數に達してゐた。キャンブから外に出る場合、書いたものは一切エフ・ビー・アイに送つて許可を得ない限り持出し得ないことになつてゐた。折角假保釋にきまつて、つまらないことだけつまづいてはいけぬ、思ひ切つて焼いてしまひ給へ、外に出れば佛教の本など、

② 1949三月

お母様、元氣で加州に行く、心配するな
二度訪れまじきこの家、毎日砂糖をくれ
てやつた蟻達よ、食物に不自由をするだら
う……。
柵内に於ける人ミ、赤い鳥と、目ジロミ
蟻。
一樹の蔭、一河の流れも縁なければヨリ
難し、ミ云ふ 目に見えぬ不可思議な因縁
にケーさんは静かにメイ想の時を持つた。

一九四九年三月

(一九四九年三月)

1949三月



夜溪間 話

人と鳥と蟻

海里味朗

雛から育てた赤い鳥
肩にこまつて誇り顔
人の情は一筋に
けふも朝から虫さがし

あれ程愛した目ジロなのに
鳥にも親子ある可し
自由を許し籠焼いて
キャンプを去つた人の顔

友なる蟻よ、さようなら
砂糖やるのも今日限り
書き残したる砂文字
不遇の勇士今いづこ

コアの株を起し、地中深く埋まつた岩の
一つ一つを数日がかりで掘り出して、谷の
傾斜に美事な野菜畑が出来た、處女地の豊
富な養分を吸つて、玉菜の列は氣持よく成
長した。

すると何處からともなく白い蝶々が飛ん
で来たと思ふや、数日後には無数の青虫が
丸で蠶が音でも立てるやうに青い葉をむし
ばんで行つた。

野菜部隊の一兵卒ケーさんは、友人のテ
イラー、忠さんに造つて貰つた蚊や地のア
ミを木ぎれの先につけて蝶々を追ひ廻した

り、或はシヤガンで一つ一つ青虫を殺して
行くのが此頃の日課となつた。

今日は何時も違つて捕へた青虫を殺さ
ずに丁寧に一つ一つマツチの空箱に收めた
箱の中でグヨグヨする青虫を見てゐるこ
日本で過した少年の日の追想がチラリ頭を

かすめて通つた、あの青虫をエサに山村の
清流、ハネ上るハエの銀色。いけない、い
けない。ケーさんははつとめて想ひ出を追ひ
やるのだつた。

ケーさん、玉菜に青虫がついたツてネ、
濟まないが赤ちやんミつて来てやつてくれ
ないか。近頃さうも機嫌が悪くて食が進ま
ないので弱つてゐる。

けさ仕事に出掛けやうにするケーさんに
そう訴えたエフさんの姿が、次の瞬間、ケ
ーさんの頭を横ぎるや、ケーさんは思はず
ニコリするのだつた。

キャンプ内に蚊のわくのを防ぐため西側
の急傾斜に繁茂するコアの木を切りに行つ
たエスさんが、カーデナルの雛を拾つて來
たのは二ヶ月も前のことか。

娑婆にゐた時のエスさんは日本語學校の
先生であり、それに繪の素養があり、キャ
ンプでは堂々藝術家の一人として通つてゐ
た、器用なエスさんは早速空箱とスクリー
ンで美事な籠を造り上げた、

元來カーデナルでも、目ジロでも、娑婆
では保護鳥になつてゐて之れが捕獲は勿論
飼育にも許可が必要だつたが、この地獄谷
はこの點治外法權だつた。

所がこのカーデナルの赤ちやんは悪食家
で、生きた蟲しか食べないのである。エス
さんは彼の友人達までを動員して暇さえあ
れば蟲さがしに狂奔するのだつた。

何時頃からか、どろ蜂の巢はないかね、
ミバラックを軒別にドロ蜂の巢を探して歩
く一群が現れた、エスさんの水分たちであ
る。

ドロ蜂の巢の中には、その幼蟲のエサに
するための色々な蟲が生きたまゝ閉じ込めら
れてゐるのだ。エスさんのケイ眼には流石
に驚き、又窮すれば通じる道が何處かにあ
ることを教えられたのである。

今ももう眞赤な羽が生え揃つて目覺める
ばかり美しいカーデナルの姿を想ひ出した
ケイさんは、又大急ぎで青虫をとり始める
のだつた。

戦争が濟んでもう四年にもなる、エスさ
んの肩に止まつた儘、何處へも逃げなくな
つてゐたカーデナル。エスさん出所の時、
あれをさう處分したか、何時か尋ねやう、
尋ねやうと思ふが、今にその機會のないケ
ーさんである

赤い鳥と共にケーさんの記憶から消えな
いのは目ジロである、エスさんは子供がな
く、娑婆にはミセスだけ残してゐたせい

目ジロを自分の子のやうに可愛かつた。
朝食に出るオレンヂも自分は食べずに目
ジロに與えてゐた。又時々洗面所に行つて
目ジロに水を浴びさせてゐたエスさんの姿
が、こよなく尊いものに見えた。

太さうさんは娑婆にゐる時から目ジロ愛
好者で知られ、こゝでは目ジロ博士で通つ
てゐた、戦争前日本から取寄せた美事な籠
を外から差入れさせ、それで自慢の目ジロ
を飼つてゐた。

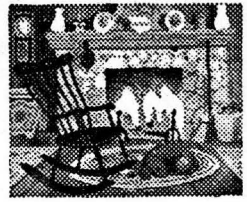
所がその目ジロ博士が近便で米大陸に護
送されるこゝになり、時を同じうして外
の夫人から、目ジロにも親子があります、
逃がしてやりなさい、ミの手紙を受取つた
博士は出發の前日、目ジロに自由を與え
その美事な籠を焼却して威勢よく布哇にさ
よならしたのであつた。

キャンプのあるこの谷では目ジロが無数
に殖えてゐた。時々雛の一群がバラックの
屋根に來て止まる、漸く飛べるか飛べない

かに見えるので、こつそり屋根に上る者も
出たが、近づくとバツミ立ち去る姿が何ミ
も言えぬ可憐なものだつた。

親子づれの目ジロがバラックの屋根から
屋根へ飛んで行つた、あれは何月頃だつた
らうかとケーさんは時々思ひ出すのだつた

これはまだケーさんが谷のキャンプに行
かないで砂島にゐた時である。一日不遇勇
士のゐたバラックに掃除に行くミ、木造寢
臺の板の上に次のやうな落書を見出した。



夜間 溪間 幸運の石

海里味朗

頭リナツツのゆるんだ者をパイア・ジュースと云ふ。これは抑留所内の者、又は抑留者三月に一回面會して所内の話を聞いてゐる其の家族達以外には通用しない珍妙不可思議な熟語なのである。

パイア・ジュースのエチ君の奇行は日を追ふて募つて行つた。

キャンプ内には所々に十疊敷もあるやうな自然石が牛が寝た恰好で横はつて居り、一つの趣を添えてゐた、又それと同性質の拳大の石が無数に轉がつてゐた。

エチ君は拳大の石の一つを拾ひ上げ、それを丸い石にするため大岩にコスリ始めた。軒から落ちる雨だれが固い岩に穴をうがつやうに、エチ君に握られた石は次第に一つのボールのやうになつて行くのだった。

「精が出るぢやアないか」

「或る日ケーさんが近づいて行くと、エチ君は此の石スリから生じた石粉で、自身の金入歯を磨いてゐるのだ、これはいけない、ケーさんは暗然たる氣持になつたのだ。見る間に四五人の抑留者達がエチ君を圍んでエチ君をからかい始めたが、それに對してエチ君は一言も應答せず、黙々として或は入歯を磨き或は例の石をスリ続けるのだった。

他の抑留者達が立ち去つて、ケーさん二人だけになると、エチ君は雄辯に語り始めた。

ケーさん、キャンプでは金具を磨いたり皿を洗つたりするのに、ダツチ・クレンザーを使ふが、こんな立派な石粉が難なく出来るのに實に不經濟な話です、この石粉の効力はダツチ・クレンザー等の到底及ぶ所ではないのです。

山口縣の私の郷里で叔父が砥石の山を所有してゐます、戦争が濟んでお互自由の體になつたら日本に行つて、この石山を開拓しませう、そして石粉を日本全國に賣り擴めませう。

「衛生の友」云つたやうな名前はさうでせう、あなたは新聞記者だったので一つ宣傳の方をやつて下さい、確に有望な仕事です。

お互に今は囚はれの身ですが將來は洋々たるものです。あなたも毎日馬鹿のやうになつて貝を磨くことだけは止めて下さい。

それからね、ケーさん、叔父の家の前に參勤交代の松があるのです、徳川時代參勤交代の大名が此の松に馬を繋いでお茶を飲んだのです。

何はなくとも麥茶の御馳走は私にも出来ませう、由緒も深いこの松を眺め乍ら麥茶を飲む光景を想像して下さい、そして元氣を出すのです。

これではエチ君がパイア・ジュースかそれとも私自身がパイア・ジュースか解らないミ、ケーさんには判断がつかなくなるのだった。

キャンプの生活は軍隊同様毎朝點呼がある、所が或る朝エチ君は突然、列を離れ抑留者達の前に立つた。

諸君、今朝より我れ彼れのアンダーミしてサーゼントをつみめん、氣をつけ……ミ號令をかけ出したのである、

彼れミ云ふのは二本筋の一等兵ラブレ

さんのことで、ケーさんたち抑留者の受持兵士であるが、このラブレス一等兵もエチ君の突びな行動は笑ひながら黙認する外はなかつた。

諸君、諸君は嘗て米國建國の父ワシントンや奴隷を開放したリンカンの偉大な徳について考へたことありますか、そして此の大きな徳に對して報恩の至誠を披瀝したことがありますか、無いでせう、諸君がここに抑留されたのは當然過ぎるほど當然です、人には報恩の徳がなくてはならない。

又諸君は娑婆にゐる時、奥さんを手傳ふため皿を洗つたり、便所の掃除をした事がありませんか、ないでせう、諸君は便所の掃除さえ完全に出来ぬ人間のクズ揃ひです、ここに監禁されるのも當り前です。

けさもあまり便所が汚ないので掃除に當つてゐる五人の人にやかましく言つたので、するとこの青二才生意氣なミ怒つた者がありました、怒るのが正しいか、私が正しいか、それは皆様の判断に委す。

諸君は耐えむらいた、フナザムライだ、エチ君は斯う叫ぶや、手にしたコアの棒切れを刀のやうに腰に差して走り出した。整列した抑留者の大部隊も、一等兵士も時ならぬ狂言にどつミ山の崩れるやうな大きな笑ひに包まれた。

その時のケーさんの顔は、なれば笑つたやうな、半ば泣いたやうな顔であつた。

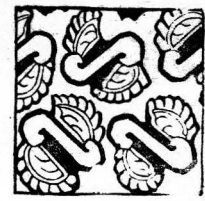
キャンプの東側、水の枯れた川の側にセングンの並木があり、其處に羽の眞赤なカデナルが遊びに来るのだ。

子供のやうになつてゐるインタニー達は暇さえあればオトリを使つて此のカーデナルを捕へるのである。

この前の點呼以來、エチ君は腰に大小をたばさみ、フナザムライを怒號し乍ら、このセングンの間を飛び歩き、折角オトシに入らうとしてゐるカーデナルを追ひ散らすのだった。

ケーさん、さつきエチ君が事務所から呼ばれ、何處かに連れて行かれましたが出發に際し、血眼になつてあなたを探してゐましたヨ、そして會へないミ知るや、この幸運の石を渡してくれと言つて行きましたヨ、エチ君が毎日の丹誠でボールの様に擦り丸めた所謂幸運の石を手にするや、ケーさんは急に臉の熱くなるのを覺えるのだった

四九二年二月



溪間 夜話

パイア汁

海里味朗

皆んな無事かよ、僕も無事、毎日手紙書いたのに、今ぢや月に一本書きかねる、パイア・ジュースになつたのネ。

十六萬のイケニエミ、胸を張つたも東の間よ、近頃すつかり愚痴ツぽい、パイア・ジュースになつたのネ。

魂の道場なりと威張つたもの、人が出て行きや氣があせり、嫌味一つも言ひたがる、パイア・ジュースになつたのネ。

鳥も囀れや花も咲く、氣持一つで苦も亦樂し、ひねるパイアの水にさえ、パイア・ジュースの味がする。

ケーさんのキャンブに於ける仕事は野菜作りであつた、娑婆にゐる時は新聞記者たつたが、柵内でその話が出るを定まつた様に横を向いてゐた。

ウフ／＼ミケーさんは獨りで笑つてゐるのだ、掌中の紙片には前のやうな皮肉とも歌ともつかぬものがマツイ字で書かれてゐた。

仕事に行く前の僅かな時間、灰色の自然石に腰を降ろしたケーさんは、獨りで書いては獨りでうなづいてゐた。

娑婆にゐる時、同じ新聞社にゐたエッチ君が移民局に收容されて色々奇行を演じた事は、當時移民局から砂島に來たエッチ君の同室者から聞いた。何れ砂島に來るだらうと思つてゐたが、その後何んの消息にも接しなかつた。

その中に砂島の收容所は閉鎖されてケーさん達はホノウリウリの谷奥に移動した。明日の運命の豫知出來ぬ不安と焦燥の中に、忘れることも忘れてゐた時、エッチ君がひよつくり谷の收容所に顔を見せたのである。

「到頭來たネ」「頼みます」エッチ君はケーさんの手をしつかり握りしめて、何かしら昂奮してゐるやうに見受けられた。ケーさんエッチ君は並んで食卓に就くのが常だつた。朝の珈琲のおいしい事、これはキャンブ生活をしてない者には解らないアツプル、オレンヂも毎朝のやうに添えられた。

米國産のフルーツばかり頂いてゐるミバナやパイアなご布哇産のものが戀しくなる、人間なんて我が儘なものだ。ケーさん、このキャンブには元縣會上院議員だつた人、下院議員だつた人、學校の先生だつた人なご、色々偉い人が來て居ますが何れも無能ですネ、ミ突然エッチ君は

話した。

寫眞の中の目が動くのです、實に不思議です、一つ出かけて實見の上、新聞に書いて下さいと、娑婆にゐた時エッチ君に連れ出された事を思ひだしたケーさんは、又始まつたナと無然たらすにはゐられなかつた。キャンブの各バラツクの周圍にパイアの木を植えませう、事務所から布哇大學に交渉して貰えば苗はいくらでも得られると思ひます。

パイアは一年も経つて實を結びます、パイアはおいしいですよ、米國産のレモンは一滴二滴落とすと味は更によくあります。それにキャンブの中にパイアが茂れば自然カモフラージュとなり日本の飛行機が來た時も安全です。

ケーさん、あんたも毎日きちがいの様に貝ばかりスルのが能ではない、貴方が率先して此パイア植樹運動を起して下さい。それから後と云ふものエッチ君はケーさんの顔さえ見ればパイアを植えなさい、させがむのである。

おさなしいケーさんも、これにはくたびれた、そして困つた事になつたと、心ひそかに、ため息をつく日が多くなつた。それから二ヶ月ばかり経つた或る日、エッチ君のバラツクの物干糸にビシヨム／＼に濡れたブランケットが二枚ばかり干してあり、この事が此の日キャンブに於ける一番大きなニュースになつてゐるのだつた。エッチ君が昨夜洗面所……と言つてもそれは長方形の箱になつて居り、人が一人横

になつて寝られる大きさに……に湯を一ぱいため込み毛布に體を包んで寢込んでゐるのをガードに發見された云ふのである。エッチ君、どうした、ミ云ふのだ、ケーさんがきめつける様に問ふ……

ケーさん喜んで下さい、もうパイアを植える必要がなくなりました。パイア・ジュースがまるで、お湯のやうに出て來るのです。貴方にも飲んで貰はうと思つて、今朝起きるに貴方を採してゐた所です。それは昨夜の事です、私はインスピレーションを感じました。そして馬の温度はいくらか、それを調べるため昨夜洗面所で毛布にくるまつて之れが研究を行つたのです。所がそれが不思議なのです。その温度とお湯の温度、その中間の温度こそはパイア・ジュースの味がするのです。さア、飲みに行きませう。

これまでキャンブでは頭の變になるのを頭にガスが溜ると云つて來たが、この事件以來パイア・ジュースになると云ふやうなつたのである。

(一九四九年一月)

1948 Dec 1948

ジヨウなど、書いて直ぐに愛情の意味が頭に来るだらうか、吾々年輩の者にはアイジヨウを書いて愛情とも意味を解し得るが、最初からローマ字で日本語を習ふ者に、は

つきり此の意味が解るだらうか、と反対論を表明したのはデーさんである。

その心配は無用、アイジヨウ即ち愛情と言ふ意味だを教えて行けば決して不都合はない、と説明するのはシーさんである。

今、日本は一大動搖期にある、その中で色々な事を決しても無駄だよ、日本が落着いて、その独自の姿に立ち歸る時、矢張り國語は盛になり漢字も昔のように愛用されると思ふ、日本國民なら日本の國語、國字を取去ることは不可能だ。

國聯の教育委員會で世界各國の理解増進のため一つの世界共通語を採用しては如何に云ふ議論が出た、而して然ればどの國語を世界語にするべきか？

世界で最も廣く使用されてゐる英語を世界語としては如何、この提案に對し世界の人口中最も多数が使用してゐる支那語を採用しては如何、この提案があつたに云ふ笑ひ話のように各國民がその國語に對して持つて居る執着は大きい。

一体斯うした漢字制限さかローマ字採用とか云ふ問題は政府などで法律を作つて決

すべきでなく、文藝家など文化人の力により自然に行はるべきだと云ふ議論もあるが傾聴に値すると思ふ。これはイーさんの意見である。

所で布哇の日本語はさうなるか、嘗て布哇の日本語學校の先生で、生徒に圖書館に行つて本をカツテ來なさい、と云つた人あり、生徒が圖書館は本を借りる所で買ふ所ではありません、と云つた話がある。これなど一例だが布哇の日本語教育には戦前戦後を問はず、改良すべき所が多々あると思ふ。

然し布哇教育會がその教科書に新假名遣ひ即ち發音通り書かせる假名遣は十年數前に採用したのは流石に先見の明があつたと思ふ。日本では今ごろになつて盛んに新假名遣を云々して居る、と初めて發言したのはエフさんである。

以上は當地の或る集會で其の遣の權威より「日本に於ける國語、國字問題」をいふ話のあつた後に行はれた甲論乙駁を記憶に残つたまゝ書き列ねた譯である。

所で布哇でよく使はれるチキン・ヘカ、あのヘカは日本語だらうか、何語だらうかと疑問が出たが、これに明答を與へる者のなかつたのは淋しかつた。

米大陸では乞食のこみをホボミ云ふ、あれは方々を賣つて歩くに云ふ日本語から轉化したに云ふ話があるが眞偽如何、と大笑ひの裡にこの集まりは散會となつた。

一九四八年十二月



國字問答覺書

附一 チキンヘカ

海里味朗

近頃日本から来る新聞や雑誌を見るに、嘗て用ひられた編輯人と言ふ熟字の代りに編集人と言ふのを用ひてゐる。所謂常用漢字制限のため輯の字を除いたのかと思ふ。特輯等と矢張り輯の字を用ひてゐる。編集人と云ふと集金人を連想して、おかしく感じるが慣れると、おかしくなくなるだらう。ミ語を切出したのはエーさんである。

漢字制限なんて面倒臭い、國語を全部ローマ字で表現しては如何、いやローマ字でも面倒臭い、いつそ全部英語にして仕舞え！實際、學校に於ける吾々の体験からしても、あの漢字を覚えるのは大變だつた、其上外國語をやらねばならぬ。授業時間の大部分を此の方に充ち、實際役に立つ學問の方が遅れた、今度の太平洋戦で日本の負け一因もこゝにある。

國語、國字の持つ魅力の鑑賞と保存、それは一都の詩人や小説家に委して、大多数は他の方面に力を致すべきだ。今日本の再

建に最も多数を必要とするのは布哇で言ふマカニツク、即ちあのクラスの普通技術家だ、ブレーキなきも制動機なきも日本語に譯さずブレーキはブレーキで教えねばならぬと言ふ説がありますネ、これは自分の説ではないですが一論題として提供したい、と言葉に挟んだのはビーさんである。

漢字を撤廃してローマ字を採用せよ、これは随分古くから行はれた議論、それが仲仲出来なかつた。日本に漢字が入つたのは

五世紀の頃と思ふが、若しあの時漢字の代りにローマ字が入つてゐたら今度の太平洋戦争は起きなかつたと思ふ。

今後の日本は孤立の日本でなく、外國と協調して進む日本であらねばならぬ、日本語なども自分で話すだけでなく外國の人に話して貰はねばならぬ、外國人に覺え易いやうに、自らも話し易いやうに且つ書き易いやうに一大改革をなすべきではあるまいか。嘗て日本歴史は日本人の手によつて書か

れた、そして唯我獨尊的の日本歴史が生まれ、これが今度の太平洋戦の一因になつてゐるとも解されてゐる。

日本の國語、國字問題なども日本及び日本人と言ふ穀の中に入つて考えず、第三者からも見て貰ひ、他のものと比較、對照の必要はなからうか、日本文法を組織立て、くれたのは外國人だと言ふが、この國語、國字の問題で外國人の力を借りて差支えないと思ふ。

そして斯うした方面の一大革新には自から時期があるが、今こそ其の絶好の時期ではあるまいか、ビーさんの説を裏書するやうに一大手術の必要論を持ち出したのはシーさんである。

日本の漢字が難しい、國語學習のため長時間を費すのが借しいと言ふが、英語だつて初めこそ容易のようだが深く研究するに徒ひ仲々難しいものだ、大學を出た二世で

英語の読み書きの完内に出来る者、即ち米人同様に使ひこなせる者が何人あるだらうか、まだ二世の中から後世に残すような大文藝作品を生んだ者を出して居ないのを見

ても英語がどんなに難しいかど解る。難しいといふと言つて日本語を継子扱ひにして貰ひたくない。ローマ字讀や假名文字讀が出たが、アイ

手
從
心



隨想 救濟小包

海里味朗

尾羽打枯らした逆境で受けた、ひまの情ほど嬉しいものはない、それはヒトの情に飢えてゐるからである。所がその飢が段々癒やされると共に、感謝の念が何時の間にか我が儘に變つてゐる、恐ろしいことである。

太平洋戦争が濟んで日本へ救濟小包が送られるやうになつた當座、日本から來た禮狀には讀んで思はず涙せるものが多かつたそれは恰も神に對する感謝の言葉とでも言ふべきものでつた、何を送つても有難かつたのである。

所が最近日本から來る手紙はどうであるか、砂糖などは豊富に手に入るから、他の物、例へば布類、石鹼類その他を頼みますとある。これなど一應尤もな註文で日本の人も大分暮し易くなつたことが窺はれる。

エー君は義理固い男で自分が小學校時代世話になつた村の恩師に、砂糖とか鹽とか生活必需品を贈つた、恩師からは涙の出る

やうな感謝の手紙が來た、こちらの一寸した行爲がこんななまでに喜ばれるならと、すつ小包を贈つた。

所が最近になり其の恩師から、實は自分の息子が近々結婚することになり、その披露宴の費用として十萬圓ばかり拜借した。必ず返済するが若し老齡な自分に萬一の事があれば、息子に於いて債務を果すから是非御都合願ひたいと言ふ意味の手紙を受取つた。

義理がたく濃厚で無口なエ君がカンカンに怒り、恩師への救濟小包を爾後一切中止だ、と吐き出すやうに言ふのを私は傍で聞いて同感だつた。

あの品を送つて下さい、この品を送つて下さい、と註文して來るのは近い肉親ではなく、却つて縁故の遠い知人や友人であるのも不思議である。親とか兄弟とか言ふ親しい人達は布哇でも入費の多い事だろうから、救濟小包に無理をせぬように……こちらでは何うにかやつてゐるから安心してくれと云つて來る場合が多い

何番の新しい靴を送れ、やれネキタイも欲しい、濟まないがスーツも一着頼むといふのは大抵アカの他人に定つてゐるのだ。

布哇からの救濟小包も一面様々な弊害が伴ひ始めた。受取り人の中にはアレを闇に流して不當な利を貪る者もあるらしい、又救濟小包はしさに既に故人になつてゐる人の名を使つて偽手紙を寄越した者あり、これこそ地獄からの手紙だ、當地の新聞に紹介された奇妙な事件もある。

又最近の日本通信に、某戰災孤兒收容所は宣傳上手で、海外からの贈り物多く樂にやつてゐるが、實際によい働きをしてゐる他の收容所は宣傳下手で海外からの贈り物が少い、さうか海外同胞の温かい手を延ばして貰ひたい、と言ふ一節を讀んだ時何もなく嫌な氣がした、救濟小包の争奪戦など言ふ事は考へただけでも嫌ではないか。

與える者は幸ひなりと言ふが、物と與えることが如何に困難な事であるかを、同時に考えさせられる。

救濟小包もよく考へないで、徒らに相手の依頼心を増長させ却つて相手を毒するこゝになる言つた人もある。

日本國民の獨立自尊、日本再建の爲の救濟小包はドシク贈るべく、日本國民に徒らに依頼心を起させるやうな救濟小包については、多く一考の要がある。

この調子でゆく救濟小包問題の次には日本よりの寄附募集問題が起りさうである現に起りつ、あるのかも知れぬ、在留同胞としては緊禪一番せねばならぬ秋だ。

又、布哇から日本へ贈つた救濟小包に對する禮狀が最近紙面が少い云ふ邦字新聞に手を替え、品を替え發表されるのはさうかと思ふ。

それが小包贈り主の希望か、本人が知らないうちに他の人が發表したのか、若し前者であれば尙更鼻持ちならぬ。

慈善や美擧に、自分の名を出さねば承知出來ぬ、すれば夫れは本來の慈善美擧の範圍をハミ出してゐるのだ。

一九四八年十一月



隨亡んだ王朝

海里味朗

去る八月十二日は米布合併五十年記念日に當り、政廳玉座の間に於けるカラカウア王、カピオラニ女王の王冠公開を始め種々なる記念行事が行はれた。

今から十三年前一九三五年二月、布哇の日本人社會は官約移民來布五十年記念行事を行つたが、同じ五十年記念でも今度はあの時とは違つた感懐を覺えさせられた。

大廈の覆えらんとする時、一木いかにこれを支えんと言ふが、時勢の赴く所何人もこれを阻止し得ず、布哇王朝が滅亡し去つて早くも五十年と言ふ星霜を経たのである。

一八九八年(明治三十一年)八月十三日に發行された「やまご新聞」にこの合併式の模様詳しく出て居り、十二日發行された布哇タイムズ紙に再録されたが、近頃興味を以て讀んだ文獻の一つであつた。

あの記事を見ると、この歴史的布哇國受渡式は十二日の午前十一時四十分より執行され、殷々たる二十一發の禮砲に次いで布哇國旗の引降ろされたのは正午に先立つ三分前より「見物人の中にカナカの來り居り

しはいとも少く、此れ等の者共は自國旗の引下されし時は左も術無さそうに涙に咽び居たるもの多かりし」云つた今日から見ると文語体の記事も注意を惹くのである。

これよりさきホルルの天氣は數日來好天氣續きだつたが、十一日より細雨となり當の十二日朝となるや一雨一曇、天も此の亡び行く布哇國を憐んだのだらう、記者の感懐が附け加えられてゐる。

いよ／＼二十一發の號砲と言ふより弔砲が響き渡るに共に、悲しい音楽が起り、この時又アヌ・パリの絶頂に起つた黒雲が政廳の上空に現れた時は涙雨となり、その雨の中に布哇國旗は引降ろされた、と書いてある。

所がいよ／＼星條旗が竿頭高く打揚げらるゝに及び天又快晴となり、タンタラスの丘嶺より風さえ起り、晴れの米國旗はその朔風に踊るが如く見えた、と書いてゐる。人生に於ける死の悲しみ生の喜び、天さえ悲しみを悲しみ、喜びを喜ぶべく、或は雨を降らし、或は一天拭ふが如き快晴を見せるなど、此邊の様子を現すに記者の拂

つた努力が看取できる。そればかりでなく、布哇旗の降ろされた時の見物人は測然として涙を呑み、沈咽寂として聲なく、各自言ひ合せし如く弔意に充ちてゐるが、それが次の瞬間、星條旗の揚がるを見て勢つき拍手喝采が起つたと言つてゐる。

アヌ・パリを見て半山は晴れて半山は曇る、詠んだ高僧があるが、これに思ひ合せて以上の記事は、測り知れぬ人の世の姿其人々によつて作られる布哇と言ふ一國家の興亡を叙し得て餘す所なしと云へよう。筆者の古い切抜き帳を出して見るに一九四一年九月十五日、布哇島ヒロ市の布哇毎日社が主催してヒロ三十五年座談會の記事が收めてある。

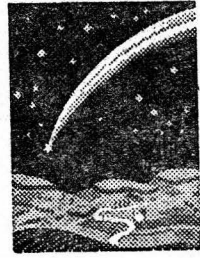
その中で俳人柴洞出川廉氏が米布合併の成つた當時の思ひ出を語つてゐる。
米人百人から成る祝賀行列がコート・ハウス(裁判所)前に達した。其處で先づ旗竿高く布哇國旗が揚げられ、次いで哀調切切たる奏樂が始まり、それと共に静々米布

哇國旗が降ろされたが、其處に集つてゐた多數の土人が聲を擧げて泣いた、即ち號泣した。
次の瞬間今度は米國旗が颯爽と掲揚されるや、今まで泣いてゐた布哇土人が一齊に拍手を送つた。今の今まで布哇土人に寄せてゐた自分の同情、自分の感傷が無情に踏みじられたやうな氣がしたと語つてゐる

ホルル政廳の光景と、このヒロの話を並べると自から通じるものが感じられる。布哇土人の單純な人のよさが、はつきりと感じられ布哇土人こそ、自然を自然のまま受け入れるこゝの出来る、所謂、悟りに徹してゐるのではあるまいか。

翻へつて布哇に在住する日本人はさうであらうか、現在あるこゝを有るが儘に正直に受け入れ得ない者もあるのではあるまいか？
觀すれば夢の世、觀ぜざるも亦夢の世に孰れか、まぼろしならざりける。思ひ内にあるものは龍革三會にあふと雖も凡夫出離の直路をしらず、覺めて後悟るものは虎穴龍潭に在りといへども諦伽成就の快樂多かり……

一九四八年十月廿



隨人・人を裁く

海里味朗

子供が悪戯をする、二度ミさせまい愛の鞭でなければならぬが、腹立ちまぎれの鞭になる場合が多い。そして子供の悪癖を見ていると、それが自分自身の幼い時の悪癖であり、又大人になつても、心の何處かに残つてゐる悪癖を解りゾツとする事がある。そして所詮人間は何人をもさばき得ず、眞に人間をさばき得る者は神の外にないと思ふに至つて初めて敬虔な氣持になれる。

頻々たる盗難に市民を不安のどん底に陥れた犯人を捕えた瞬間、探偵として言ひ知れぬ喜びと誇を感じることが、それが年端もゆかぬ青少年である場合、これが自分の子だつたら、どうだろうと訊問の鈍るこころがある、それで出来るなら罪を軽くして更生の機会を與へたい氣持になる。述べ懐した探偵があつた。しかもそれが某市警察署で鬼探偵のアダナをこつただけに、感、無量なるものがある。

警察署のファイルには青少年の犯罪が毎日相當數に上つてゐる、犯人が殺人なき重大性のものは別として、犯人が十六才以下の場合はその氏名を決して紙上に發表せぬことにしてゐる、他日社會に出た場合迷惑しないやうにこの心づかひであり、彼等に更生の機会を與へたい老婆心である。語つた新聞記者がある。

賭博で捕えられる初犯の罰金十五弗、二回目廿五弗と言つた所だ、もつ多額の罰金をこつた方が賭博防止になるのでせうと言ふ、心の底を割る誰にも賭博心はあるものだ、自分でもやつて見たい時がある、つかまつた者が運の悪いまでさ、そしてよくつかまるのは市井の賭博打ちで、紳士階級や富豪階級の大物は警察のレコードに載つたこと嘗てないからなア、と今一名の探偵は語るのだつた。

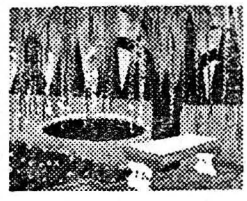
さう言へば、日本でも最近政府が國營として競馬や富籤を始めた。日本通信に見ゆ所詮人間のするこころだと思へば、これに皮肉を浴びせる譯にも行かないではないか。

死刑を言ひ渡す判決文の中にも「神よ、無限の智慧を以て彼の魂に恵みを垂れ給え」と言ふ一句がある、所詮は全智全能の神に祈り、お願ひせねばならぬ人間の智慧なのである。

これに對し「自分は人間のさばきによつて死するもの、神のさばきによつて死するものに非ず」と言つた死刑囚があつたと言ふが、何と言ふ深い暗示に富んだ言葉である。

地球に人が生じて以來、神のさばきを受けず、人間のさばきを受けて如何に多くの者が命を絶つたかと思ふと慄然たらざるを得ない。

一九四八年九月
海里味朗



隨想 床下を捜す

海里味朗

電車に乗ると、コートの萬年筆がなくな
るばかりでなく、ボタンまで擦り切れてし
まふ、小脇に固く抱へ込んだ靴は切られる
し、朝出る時綺麗に磨いたばかりの靴が會
社に着いて見ると泥土の中を歩いて来たや
うになつてゐる。

田舎では馬車馬が馬肉になることを恐れ
て夜間に仕事をしない、急病人あり電話
で醫者呼び出し、途中に待ち受けて、聴診
器以外の總ての物を盗み去つたと言ふ事
件もある。

然しこんな有りの儘を話すと、勝つた組
からお叱りを受けビジネスに影響します、
ミニ、三ヶ月前日本から歸つた一パイヤー
は語るのである。

その時、勝つた組の潜勢力も相當なもの
だと寒心した。あんな新聞にも相當書き
立てたから、もう勝つた組に遠慮する時は
過ぎたと思ふが、實際はさうか知らん。
と言つたやうな上合で、今は日本に歸る
時ではないと言ふのがパイヤー達の一致し
た意見である。

マクアーサー司令官が未だにパイヤー以
外の渡日を許してゐないのを見て、その
邊の様子は解る。

それなのに、船便毎に日本引揚者を見る
特殊な事情で歸らねばならぬ者もあらうが
中には勝つた組の言を信じて歸り、後悔し
てゐる者が少くない。

勝つた組なんて痴人の夢で一種の御愛嬌
だ、軽く受け流してゐた人もあつたが、そ
の言に迷はされて一身を誤る人があつた

れば、社會も斷乎たる態度に出でねばなる
まい。

去る五月、一寸した用があつて布哇島ヒ
ロ市を訪れた。住宅難はホノルル以上に深
刻であり、去る津波で住家を失つた氣の毒
な人々が未だに獨立學校の校舎を借りてゐ
る。

ある婦人が其處の子供に向ひ「お母さん
はさちらえ」問ふた所「お母さんは今日
もアンダハウスを捜しに行きました」答
え、そのいぢらしさに婦人は思はず瞳の熱
くなるのを感じた云ふのである。

當り前のカテゴリーなき借らうと思ひも
寄らぬ事、アンダハウスでもいいと言ふの
だが、そのアンダハウスも容易に見つから
ぬのである。

ホノルルでもヒロでも不動産の値段は上
がつたまゝ、動かぬらしい、それに近頃銀行
が貸出しを引締めて居るので小さい現金持
ちでは住宅は買えない、建築材料も思つた
やうに手に入らない、斯くて住宅難は却々
緩和されない。

そして小さいルームに大人や子供がゴロ
寝をする所に、(近頃)老年不良化の一原因があ
るとお偉方はおつしやる。

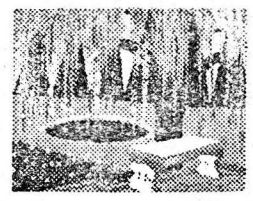
近頃オーケツトはさうです、と問ふと、
餘り金にならないのでネ、この事である、
そう聞くとミハツトハウスの手入れなども等
閑に附されてゐるやうに感じられた。

然しチーリーフ(俗稱オコレハオ)の裁

培が擡頭して居り、これは意外に感じた。
チーリーフと言つても方々の谷にある青
いのでなく、青地に白の縞のあるものだ。
これは冬の大陸で青い物の珍しさがられる
まき移出し、あちらの冬のテーブルを布哇
の青一色に塗りつぶす計畫、現に二枚五仙
で賣れるとのことだつた。

頭さえ使えば副産業はいくらでもあつ
と思ふ。まだ其處まで行き詰つてゐない、こ
れからウンミ不景氣になればなる程、新し
いものが案出されると思ふミ、ヒロ市に於
ける一指導者は(みん)筆者に語つたこと
だつた。

一九四八年八月
海里味朗



隨想 靴裏の泥土

海里 味朗

1948 七月

エス君は永い経験を持つ英字新聞記者である、鋭い観察眼を持つ男だが、この観察眼は戦時中の抑留生活で更に磨きをかけられたやうに思ふ。

その穿いてゐる靴を見て家庭のしつけが解る、と言ふのである、青少年の不良化問題が喧しい折から、確に氣になる一言である。然しそれがどう云ふ事を意味するか、最後まで聞かない事には、私には諒解出来なかつた。

エス君は布哇の抑留生活から米大陸の轉住所生活に自ら飛び込んで行つた、そしてどんな仕事をしますかと係から問ひを受けた時、エス君は笑ひ乍ら病院の掃除夫を志願した。

あなたのやうな人が掃除夫は勿体ない掃除なら誰にでも出来ます。何か役につけてくれとの事だつた。

新顔で、こちらの様子の解らない私が入所早々役についてもいゝ成績は挙げられませんが、こちらの事情が解るまで掃除をさせて下さい、貴方は今、米國陸軍の將校です。

が最初から將校ではなかつた筈だ、一兵卒から順を追つて昇進したのでせうと、反問する、その係の將校も、うなづいでくれたのである。

エス君は無言多行をモットーとして働いた。時を経て所内全員の登録日が来た、事務所に行くとき係將校の側に、ハイ・スクールを出たか出ないかばかりの通譯嬢がゐる「おツさん、何時生れた」ミ拙い日本語で通譯し始めた。

エス君が暫く黙つてゐる、將校は通譯嬢に向つて、この方の英語は貴女の英語より遙かにうまいのです、登録用紙を渡しなさい、エスさん自身で充分に記入できますよと言つたものである。

前歯を失つたまま、入歯もせず、つめて人ミ語るを避け、一心不乱に掃除のみして来たエス君は、英語の全然解らない第一世と見誤られたものだ。その人の風采や、その人の仕事で、その人格識見を評價したがる人が多い、第二次

世界大戦を機に、布哇でも、日本でも、仕事を變つた人が多い、その人の現在の仕事のみを見て、その人を評價する、先の通譯嬢の如き過ちをおかすのである。

靴と言へば、李下のかんむり、瓜田の靴、いふこゝろわざがある、瓜田で靴のみでも結びかえやうものなら瓜盗人ミ見誤れるそんな嫌疑のか、る行爲はつ、しめこいふのである。

又、隔くわさう痒ミ言ふ言葉もある、物事の徹底しない、齒がゆいこミを言ひ現して妙である。

戦争前「土と兵隊」いふ映画があり、あの中に出て来る例の軍靴の音は、今も私の耳底に残つてゐる。

戦後日本におくつて喜ばれるものに靴がある、然し一足揃えておくるミ盗まれるので、片足づつ、二回に分けておくるこいふ話がある。

あの映画に見る賑やかな軍靴の音に比べて何といふ淋しい、悲しい靴の話だらう。

るのだ、所がこの心がけのないものは、綺麗に掃ぢされた床の上に、遠慮なく土塊をまき散らして行くのである。

エス君、君も大抵に假面をぬいで君の天分を生かしてはさうか、と言つたのはエス君をよく知つた漁師の方である。

これに對してエス君は、それもいゝ、然し、その靴を見て家庭教育を知る言ふやうな発見はジャニターにして初めて出来るのだヨ、ミ大きく笑つたことである、

一九四八七月

九の

で「済みません」と言つたきり、問へど質せき打ち明けやうにしないのだ。見れば双の目に白く光るものさへ浮べてゐるのだ。今度はルームに引返して娘に話しかけると……

婚約して、純なものでせう、清いものなのでせう、結婚しますとお約束するだけでせう、それなのに、それなのに、あの人と言つたら、わたしの體に手をかけたので、わたし、いけません、とはつきりお断りしました。これだから日本で育つた人は嫌です、何かと言ふ直ぐ肉体的の交渉を持ちかけます。この點わたしなごの様に布哇に生れ、布哇で育つた者のほうが進んで居るやうに思ひます。大体この結婚話はお父さんだけが乘氣になつて、わたしは言はどお父さんの犠牲にならうとして居るのです。わたしも考へ直さねばなりません。

娘は中々雄辯である。私は私が叱られてゐるやうに思はれ、思はず顔の熱くなるのを覺えた。日本で育つた者、布哇、育つた者の間には斯うした相違があるのだ、これは自分も迂闊だつたと思つた。婚約原理論を述べ立て、身の純潔を要求する娘が如何にも高尚崇高なものに思へた。女は美し、女は清しこれはさうして、思つたより大物だと思はれ、それだけ、何うしてもエムのものにしてやらうと思つた。

よく言つてくれました。エムの早合點は充分叱り、今後氣をつけるように云ひ聞か

せませす。どうか、この事は三人だけの秘密にして下さい。そしてお互に實際を續け、理解を深めた上で結婚まで進んで下さい。四十過ぎた分別盛りの此の私が、僅か十七、八歳の小娘の前に頭を下けた恰好は今考へ出しても冷汗ものです。

何と言つてもエムは娘のお父さんに惚れ込まれ、エムよエムよと言つて信頼に目出たきものです。然し當の娘さんは何故かつれなく當るのです。辛く當られれば、當られるほどエムは狂暴的にまで娘を戀ひ慕ふのです。一日、私は娘を訪ひ、もう大抵で結婚してやつて下さいと頼み込んだ。

すると娘は「御承知の通り、わたしはずつと両親の許にゐて朝夕、畑の手傳ひをし、娘らしい生活を送つた経験がありません。結婚の前、處女にさよならをする前、處女として自由な數日を持たして下さい」

何しろ日本の少女雑誌や婦人雑誌を愛讀してゐるので、布哇育ちとは思へぬ利巧なこゝを言ふのである。「それはどう言ふ意味ですか」「四、五日ヒロで遊ばせて下さい。處女時代を充分楽しんでから勇敢に結婚生活に入ります」「結構です、さうして下さい。そしてエムを自暴自棄から救つて下さい」と云ふ娘はうつむいて、うなづいた。心なしか双の頬がホンノリ、めらめらしてゐるやうに思はれた。

わたしのマツい論、部下大工たちの萬歳萬歳のうちにエムは結婚したがどうもうまく行かない、丸で仇同志が一つ棟の下に暮してゐる形である。それもその筈だと云ふことが後になつて解つた。私一生の不覺でもある。

娘には豫て同年輩の戀人があつた。そして男は當時ヒロに出て仕事をしてゐたのだ。結婚直前、娘はその戀人に會ふためヒロを訪れたのだ。そして「結婚談がのつびきならぬ所まで進んでゐる、一緒にホノルルに駆け落ちしてくれ」と、男を説いた云ふより、男の度胸を試したのだ。

まだ年の行かぬ戀人は、事の重大さに、かけ落ちを躊躇したのだつた。娘は、云つても、もうエム夫人だが……エム夫人はこうした事情から、どうかしてエムを困らしてやらうと其ことばかり考へるやうになつたのだ。

或日エム夫人はエムを仕事場に訪ひ「大變です、いまホノルルからの日本語放送によりますと、高崎夫人の獨り息子武夫さんが危篤、實父に當る貴方の行方を探してゐるとのこゝです」と告げた。エムの顔が見る／＼蒼ざめたことは勿論早速大地に手をつけて、自分は過去に結婚したこゝざり、それをかくしてゐた罪を詫入るのであつた。

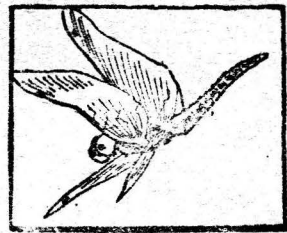
エム女は勝利の喜びを満喫した。然し此の放送がこしらへ事であると判るや、エムの心には大嵐が巻起つた。自分の秘密を知つてゐるのはテイ請負師即ち私だけのこゝに思ひ當るや、復讐の矢は私に向けられて來た。

エム女の實家の家系が悪いと觸れ歩いた云ふ無實の罪で、わたしは一日エム女一家及びその親族一統の前に呼び出されて、心にもない謝罪をさせられたのである。エムの細い手は知れてゐたが、わたしは之れ以上彼等を相手に争ふこゝに疲れ果てゐるのである。

勿論、エム夫婦たちは今も元氣で暮して居り、その後遠くから見るのだが夫婦仲も満ざらではないらしい。二人から恨まれて馬鹿を見たのは私だけである。

再婚をかくして結婚したエムもエムだが處女を装つた非處女の彼女も相當なものだつた。世の中の男女關係なんて、大体、こゝうしたもので男も女も相手を買ひかぶらないうようにさせよう。云ふのが此のはなしのヤマである。

一九四八年六月



小説にならぬ話……

高原の處女

海里 味朗

1948
2A

笑つてはいけぬ、今から二十年位前、私にもニキビ華やかなりし文學青年時代があつた。ワイさんは當時私が尊敬してゐた先輩の一人で、人生を語り、哲學を談じては私をしてワケの解らぬ物思ひに耽らしめたものだ。

「君、小説家の谷崎潤一郎先生を布哇に招待したいものだ」ミ口癖のやうに云つた。劍劇や浪花節や、相撲などを布哇に呼ぶ話

は聞いたが、小説家を呼びたいと願ひだのはワイさん位なものだらう。
「布哇ぐらゐの情痴事件の多い所も少からうそれが七色なまめかしい移民地カラーを帯びてゐるのだ、妻のある男がよく他の女に走る、その場合男だけを責められない時が多いのだ、君はまだ若いから其處までは解らんだらう、谷崎先生の筆に俟たねばならぬ事件が餘りにも多いのだ、解つたかネ」と云つてワイさんは獨り氣をよくしたものだ。

布哇を引揚げて日本に歸つて大分になるその後一度も文通した事がないが、時々ワ

イさんはどうしてゐるだらうか、と思ふのである。少年から青年時代に受けた印象は斯うも深いものだらうか、殊に終戦後に於けるワイさんはどうして居るだらう、谷崎先生も頭まげするやうな文字が終戦後の出版界に氾濫してゐるではないか。
これから書こうかと思ふ事件も、ワイさんが谷崎先生を煩はしたいと思つたもの、一つだ。私の力では小説体に書こうかなき夢にも思へぬ、事件の筋を記録的に並べるに過ぎない。誰か文學才能豊かな人の目にままり一篇の讀物にまごめ上げられる事でもあれば幸甚これに越したことはない。
この話をした人はテイと言ふ土木建築請負師で、これからの文中、私と言ふのはテイ請負師のことだ。

他人の世話も大抵にして置けと云ふのが私の結論だ、殊に男女間の仲立ちなど、片方では喜ばれても片方では憎まれ、後には両方から憎まれるといふ割の悪い立場に置かれることがある。
布哇島のワイメア高原。あそこは天高くひどいスピードで白雲が流れる下、チキン飽くまで肥え太つてゐる、ヒンヤリミ夜風を感じ乍らチキンヘカをやつて見なさい、布哇八島中、あそこ程オイしい所はない。高原にも文化の波はヒタヒタと押し寄せ、ハイ・スクールが建つこゝまなり、その工事を請負つたのが私だ。毎日ハンマーの音が澄んだ高原の大氣の中に響いて工事は進捗してゐた。
部下の大工の中にはホノルルから連れて來た青年も大分ゐた。エムは工事半ば、私を頼つて來た男だ、ホノルルで結婚生活をしてゐるが、氣の毒にもそれが解消し、妻と男の子に別れ、早く言へば私を頼つて都落ちして來たのだ。
高原は御承知の通り、野菜の名産地だ。所謂大小の事業家が廣い畑を並べて土に親しんでゐた。エムさんは其の事業家の中でも筆頭組で、殊に美しい娘さんがゐる言ふので、地味な人は勿論ホノルルから流れ込んだ青年達の注意を集めてゐた。
青年達は夜になるとエムさんの家に押しかけた。エムも破れた淋しい心に多少でも慰めがほしいと思つたのが、青年達と一緒になる場合が多くなつた、そして或る日、私に意中を打ち開けた、娘に對して思召があると言ふのだ。

「ヨク解つた、俺も男だ、妻に貰つてやる然しホノルルで結婚生活をしたことは絶対に秘密にせねばならぬし、私の言ひつけを厳守して貰ひたい、昔の諺にも將を射んみせば馬を射よと言ふ、當分娘に話しかけてはるけぬ、専らお父さんの機嫌をきれ、それには之れだけの話題を持つて行け」と私もよせばいいのに一肌脱ぐことにした。と言ふのは、第一、彼の境遇に同情したこと、第二に他の青年よりも圖抜けてよく働き、既に私の片腕たらんとする見込がつかれたからだ。到頭婚約と言ふところまで清きつけた。同様に私の知人が經營してゐるレストランがあるので、その裏の狭いルームで一杯買つたのである。田舎の事だ、鏝の刺身に、布哇正宗を汲んだのである。何と言つても斯うしたことは目出たいものだ。
宴會後、わたしの計らいで二人だけをルームに残し皆んな引下つたのだ。
わたしはアイカネと他の一室で残りの酒を汲み乍ら、さうか二人が仲善しになるやうに、心の中で祈つたものだ、私も斯うした點、案外純真なのだ。
遠く、近くに、鶏の聲が聞えて、寒い高原の夜は明けた。氷のやうに冷たい水で洗面を済ました私は、ニヤ／＼しながら、前夜若い二人を置いたまゝのルームをのぞいて驚いた。定めし嬉しい恥しい二人だと思つたに、男はルームの一角に、女はその反対の一角に、互に陣取つてマツさうな顔をしてゐるのである。たゞ事でない直感した私は先づ別室に男を呼んで「一体どうしたのだ、これまで色々世話をやかせて、又この上手敷をかけるのか」と叱るやうに言ふと、男は蚊のやうな細い聲



隨想 微苦笑行進曲

1948 五月

海里 味朗

どうしたんだい、随分派手なネクタイを
かけて、私は苦笑し乍ら、こゝまで言つ
てハツとした、言ひ過ぎなのだ。

知人から贈られてネ、派手とは思つたが
金を出して新しく買ふよりは経済的だし、
それに贈つてくれた人の好意を尊重するこ
もにもなるしネ、

その言葉を聞くまでもなく、私は穴があ
れば入りたいたい氣持だつた。他人の服装につ
き軽々しく批評すべきでないと感じた。

相當の年輩の同僚で流行のスーツ

で歩いてゐるのを見るが私にはそれが笑へ
なくなつた。最近隣のエー夫人から、うち
のボーイには小さくなつたて数組のスー
トパンツを頂いた、殆ど新物同様だ、こつ
そり穿いて見るミ腰のあたりもよく、はき
心地もいい、然し私にはまだそれを穿いて
外出するだけの勇氣が出ない、何處までも
中途半端の人間に出来てゐるらしい。

年末になるミ、ホノルルの街頭は買物客
の氾濫だ、忙しく自動車群を捌いてゐる交
通調査の手の先に白い手ぶくろを發見する

であろう。十二月さ言へ、暖國のハワイ
だ、それに儀式ばつた事の嫌いな民主國だ
何事ぞ花見る人の長刀ではないが何んの手
ぶくろぞと、瞬間、嘲笑に似たものを感じ
たが、これは何も寒さを防ぐためでもなく
妙に氣取つて体裁をつくらう爲でもない。
遠くの自動車からもサインがよく見えるよ
うにミの心遣なのだ。

坦々砥の如き街道を疾走する自動車の快
適さのみ見て来た目に、時々數人の者が動
かなくなつた自動車を汗だくで押してゐる
のを見受ける、文明の利器にもこれあるか
のだ。自動車ミて人間から使はれてばかり
はない、人間を驅使する時もある。それ
所ではない、斷々乎ミして人間の命さえ斷
つ場合が枚舉に暇ないのだ。

自動車は自力で走るのが常識で、これを
前から引つばつたり、後から押したりする
所に滑稽味を感じさせる。

バスの中で自分の膝を搔くのに不思議は
ないが、時々間違つて隣の人の膝を搔いて
ゐる人がゐる。

子供が子供の服装をしてゐるのは常識で
何ら注意を惹かぬが、大人ミ同じ服装をし
てゐるミ微笑ましや、又一種の嫌氣さえ
覺えさせられる。

場末の或る小さいお家から人が一人出て來
た。次いで二人目、三人目、四人目、五人
目、六人、七人さ出て來るに及んで、住宅
難に同情する心よりも先に一種の滑稽さを
覺えさせられる。

人間ミ云ふものは常識に反した事に會へ
ば何時もおかしくなるものミ見える。
冬に夏の服装をしてゐるのは氣の毒だが、
夏に丹前等着込んでゐるのは、これ又笑ひ
の種となつてくれる。

夕だちで人々が蜘蛛の子を散らすように
物の蔭を求めて走るのが常識だ、その中を
悠々迫らざる態度でポツポツ歩いてゐるの
を見るミ頭の健全さを疑はせるのが定石だ
然し、その悠々歩く主人公に、足に故障が
あつたり、體の工合が悪かつたりする場合
が人生には多々あるのではあるまいか。

(一九四八年 五月)



随想 美田を買はず

海里味朗

1948 四月

移民局中庭の落葉を掃きながら家に残して来た女の子の事が頭を掠めた。仕事かえりの自分の姿を映出すや、夢中になつてゐた土イジリをやめ汚れた手のまゝ抱きついて来る子供だつた。夕方の来る度毎、父の姿を探し求めてゐるのではなからうか、と思つた途端不覺にもホロリ落涙したのだ、さうだ、自分は監禁されたのだ、この時ほど監禁と云ふ事實をはつきり自覺させられた事はない。子供に對する愛の感傷だ。

時は流れてこの頃、あれでよかつたのだらうか、ミ時々疑問を持つようになった。

□ 昨今、同年輩の友人に會ふと、きまつて子供についての悩みを聞かされる。エーさんは商店主である。獨り息子がイタリー戦線で赫々の武功を樹て、除隊歸宅した、いよゝゝ子供に家業を繼がせる時が来た。喜んだのも束の間、子供はイタリーに残した可愛い娘の許に行くべく再び軍服を着る身になつた。今度歸布しても家には入れない、エーさんカン／＼になつた。

女の子

□ ピーさんは請負師である。除隊になつた子供に家業を手傳はせる事になつた。子供の仕事は朝七時までにピーさんの所に集る仕事人をツラツクに乗せて仕事場まで送り迎へするにあるが、その子は八時頃にならぬと出て來ず、その間仕事人を待たすため毎朝十數分といふ損をするのだ、いくら言つて聞かせても此のズボラがなほらぬのだ。ミピーさんは泣き出しさうな顔をするのだ。

□ つた、エーさんも、ピーさんも自分が貧困な両親に育てられ、貧より辛いものはない。身に沁みてゐるので自分の子供だけには此の苦勞を見せまいと身を粉に働いた結果、子供に譲るべき相當の資産を作つてゐるのだ。

□ 子供に家業を譲り老後を樂に暮さうと願は捨てました。死ぬまで資産は譲れません。子供は子供、自分は自分、自分で自分の老後の生活を保障するより外はありません。

□ 今になつて米人の偉さが解りました。ゼームスは人も知る富豪の息子ですが、二十才になると共に、親よりの援助を絶たれ獨立自營の生活に追ひ込まれました。随分金に困つた生活をしたが、決して親の援助を受けず、その資産さえ當にする氣風が見えませんでした。獅子は生れたばかりの子を千じんの谷底に蹴り落して其の力を試す。ミ云ふが、それにも似た親の態度も雄々しいし、富豪である親を頼らない子供の態度も立派だと思ひます。

□ この資産をやらねば子供が困るだらうと思ふのは間違ひである。この間違ひを改めないから子供が自分の意に従はぬ。腹も立つし、悩みもするのである。ミエー、ピー兩氏も遂に此の結論に達したが、布哇の日本人社會には之に似た事件が今、ゴロゴロしてゐるのではなからうか。

□ 或日バスの中で可愛い子供に何度も何度も頻りにしてゐるお母さんを見た。子供はその度毎に母の手から逃げ出さうとするのである。漸く這ひ始めた幼児に母親が手を貸す。幼児は却つて嫌がり自分の力で這ひ廻らうとするのである。

西郷さんは子孫のために美田を買はず

□ 言つた、子供に對する愛は感傷的や盲目的であつてはならぬ。又報酬を求めらるものであつてもならぬ。

□ シーさんの息子は近く結婚する。嫁に對して氣がねするの嫌だし、嫁さんに氣苦勞させるのも可哀さうだから別に家を持たすことにしました。ミシーさんは朗かである。けに親の子に對する愛は絶対である。斯くてこそ白がねも黄金も玉も何せんに子にます實世にあらめやは

(一九四八年)



想隨 バスと人生

海里 味朗

1948 三月

夜學校を濟まして東京から横濱に歸つて行く嚴冬の省線電車内……驛に着くミドヤドヤミ降りて行く人……その一人々々が歸つて行くであろうそれらの温かいホーム……間髪を入れず疾風のやうに乗込んで来る新しいお客達、その人達が行くであろうそれらの目的地……を想像して、つい感傷的になつた旅の子時代もあつた。

この稿を書いている二月初旬は、まだ夜明けが遅く、仕事に行くべく暗い中をバスに乗込み、バスの中で夜明けを迎へるのである。乗る人、降りる人、老若男女、千差萬別、バスの中自体が小さい社會であり人生である。

電車時代から顔見知りの一支那人、男子も立停まつて見る程の美青年だつたが、それが昨今は顔には霜を頂き、顔には深い皺を刻んでゐる。バスの中で老いて行く人。それは彼一人ではなく、私自身もその群の中の一人なのだ。

乗客の大部分は若い。時々腰はアツサの弓を張る同胞老人を見受ける、何となく氣

が惹かれるのである。草分け同胞の苦闘を思ふ時、自然に頭の下つて行くのを覚える。布哇の日本人は世界中何處にゐる日本人よりも幸福だ、とよく聞かされるが、この幸福のいしづえを築いてくれたのがこの老人達である。

それから氣のつく事は二世、三世のお嬢さん中、美人の多くなつたことである。女

は己を喜ぶもの、爲にして、かたちづくり、士は己を知るもの、爲に死す云ふが、近來の女性はお化粧が大變上手で一層美しく見せるのかも知れぬ。この調子で美人が殖えて行くに後は醜女云ふものが少なくなり却つて醜女の方がチャホヤされる時代が来るかも知れぬ。妙な事まで考へさせられる。

横顔の美しい人も正面から見ると左程でもない場合が多く、正面から見ると美しい人も横顔は左程でもない場合がある。それかと思ふに後姿が素敵によく、顔の方がこれに伴はない人もある。見る角度により美しくもなれば、左ほどでもなくなるのだ。出

來れば美しく見える角度からばかり見たいものだ。人の缺點許り探し廻る人があるがそれよりも美點の方を力を入れて探したい

又顔や姿はまづくても、美しい心の持主がある。田畑の雜草をさるの容易だが、心田に生ずる雜草は取難い云はれてゐる。顔や姿の美は誰にでも解るが、心の美の方は凡愚には解らない。よく美人のこゝを外面如菩薩、内心夜叉云ふが、この邊の戒めらしい。心頭を滅却すれば火も亦涼しの心境には却々到達出来ない。

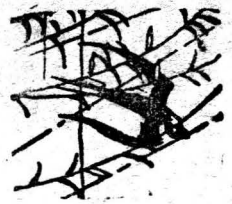
バスの中で話し續ける人、黙り込んでゐる人、様々である。一体さうしてあんなにしゃべる種があるのたろうと思ふこともある。最近讀んだ「沈みゆく信濃」の中に「人間さういふ高等動物は結局淋しがりやなんだ、常に誰かしらを側に置いてゐなければ堪え得られない弱虫なのだ」さういふ一節があつたが、誰か話してゐない淋しいのも事實だ。

白人の子供を抱いた若い女が乗つてゐる國際愛の結晶かなと思つてゐる。下車する時、一人の白婦人と一緒に立つた。彼の女は子守さんだつたのだ。人生を見る上に斯うした早合點も多い

人々が呼吸してゐることを、しみじみ感じたことがある。それは走つてゐたバスがピタリと停まり、暫し微動だにしない瞬間だ。人々の胸邊の動きを今更のやうに感じた。人々は生きてゐるのだと感ずる。共に、何か動物的の臭ひを覺えさせられた

歸途のバスの中では、よくアクビをする人を見受ける。仕事に疲れての歸途だ。この稿もアクビをされる前にピリオッドを打たう。

(一九四八年三月)



隨想 榮辱得失

1948 二月

海里 味朗

田舎の小さい店で、亭主は耕地の仕事に行き、お上さん獨りで切廻してゐた。私の顔を見るに、まあこんな小さい店へよく注文に来た。ゆつくりしてくれ、薄汚ないケチンに引っぱり込んで、御馳走してくれるのが常だつた。その純真さが商賈ですれからしなつてゐる荒れた私の心に慈母のやうなうるほひを覺えさせるのだつた。

何かで感謝の意を表したいと念願してゐた私の眼に、お上さんが愛育してゐるらしい洋蘭の二三鉢が目についた。私も洋蘭には相當の趣味を持ち自慢ではないが、ホルルの仲間の間では多少評判になつてゐる男

早速開花期の近づいてゐる一鉢を贈つた。

お上さん、これは有りふれたオケットで人に自慢出来る代物ぢやないのです、一本釘を打つて置いたが、さてその花が開くミ田舎では類稀な美しい花、お上さんの喜びは非常なものだつた。お客さんの誰彼に私オケットの事を賞めた、えるのだつた

或る日曜の朝だつた。パパ汚ない身なり、のレデーが家の前を行つたり來たりしてゐるよ、息子の注進を受けた。吸つてゐた

ラツキ、ストライキを急いで灰皿にすりつけて私は戶外に出た。例のお上さんである私の顔を見ると地獄で佛に會つたやうに

ツコリ笑ひ、あまり屋敷が立派なのでハオレのうちと思ひ、どうしても入る事が出来なかつたといふのである。

パーラーに通す、さうもおどくしてゐる。紅茶を勧めても手を出さうとしない。まあ美事なうち、何もかも珍らしいものばかり、ミひたすら驚き入るばかりであつた。大体、私のハット、ハウスを見るのを目的で來たのだつたが、さうくこの方はのぞきもしないで着こうとして家を辭し去つたのである。

それから一週間ばかりして、お上さんの店に行くに急に改まつて、これまでの失禮を許してくれと云ふのである。こんな汚ないケチンに誘ひ込んで有り合せの田舎料理を強いたことが恥しいと云ふのである。何を急に馬鹿なことを云ふのか、ミ云つても以前のやうに打ち解けてくれないのである。お上さんは段々私から遠ざかつて行くのだ

つた。

富貴には他人も合ひ、まづしき時は妻子も離ると昔の言葉にあるが私のこの体験はこの言葉の逆を行つてゐるやうだ、だが私が多少でも裕福な暮らしをしてゐることを知つて、お上さんは私から遠ざかつたのである。

學窓から同時に社會に出た所謂竹馬の友でも片方が段々出世すると近づき難くなるものだ。對等の交際が出来なくなる。自然自らを卑下して引退るようになる。毎年暑中休暇を利用して催された村の小學校の同窓會で上級學校に行つてゐる者に對し、この日限り制服制帽を脱いでくれるように注意した一先生の心づかひを、今もなつかしく思ひ出すのである。

富んだ者が心から貧しき者を受し、貧し

き者が心から富んだ者に親しむ社會の出現が望ましい。然し富むと云ひ貧しき言ひ裸で生れて裸で死ぬることに思ひ到れば假の現象に過ぎないのかも知れぬ。

けに人の榮辱得失は、さながら一睡の夢に似て、秋の空の瞬くまに晴曇るより猶果敢なし。それ千金はなほ得易く、斷金の友は甚だ得難し。

お互に富まうと、貧に落ちやうと、永久變らぬ友情を持ち合ふ事が出来たら、こんな幸福は滅多にあるものでない。

第二次大戦を機會に幾多の友情がフルイにかけられた。お互に生きた學問をさせられた、この意味でお互に歩いた苦難の道は却つてお互を幸福に導く礎石になつた云へやう。(一九四九年三月)



覆水盆に返らず

海里味朗

1948 A

「こんな話が雑誌の原稿になるのなら毎月話して上げますヨ」

既に数杯のハイボールを平けた山下さんは、氣持になつてゐる。しだれ柳の下で、煙のハネる音がした、ホテルでも有名な某料亭の離れである。

「これで若い時は鳴らしたものをサ、ホテルの店の方へはホテルに泊まることにしてゐた。ある所ではお母さん、娘の両方から好意を持たれた事もありましたよハハハ」
布哇島のヒロ市。あそこは文士とか歌人とか言はれるグループから銀雨降る雨の都などと言はれてゐる所ですが、そこで起つた事件です。

例の如く私は店から店へ注文をこつて歩いてゐると、或る店先で「あんたが山下さんか」言ふ聲がする。
驚いてふり返るに、綴り方教室に出て來るやうな、みすばらしい、しかもどこか頑固さうな親父さんが立つてゐる。

「一寸近くの公園まで来てくれ、話すことがある」言ふ。物騒とは思つたが、私も男一匹「ヨロシイ」に應じた。二人ベンチに腰を降ろすや否や「娘を返してくれ」云ふのである。

「親父さん、何に何を云ふんですか」

「さげけるのも大抵にするがよい、私の可愛い、大事な獨り娘をどこにかくしたのだ居なくなつて今日でもう三日にもなる、親の身にもなつてくれ」

「おい、黙つて聞いて居れば好い氣になつて、私に言ひがかりをつけるのか」
「あんたこそ世にも珍らしい大悪黨だ。自分でわしの娘をかどわかして置き乍ら」

これは確に誤解だ、両方が興奮したので、はいけないと思つたので、ぐつと調子を下けて

「親父さん、わしは決して逃げかくれはしない。チャンこゝに居る、自分のした事には何處までも責任を持つ。然し知らないことはどうにもならない、一体どう云ふ事件か詳しく話してもらはうではないか」

親父さんははららしく「うん」とうなづいた。

「實は今から三日前の晩、おそくなつても娘が家に歸らないので心配になり、仕事先のドレスメカーに行くと、良子さんなら今晩ホテルから來てゐる注文取りの山下さん遊びに行く、はしやいでゐたこの事に、それからすつと、あんたを探してゐたのだ」

この時、私はチクリ針をさされる思ひがした。

さうだ、丁度エム商店前だった。買ものを済ましたらしい彼女が立つてゐた。鄙に稀な美しい娘である。年は十六、七歳か。ここが高峰秀子に似てゐる。斯ういふことには馴れつこになつてゐる自分だ。先づ意味シなウイソクを送つてから、あたかも命令するかのやうに「今晚六時頃こゝに待つてゐるんだヨ」云ふ、その娘は顔を赤くして軽くうなづいたものだ。「ほんまに娘十六歳ごろ、歌の文句ではないが可愛いものだヨ」山下さんはぐつとハイボールを飲みほした。

所が浮氣者の私のこゝである。その夕方の迫る頃は外の娘の所に遊びに行つて、この店先の約束を今の今まで忘れて居たのだ

「親父さん、濟まないこゝをした、娘さんご約束したのは事實、だが實はその約束は實行しなかつたのだ。然し斯うなつて見れば責任は私にもある。どうしても娘さんを探し出してあんたの所にお返しする。わしも男だ、知り合ひの探偵、岡山さんのところに行かう」親父さんをうながしたのである。

事件は探偵の手に渡つた。當時の布哇毎日を読んだ人は覚えてゐるだろう。近來の獵奇事件として岡山探偵も腕を振つた。その娘はヒロから二十哩西に行つたパウイロ耕地、その青年タキシートの家にかくされ、二人で蜜のやうな日を送つてゐる事が判明した。親父さんは探偵同伴娘のところ

にどなり込み、家に歸るやうに勸めるが、どうしても應じない、首に繩をかけて連れ戻すわけにも行かぬ「山下さん、行きが上り上あんたも出馬して娘を説いてくれ」とのこゝだつた。

その青年の家で良子に會ふ、彼女は私を見るなり「ウソつき」言つたきり泣きしやくつて顔を上げないのには心臓の強い私も參つてしまつた。

裏切られた處女の身を可憐にしての反逆だつたのだ。待ちほけを喰はされて、魂を體を持って餘した彼女と、何か獲ものはなにか鷹の目、鷹の目だつたタキシートの間に一つの諒解が成立するのは自然の勢ひだつたのだ。

この方面で海千、山千の私も完全に兜を脱いで懇願これ久しゆした後、娘は歸宅を承知してくれたのだ。

父親一人に娘一人の家庭。可愛い娘をこり戻した親父さんはニコともせず「娘は歸るには歸つたが、もうキズ者になりました」

それは私が直接キズ者にしたのではないが、私は直接キズ者にした以上に良心の呵しやくを受けたのである。誰でしたかネ、日本の小説家で「戯れに戀はすまじ」と云つたのがありましたネ。

（一九四八年一月）



想隨 百足の虫

堀川 伊助 堀川 海里 味朗

谷の底でキャンプ生活をしてゐた時分、デザートとして毎夕の食卓に出たケーキ類のおいしかつた事を今も時折思ひ出す。それは斯道に経験の深い干ヤチさんの手になつたもので、今夕は何が出るだろうか、ミ食卓に就くのが楽しみだつた。毎日の單調な生活にどれほどか潤ひを興へてくれたことか。斯くまで皆から感謝された干ヤチさんは頭の低い無口な人で、自分の技倆を誇つたり、骨惜みをする事なき毛頭なかつた。野菜部隊の人々は背丈ほどもあろう雑草を除去し、岩石を掘出して荒地を美しい畑と化した。地に降ろされた西瓜の種ミトウモロコシの種は芽を出して日々に延びて行つた。その裏には水や肥料をやつたり、雑草を取つたり額に汗しての勤勞があつた。食卓に置かれた一片の西瓜一本のゆでトウモロコシをどんなにか感謝しながら頂いたことか。

キャンプでは月に一度の面會日に家族を喜ばせるため玩具だの、ツレイなどが造られた。ケーキは人も知る不器用な人だつたが、他の人々も忙しいので他に見頼まず不器用なりに自分で造るよう心がけた。所が一度仕事をスタートすると、色々な人が来て夫れを手傳つてくれ、豫期以上に美事なものになつた。人々の親切をしみる有難く思ふのだつた。

集團生活をして人から受ける恩の如何に多く、これに酬ひるこゝの如何に少いかに思ひ至り濟まないと思つた。

多くの人の爲になる事をしたい、せめて御恩返しの一途にも思ひながら、それの出来ぬ場合が多い。自分には人の頭に立つて御世話する力はない。集團生活をして感じるのは萬卒は得易く、一將は得難いことだ。人々から頼まれて英語の手紙のストララ書ける人をどんなにか羨ましく思つたことか。便所の掃除をしながら、ケチンの皿を洗ひながら、自分には何ら取えない事を悲しんだのである。

自分の知人にグラージを経営してゐるものがある。そして人手に不足してゐる。色

色親切にして貰ふので何か恩返ししたいと思ふが、自分にはグラージの中で手傳ふことがない。如何に御恩返ししたいと思ひながら、御恩の返せぬ場合も多い。

恩の爲に命を擲つて云ふが、その機會のない場合が多く、人は社會に對し一様に大きな借金をしてゐるのではあるまいか。

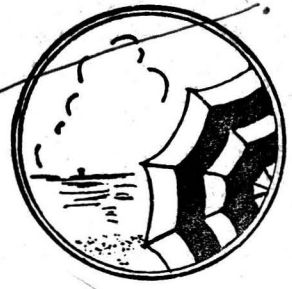
人には誰にでも不平不満がある。何も彼も癪に觸るこゝばかりの時があり、こんな時きつこ胸は痛む。然し一方、人々が受けてゐる好意の數々を思ふ時、自分の世界の明るくなるのを覺え、力を盡して之に酬ひたいと思ふ。

所詮人間は獨りだ。獨りで死んで行かねばならぬ。死に際しては友人知己、親兄弟も助けの手を差延べ得ない。この大きな事實を知らぬ譯ではないが、さうした中で人の好意は嬉しく、報恩感謝の念に燃え得る幸福を思ふのである。

「ムカデの虫の死して後もその倒れざるものは助け多きによりてなり」

「片糸はヨリヲならず、ヒトツクダナン」

「コは鳴らしがたかり」一九四七年三月



想隨

小さい白い花

海里味朗

モック・オレンヂの花が咲く頃になつた
 ワン・パイ・ツワールの荒板で造つた、ミ
 ある古い家の前で気が遠くなる迄に強い芳
 香を放つてゐる。

嘗てのモヤンブ生活。兵隊さんから譲つ
 て貰つたモック・オレンヂの一本をバラツ
 クの前に植て、朝夕水をやつてゐるうちに
 見る／＼大きくなつて行き、その濃い緑が
 周囲の赤土の上に浮び上つて得も云はれぬ
 清新さを覺えさせた。

斯ふした苗木の生長の早さに射る矢の如
 き光陰の早さが思はれた。一体何時まで續
 くキヤンブ生活か？ 自身の前途、家族の
 將來など思つてソツと暗い氣持になつたの
 も今は遠い昔だ。

このモック・オレンヂは私の郷里沖繩に
 多く、小さい赤い實のなる頃は澤山のモズ
 が集つて來ますヨ、ミ語つたエム青年だつ
 た、戦時中の一期間を一緒に勞働したエム
 君だつたが、そのエム君も何時の間にか私
 の周囲から去つて行つた。今はどうして
 る事やら……。

家々のヤードを見て歩くのは楽しみな
 のだ。色々の形に刈り込まれたモック・オ
 レンヂの生垣は、私の好きなものゝ一つだ
 生垣だけ見るに、これは四五フキート以上
 にはならぬ灌木かと思はれるが、どうして
 場所によるミ家の屋根よりも高いものを見
 受ける。小さい白い花を一面につけてゐる
 のは斯うした鉢の洗禮を受けぬ古木である
 地上にこぼれた赤い實を拾ひ集めて、う
 ちに持かえりヤードの前方に一線を劃して
 種蒔きした、好みの生垣を作らふに寸
 法である。可愛い芽が行儀よく並んで頭を
 出した。成長するに連れ、小さいのから間
 引いて大きくて丈夫さうなのを殘さうと云
 ふ算段だつた。肥料も與へ、水も缺かさぬ
 が中々成長しない。その中に近所の犬が用
 だしに來て若芽を踏む、子供までがボール
 を追ふのに夢中で若芽を蹂躪し去るのであ
 つた。

柔かい土の苗床を作り、そこで或る程度
 まで大きくなつたのを地に移植するに云ふ
 手を知らぬでもなかつたが、それを面倒に
 思ひモロハしたため、つひに失敗のうき目
 を見たのである。

急がば廻れ瀬田の唐橋。苗床を造つて苗
 を作り、それを移植することは如何にもク
 イムミ人手がかかるやうだが、地上にすぐ
 種を蒔くより結局早く目的を達するのであ
 る。

集團生活をするに、物の配給なき受ける
 場合、長い列を作るのが例である。列の後
 方のものが、これではやり切れぬミ列を離
 れると結局配給にはありつけない。靜かに
 我慢深く自分の番の來るのを待つ心境こそ
 尊いものではあるまいか。

戦時中に俄成金ができた。これを呼んで
 人々は幸運だ云ふが、よく注意して見る
 と、それ等の人はその金を儲け得る素地を
 平時に於て作つてゐるのだ。豫め店舗や
 工場などを持合せたこともそれだし、商賣
 上の經驗、自身の技術なき云ふのも素地
 の一端云へやう。斯うしたものが二日や
 三日で得られぬことは解り切つてゐる。

庭のモック・オレンヂは今二フキートば
 かりに延びてゐる。早い晩餐を終り、フロ
 も使ひ、寛いだ氣持で小さい葉をゆすぶる
 のだ。

うち水の後の涼しさ。毎日暑いではあり
 ませんがと語り合つた今日の暑さを遠い國
 の出來事のやうに回想するのである。やが
 て私の庭にもモック・オレンヂの花が咲き
 てもだらう。

(四七九、三〇)



隨想 兎と遊ぶ

海里味朗

1947 7 A

小屋の前に近づくミモウ金網に前足をか
けて、こちらから差出す手を持つてるの
だ。綺麗に洗って拭き上げた陶器の一つに
餌を、そして他の一つに清水を。波々盛
つたのを入れてやるのだが、待ちかねたや
うに其の清水をむさぼり飲む様を見るミ、
何か自分がよいこをしてるやうに思は
れる。日曜日にも拘らず早起きして仕事す
る甲斐がある嬉しくなるのだ。

犬、兎、白鼠、豚鼠等ミこんなまで仲
善にならうミは曾て夢想たにしなかつた處
だ。八犬傳の伏せ姫が八ツ房の犬に養はれ
たり、金時が山中で熊、遊んだり、人間ミ
ケダモノの並々ならぬ關係を物の本に讀ん
だ事はあるが、自分自身の生活が此んなに
まで動物に結びつかうミは.....

けさも白鼠の兒達が一週間見ぬ間に、ミ
んなにか大きくなつてゐるだろうミ、想像
しながらバスに揺られてゐるのだ、マーケ
ットで買物を済ました人達以外に乘客まば
らなサンデー朝のバスの中、
一時、十數匹もゐた犬は次から次へミ實
験に供されて唯一匹残つた。それは小型な
毛の長い可愛らしい犬で餌を持つて小屋に
はいるミ、もぶれついて何時はてるミ思
へない。

この犬がお友達になくなつた淋しさの爲
めか、次第々々に元気がなくなつた。おか
しいと思ひながら数日過ぎた或日、ふと抱
き上げて見るミ體中ダニに襲はれてゐるこ
ミが解つた。

小屋のなかに消毒水を撒いたり、體に色
色な殺虫薬をすり込んでやつたがダニはな
かく絶へなかつた。其うちに餌も食べな
くなり、水も飲まなくなつて冷たい骸ミな
つてゐるのを或る朝発見した。その中小屋
の中に青草が生える様になり、あれ程澤山
砂の中にあるダニも一匹も見受なくなつた
研究が完成したアカツキには是等尊い犬
の犠牲者のため、僧侶を招いて慰靈供養を
をやりませうミ主人のオーさんもしみく
語つてゐた事だつた。

犬がゐなくなつて、もう半年にもなろう
か、
兎はお産が近づくミ自分の毛を抜いて産
褥を作るので前以て出産を知る事が出来る
うの毛でついた程の嘘も云はないミ云ふが
實際兎の毛の本々々々は目にも止まらぬ程
細いものだ。毛ミ云ふより綿ミ云つた方が
近からう。
人間もお産が近づくミ色々ボロ類を集め
るものですヨ、ミテイ開教使が何かの話の
序に洩らしたのも、モウ二十年も昔になら

うか。母性愛ほど強いものはない。我兒の
爲めには毛を抜いたり、ニクまでもそぐの
である。

綿のやうな毛の中で何か靜かに動いて
る。見るミ毛一本もないニクのカタマリ
だ。觸つてはいけません。一度人間が觸れ
るミ母親が兒の面倒を見なくなりませう、
ミエフさんに注意された。

ニク塊にもケが生え、眼が開いて自分
餌を食べるやうになつた頃の兎はホントに
可愛らしい。一、二イスター祭に教會から
借に來られたが、サンデー スタールの生
徒達を狂喜させた事だつた。

エフさんも私も兎飼には無經驗である。
体格のいい、丈夫さうな雄を二匹ほき別の小
屋で飼ひ、機をみて交らん、雌をその箱に
入れ二三日して連れ出すのであるが、多く
の場合それで成功を収めた。

一匹、特にケの長い美しい雌がゐた、他
の兎達は種類が違ふらしく、何か女王ミ
いつた感じだつた。之を殖やませうミ、
例の雄の箱に入れたが、その女王は逃げ廻
つてばかり居り二三日後にはつめたくなつ
て箱の中に横はつてゐた。

可哀さうな事をしましたネ、兎を殖やさ
うミ思へば始終雌の生理状態に注意し、機
到れりミ思ふ時雄の箱に入れてやるのです
ヨ、夫も之は必ぎ、ですが、ミテイ氏が注

意してくれた。そして本格的に兎を飼ふ人
は多産性の雌のみを利用し、二匹か三匹し
か生ぬ雌は早くニク用に處分するのですミ
附加した。

△安遠源雨氏……本名は忘れ

たが朝日新聞の記者として
テクノやつてゐた、女性
的な男で文學に志ざして耕
地から出廣し、朝日に入社
したので、轉じて日本語
學校の先生となつた、抑留
後は歸布して時をなが
く鮮魚行商人になつたとか
……の消息は不明だ

外聞記者の名からして
小説家の様な男、布哇朝日
で三面を擔當してゐたが、
戦時中は布哇タイムスに連
載小説を執筆したメイド・
イン・ハワイの小説家だ、
今はホノルルで靴商店を開
いてゐるが、新聞に未練は
ないかしら

△前山謙司氏……ヒロ新ぶ
んで獨學と努力とを以てグ
ンノ伸びたのは前山君だ
兎に角凡人の持たない才を
持ち日英兩語ともに巧い。
布哇毎日でも大いに健筆を
振つてゐた。今はビスネ
スマンに選つてゐる。

阪口利男……色、金と
は無かりけり、と言ふ陳
腐な言葉……は金は
な……記者と
しては十二分に……

……布哇朝日に記者
として……

澤本十郎年暮び日に歸り
更にタイムスに復職。新聞
人らしい容儀と手腕を持ち
演藝趣味にも……
△田中彌六氏……十一才を
以て復員前山新聞社長とな
つた人……

……長
は農……方……
方となつて……
賞讃に値ひつると言へやう
今も……
農……會社の……

……飛ぶ
ような……
日……
新聞……
……
……

……
……
……
……
……

△比嘉武信氏……永い事布哇
毎日に勤務、更にクカイセ
ン日校長から轉職すること
七、八度、今度布哇サンに
招聘されたケツブツである
頭腦は仲々勝れてゐるが堅
忍性に乏しい。だが今度は

ケンニンフバツ大いに健筆
をふるつて欲しい。切に望
むところである。
△村上實氏……日布時事ヒロ
支局長として勤むること二
十餘年、ヒロの新聞とは關
係はないが新聞人としての
存在は大きかつた。無名の

一青年から獨學勉勵して屈
指の雄辯家となり、趣味の
俳句は不斷の研究と句作を
怠らず、その精力的な點に
も驚くものがある。現在は
ヒロ印刷株式會社の支配人
として腕を振つてゐる。

△大久保清氏……布哇報知の
ヒロ支局長としてやつて
のけた。氏は筆の人と言ふ
より舌の人で人を懐柔する
ことに於ては天才的手腕を
有してゐる。今は新聞を離
れ花屋ラヂオ放送料亭な
ど多方面に手伸ばしてゐ
たが、あれでまだ仕事が大
りないらしい。

……
……
……
……
……

△落合惠吉氏……人に嫌な顔
を見せないのが誰でも好か
れるタイプ、ピンチヒツタ
ーとして布哇毎日に記者を
したこともあるが日本人會

の書記、商會會務員の書記
がよく板についてゐる。だ
が現在では布哇報知ヒロ支
局長として仲々忙しい
△星出昭雄氏……村上紅嵐の
女婿で、布哇タイムスヒロ

……
……
……
……
……

……
……
……
……
……

……
……
……
……
……

萬年子のねばり

ホノルル 川添 堅風

支局長として老年ながら
大いに東奔西走してゐる。
新聞人としてはまだ駆け出
しと言ふ處だが、將來への
期待をかけて岳父以上の手
腕を振つて貰ひたいものだ

布哇報知の本田綠川氏を初
め、戦争を契機に、一度はベ
ンを捨ててゐたものが、戦雲
收まつてポツン古巢に歸え
るうちに、先輩の萬年子こそ
掘泰氏もいよいよ邦字新聞を
出すことになつた。
掘さんが新聞を出すと言ふ
噂は三年前から耳にし、果
して實現するか、内心危ぶん
でゐたが、新潟縣人らしいね
ばりと熱に物を言はせて發刑
にまで漕ぎつけた実行力には
敬服する。
私など、永い事、書く一方
で新聞の經營のことは解らな
い。算盤ばかりはじてゐた

のでは新聞は出せないと言ふ
が誠にその通りらしい。然か
し一方この算盤を無視したの
では永續性がない。
互に相反するかに見えるこ
の二つの事實、その何れにも
偏せずこんせんたるゆうわの
上に立つ必要があるのかも知
れない。禪問答のやうな話に
なつて、實は自分にもよく解
からないのである。
卒直に言ふと掘さんは筆の
人と言ふより、經營の人で、
どうしてもよい記者が必要の
やうに思はれる。
記者も特徴のある人が欲し
い。コナ反響の故林さんや、

……
……
……
……
……

幾多の困難を突破して立派
な新聞が出来よう、會つて
ヒロでこの道でパンをかぢら
せて貰つた一人として切望に
堪えない。(筆者は布哇タイ
ムス記者)

③ 太陽新聞
一九四二年十一月二日

布哇渡航 の數へ歌

五十余年前、私達の草分け初
代同胞が「金の山ハワイ」を
夢みて作った布哇渡航の數へ
歌、昔を偲びつゝ歌つて見ま
せう。

一ツトセー、人の喚もさぞ高
き、金の山なるハワイ國、
われもわれもと志願する。

二ツトセー、奮發したとは言
ふものの、門出の盃するど
きに、たがわず涙の一雫。

三ツトセー、見送るところは
新港、たがひに無事だと聲
々も、煙をあとに蒸氣船。

四ツトセー、世の名所も白浪
の、神風ふきくる伊勢の灘
遠州灘にとさしかかる。

五ツトセー、伊豆の下田や横
須賀や、いとし浦賀もはや
過ぎて、横濱港につきにけ
り。

六ツトセー、胸の苦しさ打ち
忘れ、蒸氣帆前や異人館、
女郎の歌ひや三味の音。

七ツトセー、永き自由はでき
もせず、けふ出帆といふ時

は、またもや濡るる袖の雨
八ツトセー、山より高き荒浪
に、船は揺り上げ揺り下ろ

し、中には念佛神願み。
九ツトセー、戀しきカワイが
見えたとき、地獄で佛に逢

ふ心地、胸に八千代の玉椿
十ツトセー、とう／＼屈いてホ
ノルルの、千人小屋にと着

きにけり、ハワイの土に第
一步

十一ツトセー、異郷の空に來て
見れば、思ひは遠く古里の
夢路をたどる日の多き

十二ツトセー、日本男子と思ふ
とき、女々しさ何時か打ち
忘れ、又も出て行くきび昌

③ た陽新南
一九四二年
十一月二日

布哇渡航 の數へ歌

五十余年前、私達の草分け初
代同胞が「金の山ハワイ」を
夢みて作つた布哇渡航の數へ
歌、昔を偲びつゝ歌つて見ま
せう。

一ツトセー、人の喚もさぞ高
き、金の山なるハワイ國、
われもわれもと志願する。

二ツトセー、奮發したとは言
ふものの、門出の盃するど
きに、たがわず涙の一滴。

三ツトセー、見送るところは
新港、たがひに無事だと聲
々も、煙をあとに蒸氣船。

四ツトセー、世の名所も白浪
の、神風ふきくる伊勢の灘
遠州灘にとさしかかる。

五ツトセー、伊豆の下田や横
須賀や、いとし浦賀もはや
過ぎて、横濱港につきにけ
り。

六ツトセー、胸の苦しさ打ち
忘れ、蒸氣帆前や異人館、
女郎の歌ひや三味の音。

七ツトセー、永き自由はでき
もせず、けふ出帆といふ時

は、またもや濡るる袖の雨
八ツトセー、山より高き荒浪
に、船は揺り上げ揺り下ろ

し、中には念佛神願み。
九ツトセー、戀しきカワイが
見えたとき、地獄で佛に逢

ふ心地、胸に八千代の玉椿
十トセー、とう／＼屈いてホ
ノルルの、千人小屋にと着

きにけり、ハワイの土に第
一步

十一トセー、異郷の空に來て
見れば、思ひは遠く古里の
夢路をたどる日の多き

十二トセー、日本男子と思ふ
とき、女々しさ何時か打ち
忘れ、又も出て行くきび昌

ヒロの新聞界に

去來した人々

徳田 貞山

久しぶりにヒロの邦字新聞を整理すると言ふのを期として、最近の位前にさかのぼつてヒロの新聞界に活躍(？)した人々を簡単にひらつて見やう。大久保アナウンサーの言葉を借りて言へば「御参考になりましたら幸ひでございます」と言ふ處だが恐らく河の参行にもなるまい

元來新聞人は「無定(？)の宰相」と、社会の「だどかウ」スボン(？)の出入りがあるが、それも「無定(？)の宰相」にならば無冠の宰相と呼んでもおかしくない、だがヒロあたりの新聞人は要するにベンの労働者に過ぎないのだ。廣告主やピツグシヨットの鼻息をうかばなくてはならないのだ、幸ひ布哇サン新聞は独自の新聞街道を正しく、堂々と進んで貰ひたいね。今ここに組上に乗

せようとする人々は戦前に於ける「最近」の人々だけとして、その昔の人々は省くこととした(筆者は會社員)

△山村幸八氏……ヒロの新聞界を通じて縦横無盡に筆力をふるつたのは何と言つても山村火山社長だつた。同胞團體なり個人なりその痛いところに鋭いメスをふるつたのは山村老を置いて他に余り例を見ない。新聞は小型四頁ではあつたが山し

△増田貞太氏……之も不慮の人だが布哇朝日新聞の主幹で雄辯の人。その論調も仲々面白く労働問題でも大いに働いた人だ。金銭的に

△徳城信二氏……氏は抑留生活から歸つて持ちも物故したが何と言つてもヒロの新

聞「布哇毎日」の經營者としてその略歴は永い、眼鏡越しに部下を叱り飛ばした。四頁新聞から八頁へ

島青年團を率ひて壇上で獅子吼するあの姿は今もほろふつとする。

△浦田五郎氏……生粋の熊本で朝日新聞の主幹として勤めた人だ。此のタイプは主筆型で三面記者型ではない、一風變つた名文を書く人として知られてゐた。今はカウマナの奥地で野菜の生産に悠々自適の日を送つてゐる。

△大久保源一氏……少年の頃、布哇新聞の出身で、日布時、布哇朝日へ奉

△川添極風氏……布哇毎日六ヶ年、渡日して毛利式記法を研究、露布して日布時事に入社し更に戦争中新聞を離れてゐたが、再びタイムスに返り咲きした。ヒ

△獨立校出身だが新聞記者としては布哇屈指の腕利きで、文章が巧くて速記は彼に鬼に金棒の觀がある。

△齋藤芙蓉氏……コナで新聞を經營し、ヒロでは毎日筆を執り大いに活躍した。現在は教職の餘暇に布哇タイムスのヒロ通信に健筆を振つてゐるが、新聞界で此の位原稿を丁寧を書く人は極く稀だ。

リバー河畔

川添 樫風 作詞
西川 徹 作曲

一、ヌアヌ風ヌアヌ風に 小波こなみ立てば

何故なげかせつない 乙女おとめの胸むねよ

ブーゲンベリアの 二ひら三ひら

けふもリバーに 紫むらさき揺れる

二、君きみを尋ねて 遙々はるか来れば

橋はしは七橋ななはし 思おもひは一つ

足を止めて 川面かわづらを見れば

夢ゆめは果はなく 流ながれて消きえる

三、二人ふたり並んで 口笛くちふえ吹けば

燃もえる心に またたくネオン

映畫えいがか見ようか レコード聞きこか

見果みてぬ夢ゆめに 高鳴たかなるジャズよ

レイ賣り娘

川添 樫風 作詞
西川 徹 作曲

一、朝あさの入船いりぶね 夕べの出船でぶね

妾めかけやレイ賣うり 港みなとの花はなよ

レイをかけませ かけませレイを

花はなは七色しちしき 乙女おとめの想おもひ

二、送おくりませうよ 送おくられませう

愛あいのシンボル 眞赤ましかなレイよ

レイをかけませ かけませレイを

乙女おとめいとしや ひめたる想おもひ

三、波なみのワイキキ 夜虹よにじのマノア

乙女おとめアロハは 眞白ましろのレイよ

レイをかけませ かけませレイを

港みなとホノルル レイ故戀こひひし

プログラム

司會者 長谷川房江

- 一、開幕「チームソング」 團員一同
- 二、挨拶
- 三、唄と踊り「切なき想ひ出」 阪口利男
唄メリエン河上
踊磯野春子
- 四、唄「ダンディ氣質」 友澤光夫
- 五、琉球舞踊「安里屋ユンタ」 潮平タエ子
- 六、唄「なつかしのブルース」 磯野夏江
唄磯野片岡榮
踊パプリス宮本岡榮
- 七、唄と踊り「乙女舟」 磯野片岡榮
唄磯野片岡榮
踊パプリス宮本岡榮
- 八、唄「涙の乾杯」 大城勝
- 九、萬才「戀愛オリンピック」 布哇亭アチャラ事 スタンレー門井
布哇亭コチャラ事 小川昭二
- 十、踊り「旅の三味線」 イレン宮本
磯野春子
チャブスイメロデーを舞臺で紹介
- 十一、唄「港横濱花賣り娘」 エディ高橋
- 十二、唄とフラダンス「コリヤサ」 唄 ジエームス宮西
フラダンス 玉那覇エミ子
- 十三、琉球舞踊「花風」 ローズ安次嶺
- 十四、新作發表「リバー渡畔」 ジエームス宮西
作詞 川添樫風 作曲 西川とほる
- 十五、浪曲「一本刀土俵入り」 布哇虎浩事 ジエームス小野村
臺詞入り
- 十六、唄「小雨の丘」 磯野夏江
- 十七、踊「振袖人形」 磯野春子
- 十八、唄「三百六十五夜」 磯野片岡榮
- 十九、唄と踊り「小判鮫の唄」 唄 大城勝
踊 ジエームス宮西
- 二十、唄「戀のまんじゅしやげ」 二十、唄「戀のまんじゅしやげ」 唄 ドリス片岡
- 廿一、歌謡曲「異國の丘」 團員一同
- 廿二、唄と踊り「かゑり船」 唄 エディ高橋
踊 久保田スミ子
- 廿三、唄「A J A 行進曲」 大城勝
- 廿四、琉球舞踊「濱千鳥」 ローズ安次嶺
潮平タエ子
- 廿五、新作發表「レイ賣り娘」 久保田スミ子
作詞 川添樫風 作曲 西川とほる
- 廿六、唄と踊り「あゝそれなのに」 唄 坂井アリス
踊 玉那覇エミ子
バーバラ岡田
- 廿七、喜劇「彌次喜多唄道中記」 團員一同
- 廿八、唄「蘇州夜曲」 メリアン河上
- 廿九、唄と踊り「フィナレ櫻娘」 團員一同
- 三十、閉幕



